長野県松本市

松本城下町跡 HIGASHIMATI

東町

一第3次発掘調査報告書一



2006.3

松本市教育委員会

長野県松本市

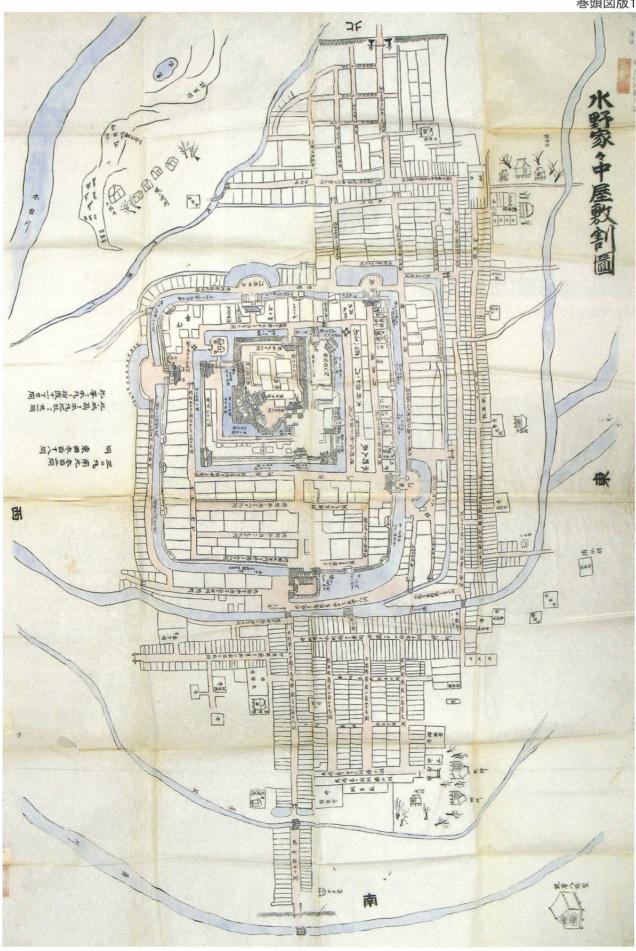
松本城下町跡 HIGASHIMATI

東町

-第3次発掘調査報告書-

2006.3

松本市教育委員会

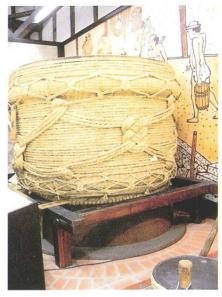


元禄期の松本城と城下町

巻頭図版2



仙台坂遺跡(東京都)出土の石組み竈



復元された石組み竈(酒の博物館)



出土した石組み遺構(Ⅲ検土2)

松本城下町の親町三町の一つである東町は松本城の東にあたり、善光寺街道沿いの宿場町・商人町として発展してきた町です。このたび当地に東部地区コミュニティ防災広場整備事業が計画されたため、埋蔵文化財を記録保存する目的で松本市が緊急発掘調査を実施することとなりました。松本市は松本城下町跡の発掘調査を数多く行っておりますが、東町については今回が3箇所目の調査となります。

発掘調査は平成16年5月から11月にかけて行われました。長期間に渡る調査となりましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、近世町人の生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思います。

緊急発掘調査は近年開発事業が増加する中で、遺跡を記録保存する目的で行う調査です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えています。そのため松本市としましては市街地の開発にあたって現市街のもととなった城下町の発掘調査には力を入れております。

最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた地元関係者 の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

例 言

- 1 本書は、平成16年5月17日~11月16日に実施された、松本市城東2丁目3番に所在する、松本城下町跡東 町第3次調査の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東部地区コミュニティ防災広場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発 掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、1章:櫻井 了 4章2節:竹内靖長 その他を小山貴広が行った。

4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄·注記:百瀬二三子

石製品実測、トレース:望月映

土器·陶磁器接合:中澤温子

金属製品実測、トレース:洞沢文江

土器・陶磁器実測、トレース:上條信彦、白鳥文彦、

遺構図調整、トレース:村山牧枝

竹内直美、竹平悦子、八板千佳 遺物写真:宮嶋洋一

木製品実測、トレース:久根下三枝子、蓑島菜奈

総括·編集:小山貴広

5 本書で略称を用いる場合は以下のとおりに表記している。 土坑→土1、ピット→ P1、溝状遺構→溝状1、間知石列→間知1

- 6 本書では土層を略記号で表した。各土層との対応は下記の通りである。
- 7 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館 (〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 ℡ 0263-86-4710 Fax 0263-86-9189)に収蔵されている。 表記法 土色(混入物·含有量) 含有量 多量:a 中量:b 少量:c 微量:d 土層記号一覧

土色

赤褐色土:1 茶褐色土:2 黄褐色土:3 褐色土:4 暗褐色土:5 灰褐色土:6 暗灰褐色土:7 灰色土: 8 暗灰色土:9 黒褐色土:10 黒色土:11 黄白色粘土:12 黄色粘土:13 黄灰褐色粘質土:14 黄 褐色粘質土:15 暗褐色粘質土:16 暗灰褐色粘質土:17 黒褐色粘質土:18 褐色砂質土:19 褐色砂礫土: 20 暗褐色砂質土:21 暗灰褐色砂質土:22 暗灰色砂質土:23 黄灰褐色砂質土:24 青灰色砂質土: 25 赤褐色砂:26 黄色砂:27 褐色砂:28 灰色砂:29 暗灰色粘質土:30 黄灰褐色土:31 灰褐色 粘土:32 灰色粘質土:33 灰褐色砂質土:34 灰褐色粘質土:35 灰色粘土:36 炭化物層:37 焼土: 38 灰:39 腐食土:40 黄褐色粘土:41 暗灰褐色粘土:42 暗灰色粘土:43 灰色砂質土:44 暗褐 色砂:46 黒褐色粘土:47 黄灰色粘土:48 灰褐色砂:49

混入物

黄色:A 黄白色:B 黄灰褐色:C 黄褐色:D 赤褐色:E 褐色:F 暗褐色:G 灰色:H 黒色:I 暗黄褐色:J 茶褐色:K 白色:L 黄灰色:M 暗灰色:N 暗灰褐色:O 灰褐色:P 礫:Q 小礫: R 炭:S 焼土:T 灰:U 白色石粒:V 鉄分:W 木片:X 青灰色:Y 青灰褐色:Z 黒褐色: AA

土質

土塊:I 土粒:II 粘土塊:III 粘土粒:IV 粘質土塊:V 粘質土粒:VI 砂:VII 砂塊:VII 砂粒; IX 砂質土塊:X 砂質土粒:X I 粘土:X II

目 次

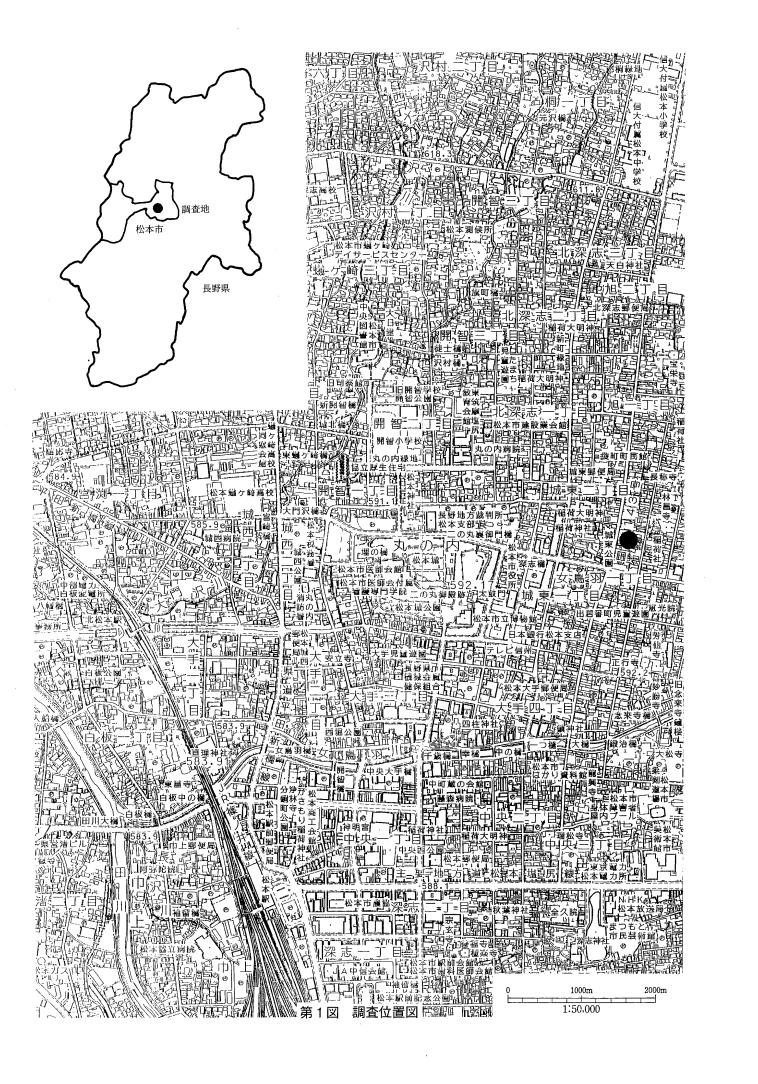
į.		
I	ĭ	z
j	ı	7

例言

目次

	and the state of t	
1章 調	査の経緯	
1節	調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2節	調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 1
- 1		
	男査地の環境	
1節	地理的環境	
2 節	歷史的環境	• 8
3章 調	関査結果	
1節	過去の調査	
2節	調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
3 節	調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
4節	出土遺構	
	N. I. KILIM	11
	% 1 KHH	11
	第3検出面	13
	第4検出面	16
	第 5 検出面	16
4章 出	出土遺物	
	u上恩物 - 土器・陶磁器・瓦・土製品	33
1節	大製品····································	
2節		
3節	石製品・骨角製品	
4 節	金属製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
5 節	自然遺物・骨類	86
調査の言	まとめ	87

写真図版



1 はじめに

1 調査に至る経緯

今回、長野県松本市城東2丁目において、松本市による東部地区コミュニティ防災広場事業が計画された。 事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である松本城下町跡(東町)に該当しており、防火水槽の設置や親水広場等 により、予定地内の埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。松本市教育委員会と事業担当課で遺跡の保護に ついて協議し、事前に発掘調査を実施して記録による遺跡の保存を図ることとした。

文化財保護法第57条の3(現93条)に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書は、平成16年5 月14日付長野県教育委員会宛てに提出された。通知に対しては、長野県教育委員会より発掘調査の指示が 平成16年5月28日付で通知されている。

現地での発掘調査は平成16年5月17日~平成16年11月16日にかけて行った。なお、試掘調査の実施につい ては調査地の現況等から省略した。調査終了後、平成16年11月17日付で長野県教育委員会に発掘調査終了 報告書を提出した。また同日埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成16年12月3日付で長野県教育委員会 教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図・写真等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古 博物館において行った。

2 調査体制

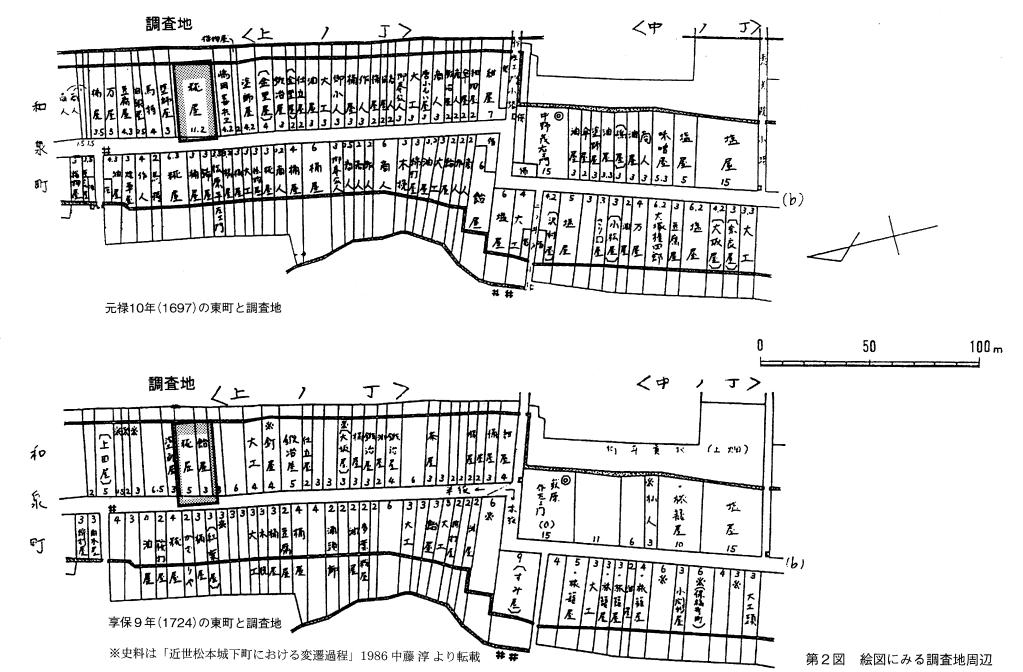
調 查 団 長:竹淵公章(松本市教育長)

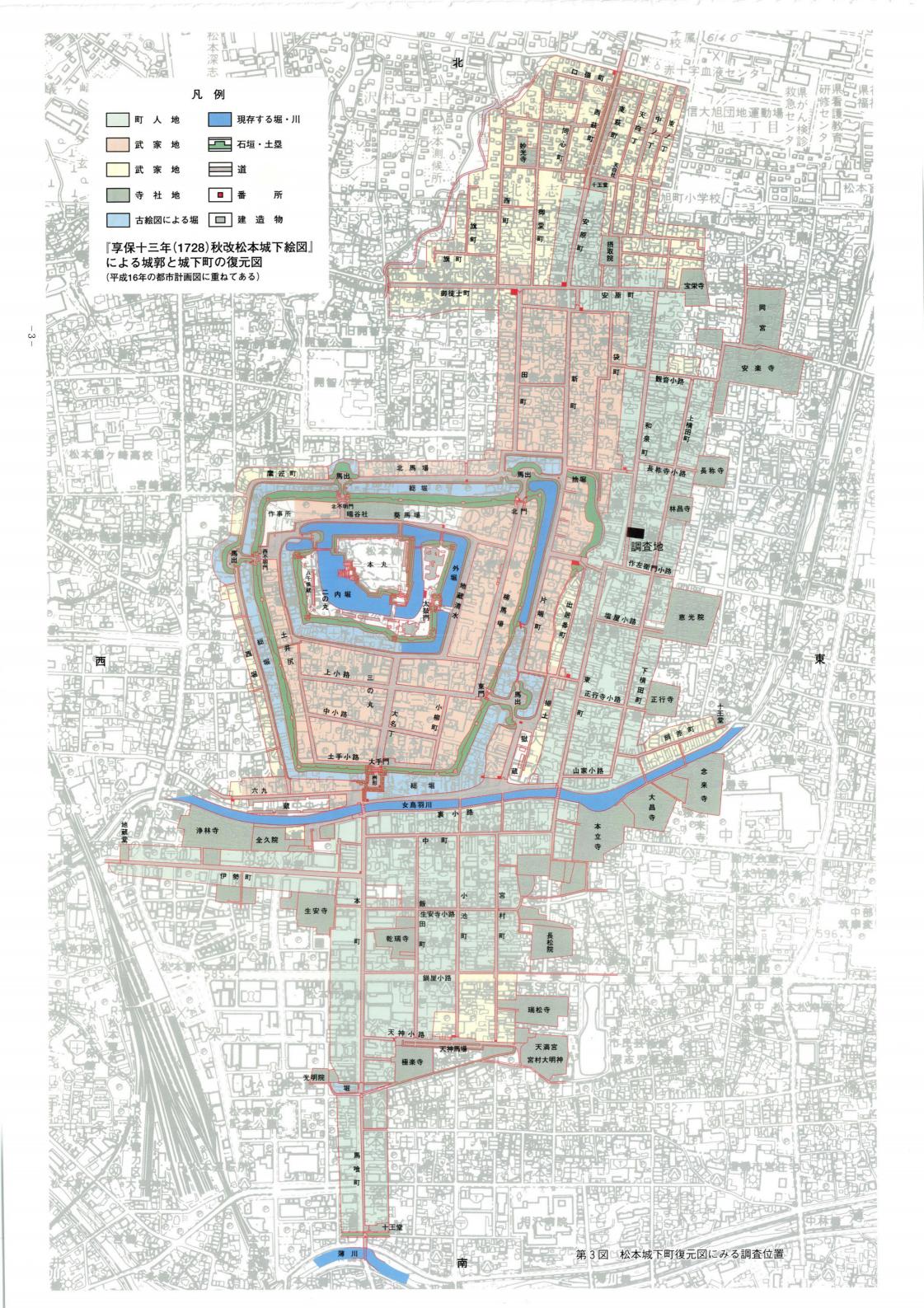
調査担当者: 菊池保夫(主任 ~ H17年3月31日)、小山貴広(同 嘱託)

調 査 員:今村克、森義直、竹原久子

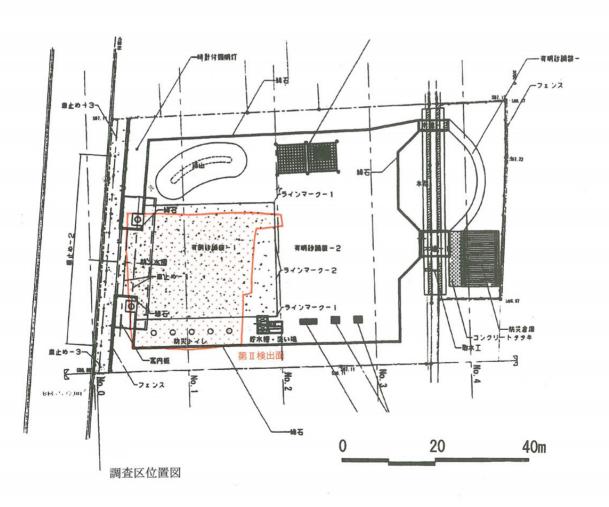
協力者:浅輪敬二、石川光男、入山正男、海老原千津子、小林芳郎、清水陽子、中村恵子、本木修二、 渡辺順子

事 務 局:松本市教育委員会教育部文化財保護課(~H17年3月31日)、文化財課(H17年4月1日~)、 池田英俊(課長~H17年3月31日)、宮島吉秀(課長H17年4月1日~)、熊谷康治(課長補佐)、 川上百合子(埋蔵文化財担当係長 ~ H17年3月31日)、直井雅尚(主査)、小山高志(主事)、 櫻井 了(主事)、渡邊陽子(嘱託)、花村かほり(嘱託 H17年4月1日~)

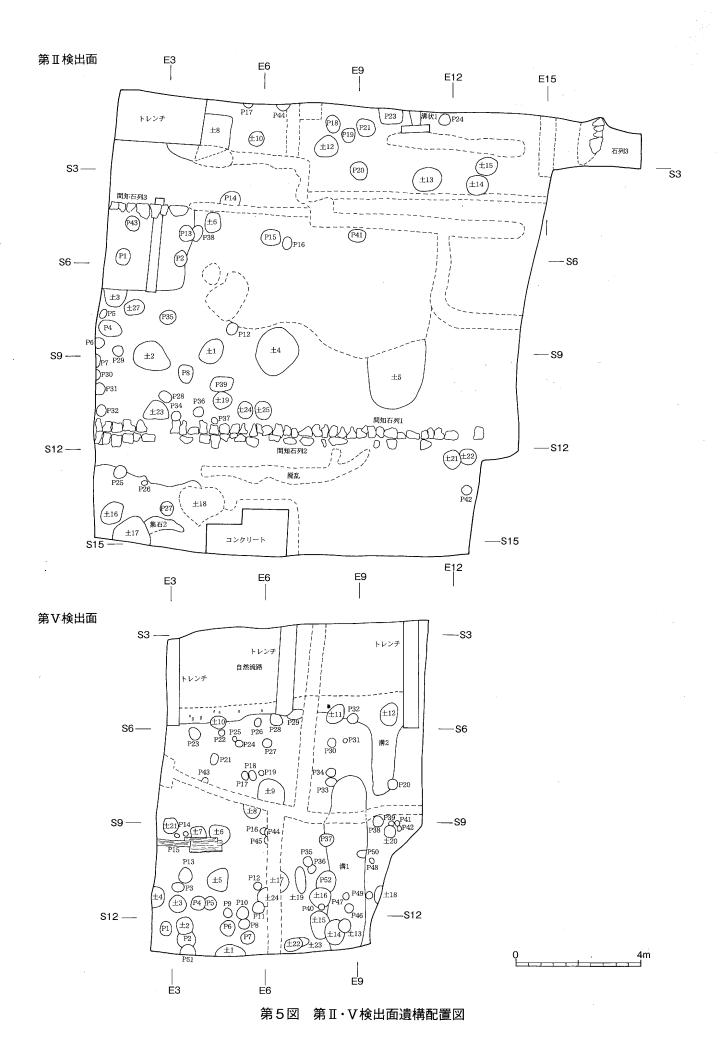


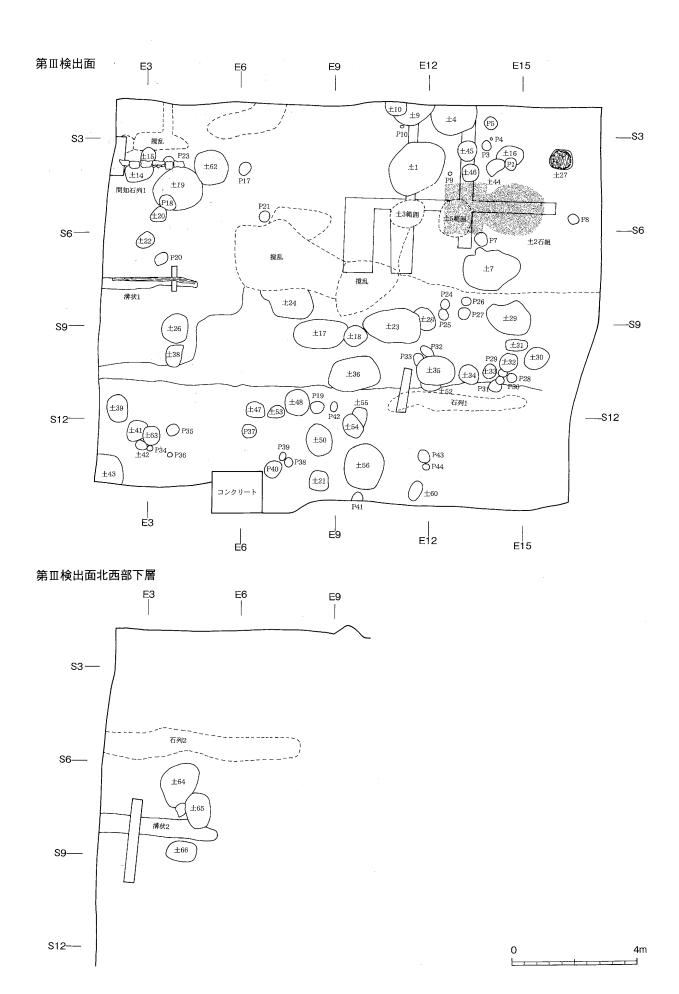






第4図 事業計画地と調査位置





第6図 第Ⅲ検出面遺構配置図

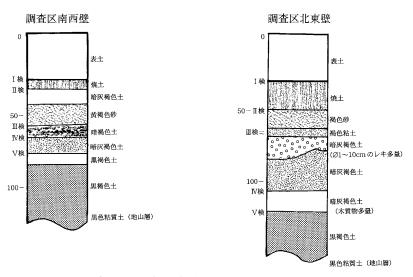
2 調査地の環境

1 地理的環境

今回の調査地点は松本城天守閣の東約600m、北約100mに位置しており、調査地東約350mには女鳥羽川が流れている。松本市街地周辺では、洪積世後期後半ごろから局部的・構造的な松本盆地の誕生が始まる。このころ西側の城山が傾動しながら隆起をはじめ、それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は次第に南西から東へ押しやられ、洪積世末ごろ第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層を載せて山地化し、隆起の進行と共に右岸に三段の段丘面を形成しながら市街地東部を流れるにいたった。この結果、女鳥羽川は、筑摩山地の三才山峠(1500m)から流れ出し、幾つもの沢と合しながら西に向かって流れ、稲倉から120°向きを変えて市街地に向かって南流し、流路の首振りを繰り返して扇状地を形成した。調査地はこの女鳥羽川水系の扇状地に属することとなる。周囲の地盤は比較的軟弱なものであり、ある程度の地盤沈下が起きている。これまでの発掘調査では伊勢町付近で年約1.6~1.7mmの速さで沈下していることが判明しているが、調査地点ではそれより速い年約2.0~2.7mmの速さでの地盤沈下している。

調査区の基本的な土層構成は、第6図の基本土層図のとおりである。第1層は、近代~現代の造成土である。第 I 検出面は①第2層の焼土層上面である。恐らく大規模な火災があった後、整地されたものであろう。第 II 検出面は暗褐色土、及び褐色砂の上面である。暗褐色土層中には焼土粒・炭化物が多量に含まれていた。また、褐色砂中には女鳥羽川水系の礫が多量に含まれていること等から、この層は洪水等の流れ込みがあった後、人為的に整地されたと考えられる。第 III 検出面は暗灰褐色土層の上面である。③第4層等は褐色で鉄分を多く含む非常に粘性の強い粘質土層であり、主に調査区北東部に集中していた。暗灰褐色土層中には第II 検出面と同じく褐色砂や礫の層が混入していた。ここでも洪水があった後整地していることが伺える。また、鉄分を含む粘質土も混入しており、土層中にFe(OH)2(水酸化第一鉄)を多量に含んでいた。第IV 検出面としたのは暗灰褐色〜黒褐色土上面であるがこの層は炭化物や焼土、木片等を大量に含み、遺構も確認できなかった。第V検出面は②第6層などにみられる黒色〜黒褐色土である。一部灰色土塊が混入しており、アシ・ヨシ等の植物遺存体が多量に含まれていた。

黒色土以下は地山となる。黒色土の下には灰色土、黒色粘質土、灰色砂と続いている。灰色砂は女鳥羽川の源流が近くを流れていた頃に堆積したと考えられる。その後女鳥羽川の源流が離れると黒色の粘質土が堆積していったと考えられるが、これは松本城下町を形成するにあたって、人為的に女鳥羽川の流れを変えたことが要因であると思われる。



東町 Ⅲ次調査基本地層図

2 歴史的環境

国宝の一つに数えられ、現在までその姿を留める松本城。その周囲に広がる松本城下町は小笠原長時が三男、小笠原貞慶より以後徐々に整備され、進展していったとされている。天正10年(1582年)3月、松本城の前身となる深志城の城主であった武田氏が滅亡し、6月に織田信長が本能寺に倒れるとそれを好機と小笠原貞慶は深志城を攻め、旧地を回復した。天正10年(1582年)貞慶は深志城を松本城と改め、天正13年(1585年)より大普請を始めた。貞慶はこの際市辻・泥町(後の地蔵清水から大柳町付近)にあった町屋を本町に移転し、親町・枝町の地割をした。やがて貞慶にかわって石川数正・康長親子の代になると、城下町の整備は大幅に進むこととなった。数正は天正19年(1591年)に松本城へ入封すると城普請に取り掛かった。しかし、志半ばにして数正が亡くなると康長が父数正の遺志を継ぎ、城普請を行った。康長は本丸に大天守・乾小天守を築造すると同時に城下町の整備を続け、枝町を繋げて形を整え、三の丸や片端町などに武家屋敷を集中させた。小笠原貞慶の頃は家もまばらで村のようであった城下町もこの21年に及ぶ大普請によって町並みは整えられ、その後の城下町形成の基礎となった。康長による普請の後は慶長18年(1613年)に入封した小笠原秀政、元和3年(1617年)に入封した戸田康長、松平直政、堀田正盛、水野氏等によって少しづつ整えられていき、17世紀半ば頃には一応の完成に至ったと言われている。

松本城下町は善光寺街道に沿っている本町・中町・東町を親町とし、親町から枝分かれする枝町10町の計13町を中心としている。東町は「松本市中記」によれば長さ10丁59間、町幅3間7寸、家数163軒であったとされており、和泉町・安原町・上横田町・下横田町・山家小路の5町の枝町が伸びる町である。女鳥羽川にかかる東町大橋から北に伸びる東町は、小笠原貞慶が松本城下町の町割りを行った当初から置かれており、北に向かって下ノ丁、中ノ丁、上ノ丁と分けられている。

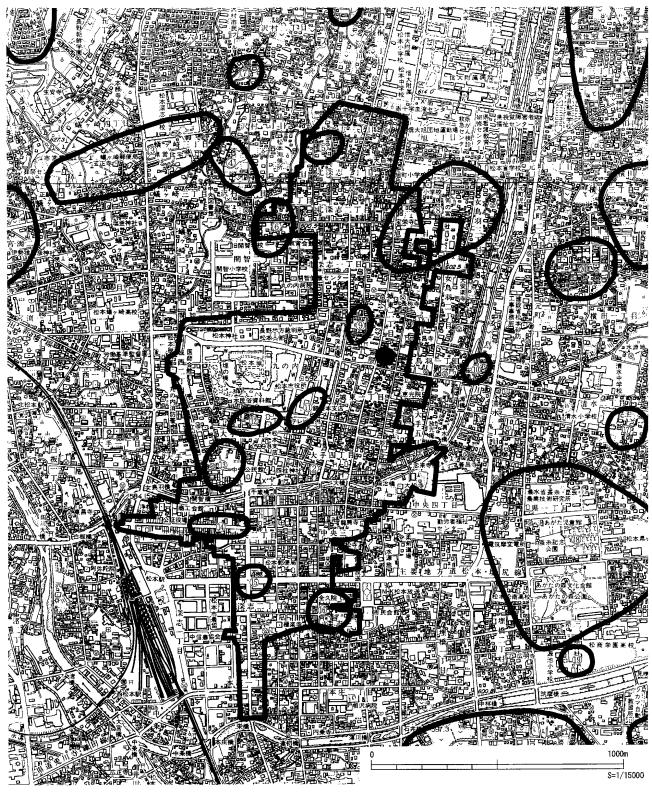
旅籠の町東町

松本城下町の親町三町は総じて善光寺街道に面しており、主に宿場町の機能を有していたとされている。 東町には『松本大略往来』に「東町ハ諸国之旅人木銭宿、旅籠屋、商人、定飛脚之泊屋ニて、家毎ニ軒端ニ家 名ヲ記シ門ニ立」とあるように、領内の遠方にある村々から出張する際に使う郷宿や旅行者が宿泊する旅籠 などが置かれていたようである。元禄10年(1697年)頃にはこの様な旅籠は下ノ丁を中心に13軒あったとさ れている。一方中ノ丁・上ノ丁には主に商人や職人が住んでおり、桶屋7軒、油屋5軒、大工4人、酒屋4軒、 酒頭師3人、豆腐屋3軒、綿打屋3軒、紺屋3軒に加えて飴屋、差物屋、塗師屋、塗師、鍛冶屋、鉄砲台屋、糀屋、 鞍打屋などの職種の人々が暮らしていた。

今回の調査地は東町の北端近くにあたる。この場所は元禄10 (1697)年頃の史料によれば糀屋が営まれていたとされる場所である。間口5間の糀屋であり、徳左衛門という名前がみえる。北隣には塗師屋・半右衛門、南隣には飴屋・喜右衛門が住んでいたとされている。また、この頃には東町町内にはもう1軒の糀屋があったとされている。

災害と城下町

松本城下町では数多くの災害に見舞われている。中でも特に火災の被害は甚大であり、東町に関するものだけでも延宝5年(1677年) 12月、貞亨4年(1687年) 1月、寛延3年(1750年)、安永5年(1776年) 12月、享和3年(1803年) 1月、享和4年(1804年) 8月、文化元年8月、明治19年(1886年)、明治21年(1888年)と度重なる火災に見舞われていたことが分かる。特に安永5年の大火の被害は大きく、本町・中町・伊勢町・小池町・飯田町・東町・安原町・大名町・柳町・地蔵清水まで焼失したとされている。また、松本城下町は北から女鳥羽川、東から薄川、南から田川が集まってくるという地形から、水害においても多大な被害を受けている。中でも享保13年(1728年)の洪水は大規模であり、女鳥羽川は御堀と合水し、一面海のようになったと伝えられている。



●…今回調査地

- 松本城址
- ② 松本城下町跡
- ③ 蟻ヶ崎遺跡
- ④ 沢村遺跡
- ⑤ 堂町遺跡
- ⑥ 田町遺跡
- ⑦ 沢村北遺跡
- ⑧ 岡の宮遺跡
- ⑨ 片端遺跡
- ⑩ 女鳥羽川遺跡
- ⑪. 丸の内遺跡
- ② 大名町遺跡
- ③ 土居尻遺跡
- ⑭ 伊勢町遺跡
- ⑤ 本町南遺跡
- 16 天神西遺跡
- ⑰ 四ッ谷遺跡
- 18 県町遺跡
- ⑲ 埋橋遺跡
- 20 横田古屋敷遺跡

第7図 周辺遺跡図

3 調查結果

1 過去の調査

東町では過去に2度の発掘調査が行われており、今回は3度目の調査となる。

第1次調査はH14年度に行われ、27.74㎡の面積を調査している。調査地は東町南端近くに位置し、屋敷地奥の年貢地にあたるとされている場所である。 $16 \, \mathrm{c} \, \mathrm{x}$ ~幕末にかけての計3面を調査し、ゴミ穴とされる竪穴状遺構などが検出された。

第2次調査はH15年度に行われた。幅1mのトレンチ調査であり、近世以降の陶磁器が数点出土したのみである。遺構もほとんどみられず、土坑が1基出土したのみであった。

2 調査概要

今回の調査は当該地に東部地区コミュニティ防災広場整備事業が計画されたため、行ったものである。調査区は防火水槽及び構造物の基礎などにより掘削が行われる調査区南西部を中心に設定した。調査を始めるにあたって、まず調査区北西に確認トレンチを設定し、土層観察を行った。この結果、5面の整地層が確認できたため、各面において検出面を設定し、調査を行った。各検出面の調査面積は第 $I \cdot II$ 検出面 $I \cdot II$ を設定した。各面の遺構の測量は、調査区本の任意の点は $I \cdot II$ を設定した。基準点には後に国家座標 $I \cdot II$ を設定した。測量図面は $I \cdot II$ を記述の意味を可能的 $I \cdot II$ を認定した。

第 I 検出面では大型建設機械により検出面までの表土除去を行った後、人力により遺構検出作業を行った。 検出の結果、出土遺物等から明治期以降の火災処理層であることが判明した。調査期間の制限等の理由から 第1検出面では遺物回収及び写真での記録のみ行う事とし、第 II 検出面へと移行した。第 II 検出面は大型建 設機械を使わず人力により掘削及び検出作業を行った。第 I 検出面の整地層を除去していったところ、調査 区南部は間知石列を境として若干低くなっていた。そのため第 II 検出面は北部と南部で高低差が生じること となった。この段差は後に第 I 検出面が整地された際南側が深く削られたためと思われる。

第Ⅱ検出面調査終了後、大型建設機械で整地層を除去し、人力で第Ⅲ検出面の検出作業を行った。検出の結果、調査区西部は薄く暗灰色土と褐色砂が堆積しており、周囲に比べ若干高くなっていることが判明した。そのためこの箇所においては上層面の調査を行った後、大型建設機械で掘削して周囲とレベルを揃え再度検出を行った。調査区北東部には鉄分を多量に含む粘土が広がっており、調査区南部には第Ⅱ検出面と同じく若干の段差がみられた。第Ⅲ検出面調査終了の後ラジコンへリコプターにより航空写真を撮影した。この第Ⅲ検出面から出土した糀竃は城下町研究の上で貴重な構造物であり、周辺住民から保存して欲しいとの要望も多数寄せられたこともあって調査終了時の状態で埋設保存することとした。糀竃の保存は第Ⅴ検出面調査終了時に行なった。保存に際しては構築材の崩落を防ぐため、内部に土嚢を詰めて固定した上で埋め戻しを行った。

第IV検出面以降はより深くまで掘削される防火水槽建設範囲(調査区西半)を中心に調査を行った。第IV検出面は大型建設機械で検出面まで掘削した後、人力にて検出を試みた。検出作業時多量の遺物と木質物が出土したが遺構はみられなかったため、遺物を回収するのみに留めた。第V検出面も同じく大型建設機械による掘削後、人力で検出作業を行った。検出面は地盤が軟弱なうえ湧水もあっため調査区内に排水溝を掘り、排水を行いながら調査を進めることとした。第V検出面調査後航空写真の撮影を行い、防火水槽建設範囲については地山面を掘り下げて遺構の有無を確認した。その結果地山面下層には遺構等は見られなかったため、

調査区の埋め戻しを行った。その後調査区東に東部トレンチを設定し土層確認、屋敷の範囲確認などを行ったが残存状態が悪く、ほぼ撹乱のみであったため東部トレンチを埋め戻し調査を終了した。

3 調査成果

調査期間:H15年5月17日~11月16日

調査面積:総面積750㎡(I・II検:193㎡ III検:182㎡ IV・V検:91㎡)

検出遺構:土坑・118基 出土遺物:土器・陶磁器(生活雑器・茶器・玩具など)

ピット・141基 土製品(土鈴・面摸)

溝・2本 木製品(下駄・箸・櫛・漆碗など)

溝状遺構・3本 石製品(砥石・硯・搗臼・笄・碁石など)

集石・3基 骨角製品(双六駒)

石列・5本 金属製品(釘・鋏・煙管など)

間知石列・4本 自然遺物(動物骨・貝殻)

<u>4 出土遺構</u>

今回の調査では計5面の検出面で数多くの遺構が検出された。しかしながら、第I 検出面は明治期以降の火災処理層であり、第I 校出面は検出を試みたものの遺構が存在せず生活面ではないことが判明したため、検出面において出土遺物の回収に留め、第 $II \cdot III \cdot V$ 検出面でのみ遺構掘り下げを行った。調査地内には明治期以降の撹乱が多く入り、検出作業も困難を極めた。また、遺構検出時に上下の整地層の一部や上層の遺構を重複して捉えてしまったものもあった。そのため当初遺構として捉えたものの、掘り下げ時に撹乱であると判別されたものや遺構であることが疑わしきものに関しては欠番とすることとした。

遺構については検出作業時に命名したので、検出段階で長軸40cm以上のものを土坑、それ以下のものをピットとした。ただし、遺構掘り下げ中に範囲が広がったものも多々あるので、完掘状況が必ずしもこれにあたっていないことを了承して頂きたい。第II検出面北西部にある土間状の遺構に関しては便宜上土間状遺構と呼ぶこととする。第V検出面北に広がる礫層は人為的に掘られた形跡がみられなかったので自然流路として調査を行った。

また、第V検出面調査終了後調査区東側で屋敷の範囲や土層等を確認するために東部トレンチを設定した。 しかしながら撹乱がひどく一部で第Ⅲ検出面の整地層が確認できたのみであったため、出土した遺物を掲載 するに留めさせて頂いた。

以下各検出面について詳細を述べていく。

第I検出面

一部遺構を確認したため検出作業を行ったが遺物等から明治期以降の火災による火災処理層であることが判明した。このため調査は遺物の回収のみに留めることとなった。文献資料によれば東町では明治19年(1886年)、明治21年(1888年)などに大火の記録が見られるので、恐らくどちらかに該当すると思われる。

第Ⅱ検出面

上層からの撹乱がひどく、調査区中央付近と南部は遺構がほとんど残存していなかったが、その周辺から は遺構を検出することができた。

調査区南部・北部に計3本の間知石列が見つかったが、文献などの記録からこの間知石列は屋敷境である可能性が高い。また北側の間知3に接するように硬く叩き締められた土間状の遺構がみられた。

南西隅には黒色土が集中しており、鍛冶炉と思われる石組みが出土している。この石組みの周囲は若干低くなっているが、これは恐らく後の整地時に削られたものと思われる。

出土遺物等の様相から18 c 中葉~後葉に属すると思われる。

ア)土坑・ピット

第 II 検出面では29基の土坑と44基のピットが検出された。内土7・9・11・20・26・28・29、P3・9・10・11・22・40は欠番とした。土坑・ピットのほとんどは出土遺物も少なく、帰属時期、用途共に不明である。 土1

調査区中央に位置する。長軸89cm、深さ5cmとかなり浅い遺構である。中には多量の礫がみられる。これらの礫に挟まれる形で鞴の羽口が出土していることから鍛冶炉であると思われる。

土2

土1の西に位置しており、長軸120cmと大型の土坑であった。土坑底部には多量の礫が見られ、礫の間には焼土と灰が層状に入っていた。礫にも若干の被熱が認められたため土坑内部で火を用いていた可能性が考えられる。

土4

調査区中央、撹乱にほぼ接するように残されていた。土坑底部からは多少の礫が出土し、覆土中には多量の焼土が見られた。

土5

北部を撹乱に切られる大型の土坑である。長軸は約200cmあり、底部中央には窪みが見られた。覆土中からは伊万里皿や段重、釘などが出土しているためゴミ穴である可能性が考えられる。出土遺物から $18\,c$ 後葉~ $19\,c$ 初頭の土坑であろうと思われる。

土15

底面には大量の礫がみられ、一部に粘土が張られていた。出土状況から柱穴である可能性も考えられる。

土17・集石2

調査区南西隅に位置する。南部が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、長軸190cmと大型で深さ7cmほどの遺構である。土坑の縁には礫が並べられており、覆土中には焼土が含まれていた。北東部で集石2に接している。

集石2は長さ12cm程で若干弧状にカーブする遺構である。覆土中には多量の礫が組まれるようにみられたが、中心部のみ礫は認められなかった。サブトレンチを入れて確認したところ礫の下には瓦が敷かれていた。中心の礫が出土していない部分からはそれに組み込まれるような形で鞴の羽口が出土しているため鍛冶炉であると思われる。

±18

調査区南西、集石2に隣接して出土した。土坑東部は撹乱により切られているが、長軸150cm程の範囲で礫が集中していた。中央付近には金床石と思われる扁平な石があり、周囲は小礫で固められていた。また、隣接するように荷車の車軸と思われる木製品がみられ、同様に周囲を小礫で固めていた。一部に粘土が集中していることや、覆土中に多量の鉄滓が含まれていたことも合わせて何らかの鍛冶遺構であった可能性が高いと思われる。

P27

集石2に接するように検出された。径45cm、深さ17cmの遺構である。覆土は鉄分を多く含んでおり、多量の鉄滓が含まれていたため、土17・集石2と関連して鍛冶遺構の一部である可能性が考えられる。

P31

調査区西側で検出された。径約40cm程の円形を呈する。覆土中から柱材が出土しているため柱穴であると考えられる。

イ)石列・間知石列

第Ⅱ検出面では石列が3列、間知石列が3列みられた。石列1・2は掘り下げ時に撹乱であることが判明したため欠番とした。間知石列は総じて東西方向に伸びていた。

石列3

調査区北東隅でみられた。南北約1mにわたって $2\sim3$ 段の石が積まれる石垣状の遺構である。石は東側で面が揃えられており、西側には裏込め石が入れられていた。何らかの建物の基礎である可能性も考えられるが、周囲が撹乱に切られているため詳細は不明である。

間知1・2

調査区の南部にみられた。両者ほぼ接するような形で出土しており、北側が間知1、南側が間知2となる。 間知1が間知2を切る形であるので、両者には若干の時期差が認められ、間知1のほうが新しいものと思われる。

間知1は調査区西端から東端まで続いている。石列の下及び北側には5~30cm程度の礫が集中していた。 恐らく石列を固定するための裏込め石であると思われる。間知石の面は南側に向けて揃えられているため北側の屋敷に関わるものであると言えよう。

間知2は間知1より若干下がった位置から見つかった。調査区西端から中央付近まで続いているが、石列はところどころ抜けている。間知石の南部には裏込め石がみられ、西側の一部には間知石の下に胴木と思われる木材が横たわっていた。間知石の面は北側で揃えられていたが、周辺の撹乱がひどく詳細は不明である。恐らく南側の屋敷に関わるものであろう。

間知3

調査区北西に位置する。土間状遺構に接して、東西方向に7個程の間知石が並べられていた。石は北側に面を向けて並べられており、南部には裏込め石が詰められていた。間知石列東部は撹乱に切られてしまっているため詳細は判断しがたいが、土間状遺構に接していることから屋敷境である可能性も考えられる。

ウ) 溝状遺構

調査区北端に位置する。北側が調査区外となるため全容は不明である。覆土中には鉄分が多量に含まれ、 両脇には礫が並べられていた。

エ) 土間状遺構・P1・2・13・43

調査区西、間知3に接して硬化した土が集中している箇所がみられたため、便宜上土間状遺構として調査を行った。土間状遺構は $2.5m \times 2.5m$ の正方形を呈しており、若干焼土が含まれていた。この土間状遺構の範囲内からは $P1 \cdot 2 \cdot 13 \cdot 43$ が検出された。この4つのピットは東西約2m、南北約1mで長方形に並んでいる。柱痕等良好にはみられなかったが柱穴となる可能性も考えられる。

この土間状遺構は旧善光寺街道にほぼ面する位置であり、間知石列にも接しているため家屋の入り口であると思われる。

第Ⅲ検出面

調査区西側は周囲より一段高くなっていた。サブトレンチをいれて確認したところ、段の上面と下部にほぼ同質の整地層がみられ、それぞれに遺構も確認されたため、この西側部分については一旦上層で調査を行い、その後掘削して下面の調査を行った。この上面と下面の遺構には当然の事ながら時期差が認められるであろうが、遺物等も少なくどの程度の時期差であるかは確認できなかった。

調査区北東部には鉄分を多く含む粘土が広がっていた。この粘土の範囲内で検出された土2掘り下げ中に 粘土下に石組みが広がっていることが確認された。そのため粘土範囲内にある遺構を調査した後、土2を中 心にトレンチを入れて確認作業を行った。結果トレンチ東部に位置する土5に切られる形で大規模な掘り込 みとそれに伴う石組みが認められ、土2はこれが露出したものであることが判明した。そこで、この掘り込 みを土2と改め、トレンチによる確認作業の後、周囲の粘土剥ぎ取り及び土2掘り下げを行った。結果土2は 大型の石組み状遺構であることが判明した。

また、間知石はみられなかったものの、第II検出面間知 $I \cdot 2$ とほぼ同位置に段差がみられた。一段下がった南側は直上まで第II検出面の土層がみられたため同一検出面として調査を行ったが、この段差を境に多少の時期差が生じることも考えられる。

ア)土坑・ピット

第Ⅲ検出面からは66基の土坑と44基のピットが検出された。上層の第Ⅱ検出面でみられた撹乱が一部残っており、検出後撹乱であると判断された土6・8・11・12・13・25・37・40・49・51・57・58・59・61、P2・6・11・12・13・14・15・16・22は欠番とすることとした。

土1

長軸200cmと大型の土坑であるが、深さは5cmと浅かった。調査区北東部の粘土を切るように入っていた。 底面からは土2の一部であると思われる石組みがみられた。

土2

調査区北東部に位置する。先述の通り、当初土1に隣接する土坑であると捉えていたが、最終的に石組み状の遺構となった。石組みは径約2m40cmの円形を呈する部分と長辺2m60cm、短辺2mの方形部分とを組み合わせて形成されている。深さは1m40cm程であったが、方形部分の石組みは1mまでしかみられなかった。方形石組み中心部底面には杭が1本みられた。杭は太さ約20cmあり、途中で切断されていた。また石組み北西隅と南西隅にはこれより一回り小さな杭が打ち込まれていた。これらの杭は頭がほぼ同レベルで揃えられており、何らかの関連性があると思われる。

円形部の石組みは全体的に強く被熱しているようで、構築礫は赤色化し非常にもろくなっていた。底面には扁平な石が敷かれていた。この石は非常に大きなものであり、北と南には1段上がるような形でほぼ同じ長さの角柱状の石が隣接していた。底面直上には炭化物が多量に残されており、石にも一部付着していた。全体的な様相からこの円形石組み内で火が使用されていたことが窺える。

方形部と円形部は連結部分で石が途切れており、この連結部分には両側に三個づつ立石が立てられていた。このような石組みは兵庫県伊丹市伊丹郷町遺跡と東京都品川区仙台坂遺跡などで類例が見られ、共に酒や味噌の製造に関わる石組み竃であるとされている。今回出土した石組みも円形部で火の使用が認められるため同様の石組み竃であると考えられ、文献資料では調査地は糀屋であったとされていることから糀の製造に関わる糀竃ではないかと推察できる。

覆土は方形石組み部分には暗灰褐色土がみられ、円形石組み部には多量の礫とともに粘土がみられた。この粘土は調査区北東部にも広く広がっているため、恐らく廃絶時に竃を崩しながら埋めていき、周囲も整地したのではないかと思われる。このようなことから竃は石組みを粘土で補強して構築されていたと推察できる。また、覆土中からは漳洲窯産の皿や鬢盥、漆碗など多数の遺物がみられた為、廃絶時ゴミ穴として利用された可能性も考えられるであろう。出土遺物から17C後半から18C中葉のものと思われる。

±3

土1の南に位置する。非常に浅く深さは10cm程度であるが、覆土中には鉄分を多量に含んでいた。底面からは石組みの一部が露出している。

±5

土1南東に位置し、25cmの深さで粘土が入っていた。壁面には土2の石組みが露出している。土2の石組み 方形部分とほぼ同位置にあたる。

土7

調査区東から見つかった。北東部に広がる粘土を切っている。長軸183cmの楕円形を呈しているが深さ5cm程の浅い遺構である。底面には焼けた石が組まれており、その周囲には粘土が貼られていた。出土状況から鍛冶炉である可能性も考えられるが、土2に近接していることから土2に関連した施設である可能性もあると思われる。

土19

間知1に接して確認された。長軸160cmと大型ですり鉢状を呈しており、南部壁面には粘土が集中していた。 ±24

中央部やや西から検出された。北部上面を撹乱に切られるが、底面は残存していた。底面には組まれたように石が並んでいる。西側には粘土が貼られており、何らかの目的で石を組んでいる可能性が考えられる。 覆土中からは多量の陶磁器とともに多くの鉄製品が出土した。また、鉄滓も少量みられたが遺構に鍛冶を行っていた痕跡がみられない為、恐らく埋没中に混入したものと思われる。

土27

調査区北東隅から出土した。土坑内には桶が入っていた。桶は下半のみしか残されておらず、整地面より 上部は削られて残されていなかった。胴部には特に孔なども見られず、用途は不明である。周囲には礫や北 東部の粘土が広がっていたが、それらを切るように桶が設置されていた。帰属時期などは不明である。

土29

調査区東に位置する。長軸146cmの土坑の底面に石列がみられた。出土遺物等から17C後半から18C初頭のものと思われる。

±39

調査区南西部で見つかった。長軸90cmの楕円形を呈する。覆土中には柱材が残存しており、周囲は礫で 固められていた。柱穴であると思われる。

±48

調査区南部で検出された。長軸80cm程の土坑である。覆土中からは伊万里産の皿や寛永通寶が多量にみられた。寛永通寶は7枚みられたが全て一箇所に固まっており、内6枚は重なった状態で出土した。土坑内には柱材も依存し柱穴であると思われるため埋納銭とは考えがたいが、少なくとも銭貨を連ねた状態で埋められたことは確かであろうと思われる。

土54

調査区南部に位置する土坑である。長軸80cmの楕円形を呈する。覆土西側には土48と同様銭貨が重なってみられた。銭貨は8枚あり、元豊通寶、政和通寶、軋元通寶、聖宋通寶、祥符元寶と全てが宋銭であった。出土状況から備蓄銭である可能性も考えられる。

±62

調査区北西に位置し、径1m前後の円形を呈している。底面及び壁面には一面に礫が貼り付けられていた。 礫は意図的に貼り付けられたと思われるが用途等は不明である。

P4 · 9 · 10

調査区の北部から分布している。径約10cm程の範囲に鉄分が集中していた。掘り下げたところ筒状に鉄分が入っていることが判明。杭等が抜けた跡に鉄分が堆積した可能性も考えられる。

P24 · 25 · 26 · 27

調査区中央やや東に方形に並んでいた。総じて径約35cmほどの円形で、柱材が残存している。柱穴としての用途が想定されるであろう。

P43

調査区南東から出土。覆土中には杭が並んでいた。恐らく遺構埋没後に打たれたものと考えられるが、出 土遺物等もなく、詳細は不明である。

イ)石列・間知石列

第Ⅲ検出面からは2本の石列と1本の間知石列が検出された。総じて出土遺物もなく帰属時期は不明である。

石列1

調査区やや南よりにみられる段差付近から出土している。第II検出面間知2と出土位置がほぼ一致するため、第II検出面間知2の裏込め石である可能性も考えられる。

石列2

調査区西の段状部分を除去した後に検出された。東西方向4m50cmに渡って礫が並んでいた。掘り方等も みられるが、東部を撹乱で切られているため詳細は不明である。

間知1

調査区北西に230cmの長さで並んでいた。石は北向きに面がそろえられていた。間知石南部及び直下には 裏込め石もみることができた。一部のみの出土であるため詳細は不明であるが、屋敷境となる可能性も考え られるであろう。

ウ)溝状遺構

2条の溝状遺構が検出された。双方とも調査区西部段状部分から検出されている。

溝状1

調査区西にあって東西方向に伸びている。幅34cm×長さ3mの溝状を呈しているが、西部は調査区外に伸びる可能性も考えられる。遺構覆土中には木材が横たわっていた。木材は長さ2m80cm程の角材で北壁に押し付けられるような形で設置されていた。そのためこの溝状遺構は木材を設置するための掘り方である可能性が高い。

溝状2

約4mに渡って東西方向に伸びているが、西側が調査区外にあたるため全容は不明である。深さ10cm程度 の浅い掘り込みであった。遺物等はなく帰属時期・用途共に不明である。

第Ⅳ検出面

第Ⅲ検出面下層に整地面の存在が確認できたため、これを第Ⅳ検出面として検出を試みた。多量の遺物や 木片等の有機物が出土したが遺構はみられなかったため、生活面ではないと判断し遺物の回収のみ行った。 恐らく整地を行った際に多量の遺物が混入したものであると思われる。

第V検出面

第IV検出面に引き続き91㎡の範囲で検出を行った。地盤が軟弱であり湧水もあったため、調査区内に排水溝を切り、排水を行いながらの検出作業となった。

調査区北側には礫が集中している箇所がみられ、多量の鉄滓と動物骨が見つかった。また、調査区東には 南北方向に溝がのびていた。恐らく区画のための溝であると思われるが、そうであるとすれば第 II ・ III 検出 面の地割とは異なることとなる。以下各遺構の概要を述べていくこととする。

ア)土坑・ピット

第V検出面からは24基の土坑と53基のピットが検出された。第V検出面は比較的有機物の残存状態がよく、柱材が残存しているものが多くみられた。

土5

調査区南西で検出された。長軸約80cmの不整円形をしている。底面中心部には礎石状の石があり、その周囲には根固め石が入れられている。恐らく柱穴であると思われる。

±13、24、P12、30、37、46、47

土13、24、P12、30、37、46、47は柱穴である。総じて柱材の残存状態がよく、柱材の一部が依存していた。 P37の柱材はスギ材を使用しており、扁平な角柱状を呈している。

P4

調査区南西で検出された。径50cmのピットである。P5を切っており、覆土中には柱材が依存していた。 柱材はマツ材で下端は台形状に削られていた。径10cm弱の柱であり、下端から27cm上にはホゾ穴らしき切 込みの一部がみられた。

P5

P4に切られる。径45cmとP4より一回り小さなピットである。柱材こそ依存していなかったものの底面には礎石がみられたため柱穴であるといえよう。

イ)溝

溝1

調査区東側で検出された。南北方向に約5m50cm続く溝である。南部は調査区外にあたるため全長は不明である。幅約1m、深さ55cmと大型の溝であり、断面は台形を呈している。流水の痕跡等がみられなかったので区画のための溝である可能性が高い。仮に区画溝であるならば、第 Π ・ Π 検出面の地割とは異なり南北方向に伸びているのは注目すべき点であろう。

溝2

流路から南に伸びるように検出された。長さ2m14cm、深さ11cmと非常に浅い溝であった。溝1との切り合い関係は判別し難く、遺構北部も不明瞭であったため、自然流路の一部である可能性が高いと思われる。

ウ)自然流路

調査区北部にみられた。東西方向に伸びる自然流路であると思われる。流路は調査区外まで伸びており、 北部も調査区外にあたるため正確な規模は不明である。

流路内には多量の礫とともに鉄滓や動物の骨などが含まれていた。礫は北部を中心に含まれており、南端付近で途切れていた。礫のない部分には東西方向に10数本の杭が打たれている。杭は径5cm前後の円柱形であり、下端は4方向から削られている。材質はスギ材を使用しているようである。

動物骨はシカ、ウマ、イノシシ、イヌ等の骨である。腐食の度合いや欠損の仕方等からこの場に捨てられたものではなく、流されてきたものである可能性が高い。

鉄滓は総重量4931.7g出土したが特に集中する箇所もなく、周囲に焼土等もみられなかった。動物骨同様流されてきたものである可能性が高いように思われる。大量にみられた礫には打ち欠かれた痕跡も認められず、断面にも人為的に掘られた形跡は認められないが、南部に杭が打たれていることから、ある程度人為的に手が加わえられた自然流路が洪水等で流された可能性が高いと思われる。

第1表 出土遺構一覧表

第1表	出土退煙	一見	衣		XXIII XXIIIX	•	
検出面	種別	番号		規模	Sar C	時期	備考
**********	A COLOR OF THE STREET		長軸	短軸	深さ	-14 MEGREEN	***************************************
Ⅱ検	土坑	1	89	67	5		鍛冶炉か?
Ⅱ検	土坑	2	120	80	15		焼土灰が層になっている
Ⅱ検	土坑	3	80	40	10		土間状遺構に切られる
Ⅱ検	土坑	4	156	129	46		焼土多量
Ⅱ検	土坑	5	202	198	7		撹乱に切られる
Ⅱ検	土坑	6	66	48	8		
Ⅱ検	土坑	7	(405)	(04)	40		欠番
Ⅱ検	土坑	8	(105)	(81)	12		撹乱に切られる
Ⅱ検	土坑	9		45	10		欠番
Ⅱ検	土坑	10	50	45	10	_	
Ⅱ検	土坑	11		70			欠番
Ⅱ検	土坑	12	88	70	11		
Ⅱ検	土坑	13	90	78	16		
Ⅱ検	土坑	14	68	67	20		
Ⅱ検	土坑	15	72	59	17		柱穴か?
Ⅱ検	土坑	16	84	60	16		
Ⅱ検	土坑	17	190	75	7	-	南部調査区外 集石2に接する 集石2含めて鍛冶炉か?
Ⅱ検	土坑	18	145	100	30		粘土・礫集中 作業場か?
Ⅱ検	土坑	19	65	60	10		上層に粘土が貼られている
Ⅱ検	土坑	20					欠番
Ⅱ検	土坑	21	62	55	23		土22を切る
Ⅱ検	土坑	22	51	(12)	26		土21に切られる
Ⅱ検	土坑	23	79	60	10		間知石列1に切られる
Ⅱ検	土坑	24	48	53	6		
Ⅱ検	土坑	25	60	56	10		
Ⅱ検_	土坑	26					欠番
Ⅱ検	土坑	27	64	47	11		
Ⅱ検	土坑	28					欠番
Ⅱ検	土坑	29					欠番
Ⅱ検	ピット	1	54	45	8		土間状遺構内
Ⅱ検	ピット	2	60	43	14		土間状遺構内
Ⅱ検	ピット	3	_				欠番
Ⅱ検	ピット_	4	72	53	7		
Ⅱ検	ピット	5	31	(21)	10		
Ⅱ検	ピット	6	45	(30)	18		西部調査区外
Ⅱ検	ピット	7	40	(15)	10		西部調査区外
Ⅱ検	ピット	8	60	47	13		
Ⅱ検	ピット	9					欠番
Ⅱ検	ピット	10					欠番
Ⅱ検	ピット	11				_	欠番
Ⅱ検	ピット	12	40	40	20		
Ⅱ検	ピット	13	54	50	13		P38を切る 土間状遺構内
Ⅱ検	ピット	14	63	(39)	8		撹乱に切られる
Ⅱ検	ピット	15	63	53	14		
Ⅱ検	ピット	16	40	30	6		
Ⅱ検	ピット	17	30	(17)	13		北半調査区外
Ⅱ検	ピット	18	55	44	9	_	
Ⅱ検	ピット	19	49	47	15		
Ⅱ検	ピット	20	60	54	15		
Ⅱ検	ピット	21	65	54	9		
Ⅱ検	ピット	22					欠番
Ⅱ検	ピット	23	75	54	13		北部調査区外
Ⅱ検	ピット	24	39	37	13		木片が横たわる 鉄分集中箇所あり

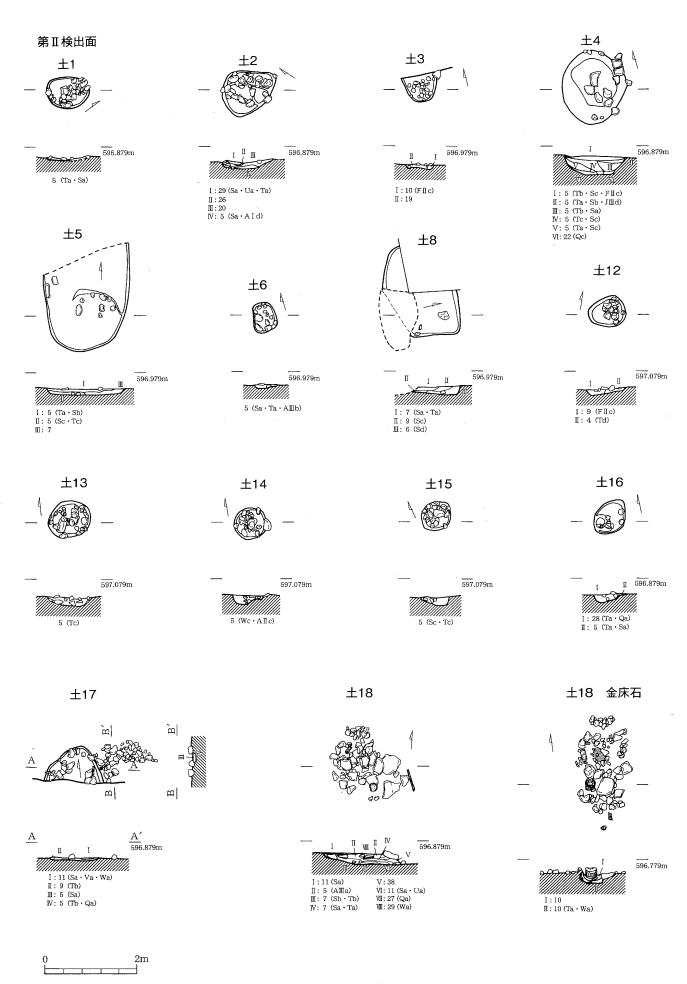
			Salahara (190	41144	121234444	244.01.00.000°	
検出面	種別	番号	長軸	規模 短軸	深さ	時期	A Company of the Com
Ⅱ検	ピット	25	40	39	13		木質物(丸板?)が敷かれている
Ⅱ検	ピット	26	20	19	10		TINE W (JULY) N MAN NO C.
Ⅱ検	ピット	27	45	43	11		鉄分集中
Ⅱ検	ピット	28	41	35	17		底面粘土あり
Ⅱ検	ピット	29	34	35	13		ENDIT HELD Y
Ⅱ検	ピット	30	40	(15)	8		西半調査区外
Ⅱ検	ピット	31	40	(30)	10		柱残存 西半調査区外
Ⅱ検	ピット	32	32	30	15		柱残存 パイル材か?
Ⅱ検	ピット	33					欠番
Ⅱ検	ピット	34	32	29	20		間知石列1に接する
Ⅱ検	ピット	35	50	48	10		
Ⅱ検	ピット	36	33	32	5		
Ⅱ検	ピット	37	27	26	8		間知石列1に接する
Ⅱ検	ピット	38	53	(26)	14		P13に切られる
Ⅱ検	ピット	39	80	45	19		
Ⅱ検	ピット	40					欠番
Ⅱ検	ピット	41	55	45	24		
Ⅱ検	ピット	42	32	31	13		
Ⅱ検	ピット	43	50	45	5		土間状遺構内
Ⅱ検	ピット	44	44	(22)	14		北部調査区外
Ⅲ検	土坑	1	200	156	5		一部石組み露出
Ⅲ検	土坑	2					糀竃
Ⅲ検	土坑	3	117	84	10		鉄分集中 石組み露出
Ⅲ検	土坑	4	150	(101)	11		土坑9に切られる 北半調査区外
	土坑	5	118	105	25		鉄分含む粘土集中 一部糀竃露出
Ⅲ検	土坑	6					欠番
Ⅲ検	土坑	7	183	129	5		粘土を切るように入る 鍛冶炉か?
Ⅲ検	土坑	8					欠番
Ⅲ検	土坑	9	(75)		5		土坑10に切られる 土坑4を切る 北部調査区外
Ⅲ検	土坑	10	70	(45)			土坑9を切る 北部調査区外
Ⅲ検	土坑	11					欠番
Ⅲ検	土坑	12					欠番
Ⅲ検	土坑	13					欠番
Ⅲ検	土坑	14	204	(67)	14		北部間知石列1に切られる
Ⅲ検	土坑	15	(43)	46	17		南部間知石列1に切られる
Ⅲ検	土坑	16	88	76	14		上面に粘土が貼られている 土坑44・P1に切られる
Ⅲ検	土坑	17	174	95	23		底面に焼土が広がる 土坑18に切られる
_ Ⅲ検	土坑	18	66	75	10		底面に焼土が広がる 土坑17を切る 土坑23に接する
Ⅲ検	土坑	19	160	142	26		P18に切られる 土坑20に接する 粘土集中箇所あり
Ⅲ検	土坑	20	55	48	13		土坑19・P18に接する
Ⅲ検	土坑	21	60		29		
Ⅲ検	土坑	22	67	54	19		
Ⅲ検	土坑	23	184	109	28		土坑28を切る 土坑18に接する
Ⅲ検	土坑	24	175	(116)	13	_	石組み状に礫出土 西部一部粘土が貼られている 北部 表面撹乱に切られる
Ⅲ検	土坑	25					欠番
Ⅲ検	土坑	26	94	86	27		上面に粘土が貼られている
Ⅲ検	土坑	27	76	65	22		桶出土
Ⅲ検	土坑	28	79	63	17		土坑23に切られる
Ⅲ検	土坑	29	146	110	19		底面に石列のような礫あり
Ⅲ検	土坑	30	81	65	17		
Ⅲ検	土坑	31	69	38	26		
Ⅲ検	土坑	32	61	55	14		P29を切る
Ⅲ検	土坑	33	45	42	10		柱残存 柱穴

S0000000000000000000000000000000000000	Address Andrews	errest a	1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1	規模		E zza ez ez ez ez ez ez	
検出面	種別	番号	長軸	短軸	深さ	時期	The section of the s
Ⅲ検	土坑	34	69	58	17	SECOND SECOND SECOND SECOND SE	
Ⅲ検	土坑	35	126	93	19		土坑52・P32・33を切る
Ⅲ検	土坑	36	71	58	12		土坑37に切られる
Ⅲ検	土坑	37					欠番
Ⅲ検	土坑	38	74	54	24		上面に粘土が貼られている
Ⅲ検	土坑	39	90	70	18	,	柱残存 柱穴 底面礫出土
Ⅲ検	土坑	40			10		欠番
Ⅲ検	土坑	41	73	64	21		土坑63に切られる 土坑42に接する
<u>Ⅲ</u> 検	土坑土坑	42	40	(40)	20		土坑63・41 P 34に接する
<u>Ⅲ</u> 検	土坑土坑	43	(90)	(85)	30		西部南部調査区外
<u>Ⅲ検</u>	土坑	44	64	41	20		P2を内包する 土坑16を切る P1に接する
<u>Ⅲ検</u>	土坑	45	64	63	11		F2を自己する 工列10を列る F1に後する
<u>Ⅲ</u> 検	土坑	46	57	55	18		ト西に料土が貼られている
<u> </u>	土坑	47	66	53	33		上面に粘土が貼られている
<u> </u>		48	87	80	38		土坑53に接する 底面礫出土 石列1の延長か?
<u>Ⅲ</u> 検	<u>土坑</u> 土坑	48	01	υV	J0		土坑47・P19に接する 底面礫出土 石列1の延長か?
<u>Ⅲ</u> 検		50 50	103	83	19		欠番
<u>Ⅲ</u> 検	土坑	50	103	ია	18		/¬
	土坑		62	(22)	12		欠番 しばない ほうしょ オ
<u>Ⅲ検</u>	土坑	52					土坑35に切られる
Ⅲ 検	土坑	53	57	42	36		土坑47・48に接する
Ⅲ 検	土坑	54	80	59	16		土坑55を切る
Ⅲ 検	土坑	55	(38)	52	17		土坑54に切られる
Ⅲ 検	土坑	56	146	126	22		
Ⅲ検	土坑	57					欠番
Ⅲ検	土坑	58					欠番
Ⅲ検	土坑	59					欠番
Ⅲ検	土坑	60	62	41	32		
Ⅲ検	土坑	61					欠番
Ⅲ検	土坑	62	111	103	27		底面礫が貼り付けられている
Ⅲ検	土坑	63	60	53	28		土坑41を切る 土坑42・P34に接する
Ⅲ検	土坑	64	140	109	18		土坑65に接する
Ⅲ検	土坑	65	129	124	18		底面礫出土 溝状2を切る
Ⅲ検	土坑	66	104	65	26		溝状2に接する
Ⅲ検	ピット	1	40	43	21		土坑16を切る 土坑44に接する
Ⅲ検	ピット	2					欠番
Ⅲ検	ピット	3	32	28	18		上面に粘質土堆積
Ⅲ検	ピット	4	9	9			筒状に鉄分集中
Ⅲ検	ピット	5	43	40	21		
_Ⅲ検	ピット	6					欠番
Ⅲ検	ピット	7	42	39	10		上面に粘土が貼られている
Ⅲ検	ピット	8	36	30			
Ⅲ検	ピット	9	13	12			筒状に鉄分集中
Ⅲ検	ピット	10	10	9			筒状に鉄分集中
Ⅲ検	ピット	11					欠番
Ⅲ検	ピット	12					欠番
Ⅲ検	ピット	13					欠番
Ⅲ検	ピット	14					欠番
Ⅲ検	ピット	15					欠番
Ⅲ検	ピット	16					欠番
Ⅲ検	ピット	17	43	33	18		
Ⅲ検	ピット	18	57	44	14		土坑19を切る 底面粘土出土(粘土は土坑19のものか?)
Ⅲ 検	ピット	19	46	40	28		
Ⅲ検	ピット	20	50	33	17		
//	/					1	

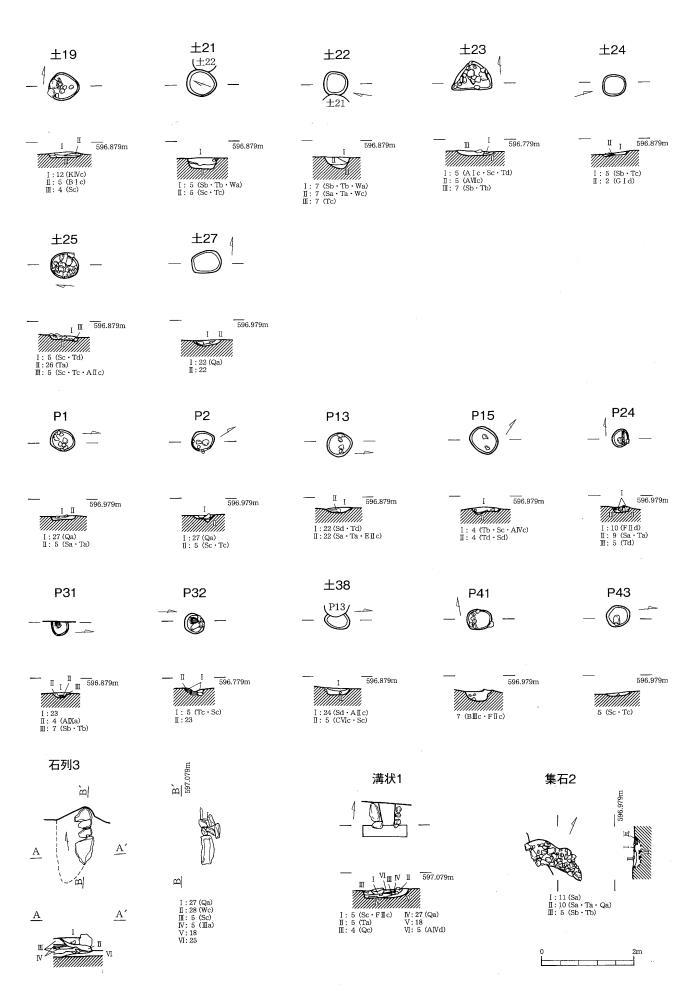
検出面	種別	番号	長軸	規模短軸	深さ	時期	備考
Ⅲ検	ピット	21	36	35	17		
Ⅲ検	ピット	22					欠番
Ⅲ検	ピット	23	35	(17)	14		間知石列1に切られる
Ⅲ検	ピット	24	34	29	38		P 25に接する 柱穴
Ⅲ検	ピット	25	32	30	38		P 24に接する 柱穴
Ⅲ検	ピット	26	31	29	27		P27に接する 柱穴
Ⅲ検	ピット	27	40	37	34	-	P 26に接する 柱穴
Ⅲ検	ピット	28	33	32	13		土坑32・ P 29に接する
Ⅲ検	ピット	29	28	(20)	7		土坑32に切られる P28・30に接する
Ⅲ検	ピット	30	25	25	10		P31を切る P29に接する
Ⅲ検	ピット	31	40	34	11		P30に切られる 柱穴
Ⅲ検	ピット	32	50	27	12		土坑35に切られる P33に接する
Ⅲ検	ピット	33	35	(27)	15		土坑35に切られる P32に接する
Ⅲ検	ピット	34	(16)	17	29		土坑42・63に接する
Ⅲ検	ピット	35	43	37	27		·
Ⅲ検	ピット	36	18	18	11		柱残存 柱穴
Ⅲ検	ピット	37	47	45	26		:
Ⅲ検	ピット	38	30	26	17		P39に接する
Ⅲ検	ピット	39	29	21	11		P38に接する
Ⅲ検	ピット	40	59	51	35		
Ⅲ検	ピット	41	(28)	37	14		南部調査区外
Ⅲ検	ピット	42	34	21	23		
_ Ⅲ検	ピット	43	41	35	31		杭が並んでいる P44に接する 北部に礫集中
Ⅲ検	ピット	44	24	20	11		P43に接する
<u> </u>			L				
V検	土坑	1	97		13		南部調査区外
V検	土坑	2	56	55	10		P2を切る
V検	土坑	3	62	56	7		
V検	土坑	4	69	(44)	7		西部調査区外 柱残存 柱穴
V検	土坑	5	79	74	6		中心に礎石状の石あり 柱穴か?
V検	土坑	6	71	62	23		木材の下に入っている
V検	土坑	7	53	45	13		木材の下に入っている
V検	土坑	8	58	90	8 12		排水溝に切られる
V検	土坑	9	96	89	10		排水溝に切られる
V検	土坑	10	50	45 45	10		流路を切る
V検	土坑	11	60 70	53	10		流路を切る
V検	土坑	12	43	40	5		流路を切る 土坑14・溝1を切る 柱残存 柱穴
V検 V検	土坑	13	81	62	15		土坑14・溝1を切る 柱残仔 柱八 土坑13に切られる 土坑15・溝1を切る
V検	土坑	15	90	67	9	 	土坑14に切られる 土坑15・再1を切る 土坑14に切られる 溝1を切る
V検V検	土坑 土坑	16	70	62	9		工机14に切られる
V快V検	土坑	17	66	V	11		西部排水溝に切られる
V検	土坑土坑	18	56		14		東部調査区外
V検	土坑土坑	19	83	34	23		│ / \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \
V検	土坑土坑	20	43	38	30		
V 検	土坑土坑	21	50	49	32		
V検	土坑土坑	22	61	40	14		土坑23を切る
V検	土坑	23	26	(21)	9	-	土坑22に切られる
V検	土坑	24	60	/	9		P11に切られる 東部排水溝に切られる 柱残存 柱穴
V検	ピット	1	45	38	9		
V検	ピット	2	60	59	13		土坑2・P51に切られる
V検	ピット	3	39	31	8		
V検	ピット	4	50	45	17		P5を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	5	45	43	28		P4に切られる 柱残存 柱穴
							, /4 / 14 m

検出面	種別	番号	長軸	規模 短軸	深さ	時期	備考:
V検	ピット	6	49	46	10		**************************************
V検	ピット	7	46	41	6		-
V検	ピット	8	35	33	15		
V検	ピット	9	34	30	10		
V検	ピット	10	41	40	10		
V検	ピット	11	40	34	10		土坑24を切る
V検	ピット	12	27	26	45		柱穴か?
V検 V検	ピット	13 14	50 17	43 17	20 6		
V検	ピット	15	20	15	5		
V検	ピット	16	23	28	7		P44に切られる
V検	ピット	17	27	23	11		1 44(09) 5416
V検	ピット	18	33	24	13		
V検	ピット	19	17	19	18		
V検	ピット	20	33	33	10		溝2を切る
V検	ピット	21	35	25	10		
V検	ピット	22	23	23	11		
V検	ピット	23	42	32	20		
V検	ピット	24	26	24	11		P25に接する
V検	ピット	25	13	13	11		P24に接する
V検	ピット	26	31 32	23 30	7 9		
V検 V検	ピット	27 28	45	40	21		シオログラテトやしたマ
V検	ピット	29	52	30	6		流路に接する 流路を切る 東部排水溝に切られる
V検	ピット	30	28	28	30	•	加増を切る 東部排水再に切られる 柱残存 柱穴
V検	ピット	31	15	15	7		在沒作。在八
V検	ピット	32	35	30	15		流路を切る
V検	ピット	33	33	30	13	,	溝1・P33に接する
V検	ピット	34	33	30	14		P33に接する
V検	ピット	35	30	29	23		P36に接する
V検	ピット	36	30	21	11		P35に接する
V検	ピット	37	48	38	16		溝1を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	38	34	34	23		
V検	ピット	39	17	17	8		土坑20・P41に接する
V検 V検	ピット	40	15 17	15 15	8		土坑16を切る L k 200 - R
V検	ピット_ ピット	42	16	15	16		<u>土坑20・P39・P42に接する</u> 土坑20・P41に接する
V検	ピット	43	20	10	13		南部排水溝に切られる
V V検	ピット	44	26		13		P16を切る P45に接する 東部排水溝に切られる
V検	ピット	45	25		18		P44に接する
V検	ピット	46	33	32	11	,	溝1を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	47	23	23	5		溝1を切る 柱残存 柱穴
V検	ピット	48	19	14	21		
V検	ピット	49	21	20	8		溝1に接する
V検	ピット	50	31	26	20		溝1を切る
V検	ピット	51	50	48	18		P2を切る 南部調査区外
V検	ピット	52	63	62	23		土坑16に切られる 溝1を切る
V検	ピット	53					欠番
Ⅱ検	集石	1					欠番
Ⅱ検	集石	2	3				大台 土坑17に接する 鍛冶炉か?
Ⅱ検	集石	3					大番 一 大番
Ⅱ検	石列	1					欠番
Ⅱ検	石列	2					欠番
						-	

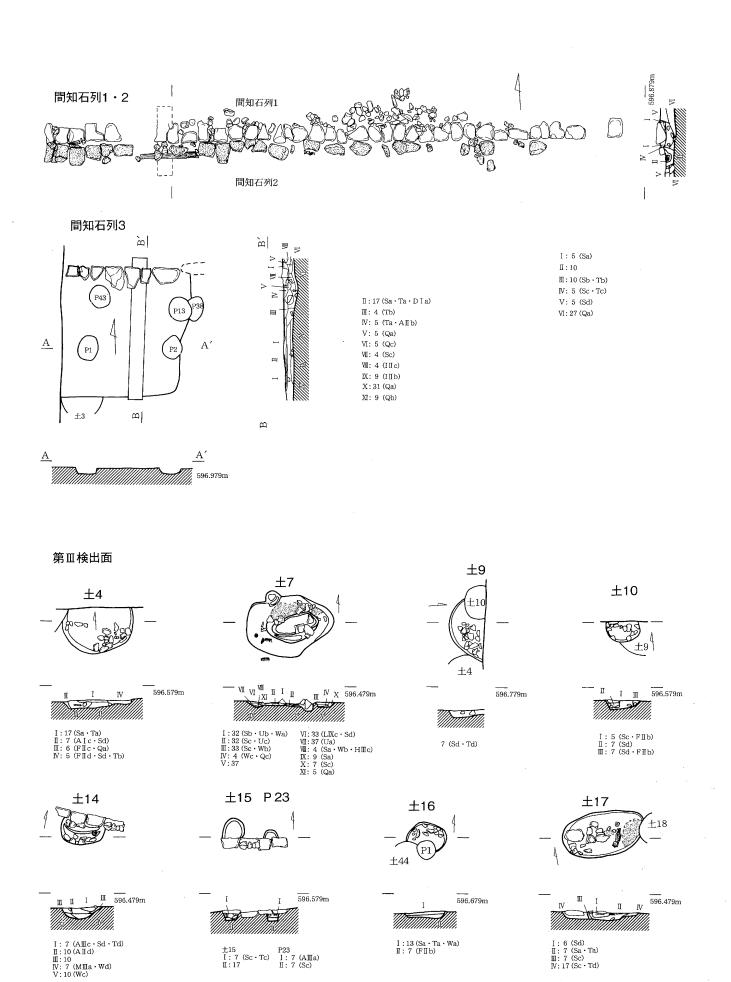
検出面	種別	番号	長軸	規模 短軸	深さ	時期	備考
Ⅱ検	石列	3	111	80	43		
Ⅱ検	溝状	1	62	63	5		
Ⅱ検	間知石列	1	1241	80	19		間知石列2を切る
Ⅱ検	間知石列	2	1073	40	12		間知石列1に切られる
Ⅱ検	間知石列	3	248	48	16		
Ⅲ検	石列	1	422	50	5		
Ⅲ検	石列	2	450	68	20		
Ⅲ検	間知石列	1	230	20	20		
Ⅲ検	溝状	1	303	34	. 19		
Ⅲ検	溝状	2	392	56	10		
V検	溝	1	551	110	55		土坑13・14・15・P37・46・47・50・52に切られる P 33・49に接する
V検	溝	2	214	72	11		土坑12・P20に切られる



第8図 遺構(1)

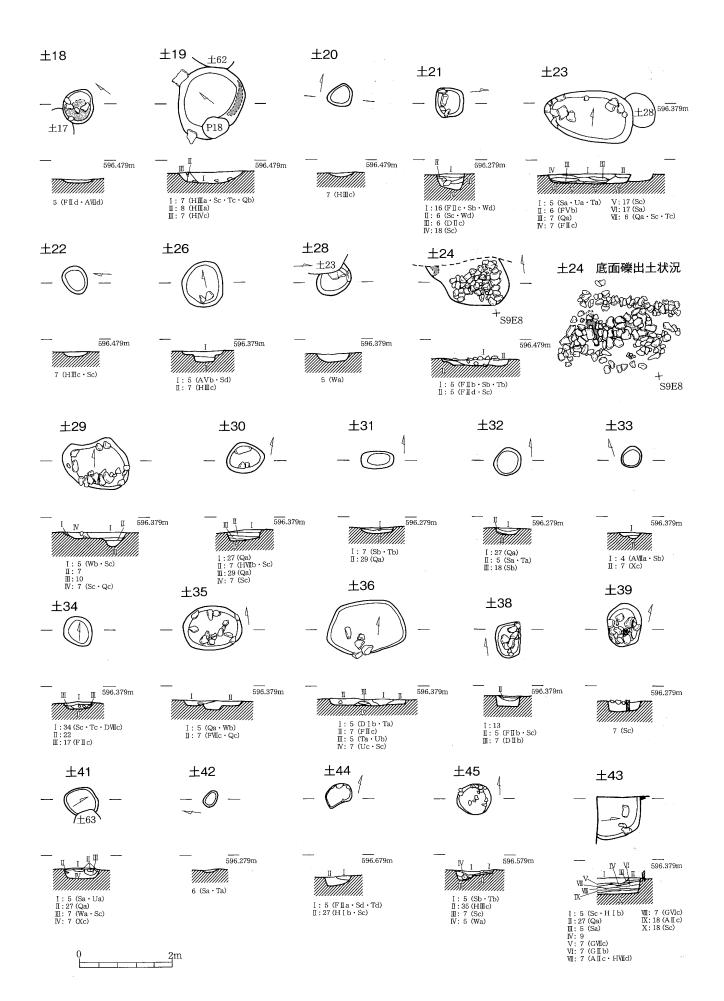


第9図 遺構(2)

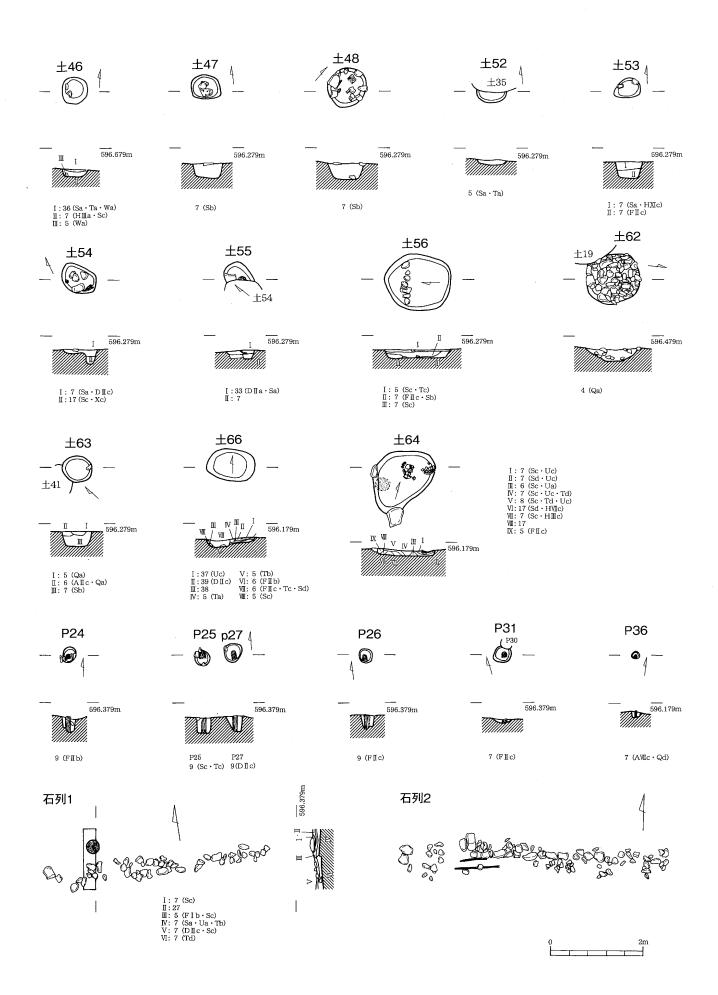


第10図 遺構(3)

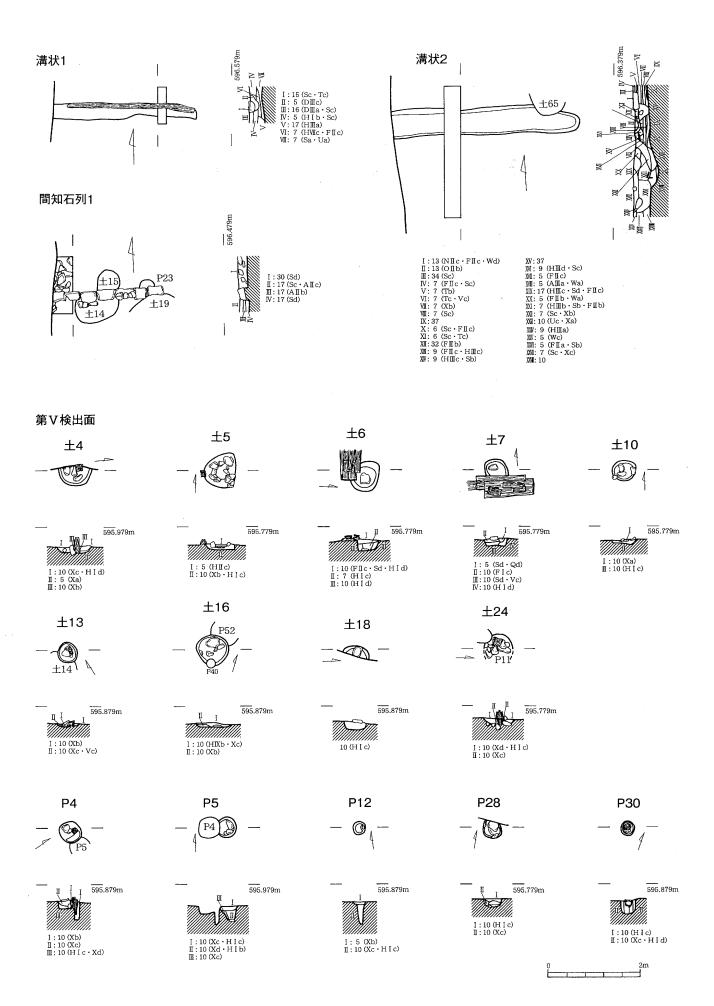
2m



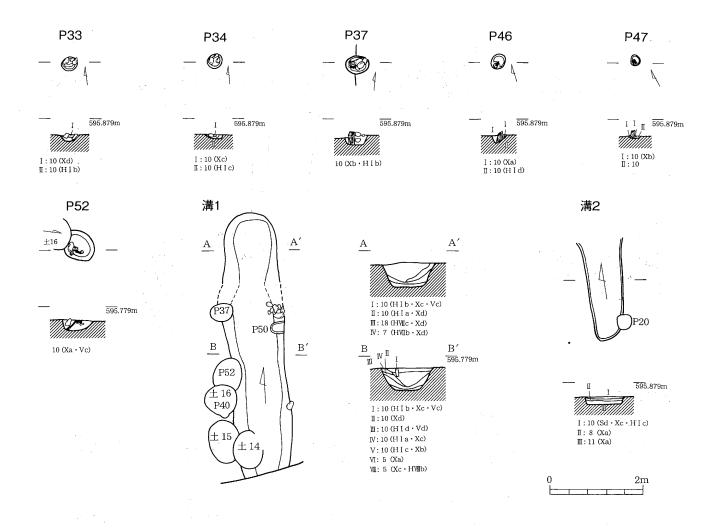
第11図 遺構(4)



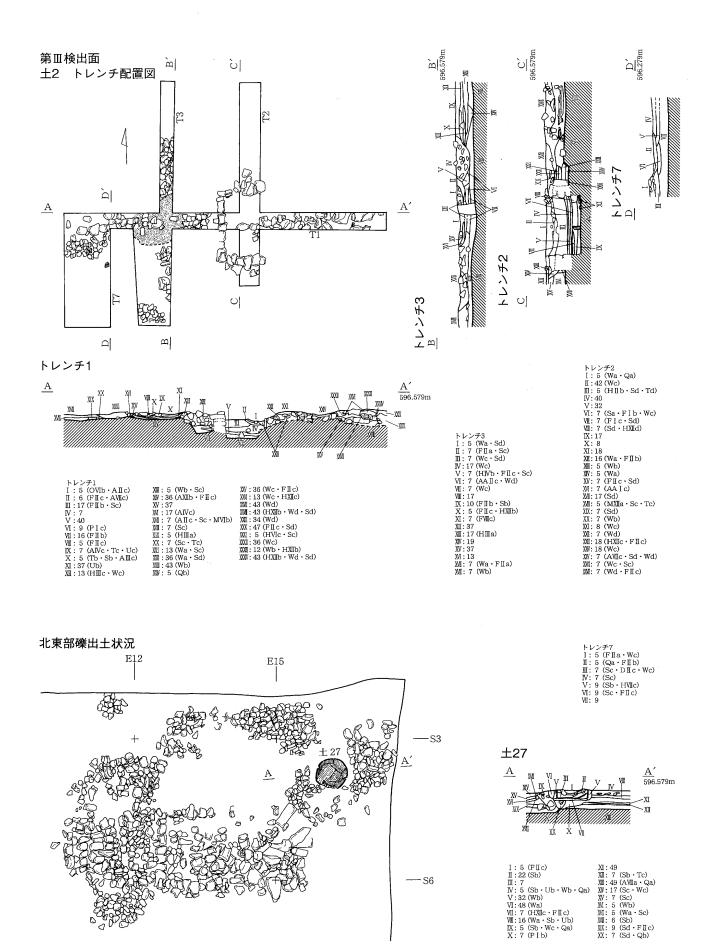
第12図 遺構(5)



第13図 遺構(6)



第14図 遺構(7)



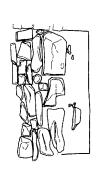
第15図 遺構(8)

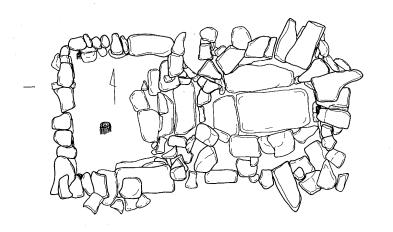
2m

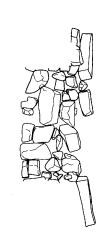
-S6

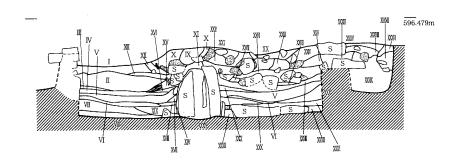
第Ⅲ検出面 土2 石組出土状況











- I :16 (Sc · Tc · FII c · Wd)
 II :5 (HII b · Sd · Td)
 III :41
 IV :40
 V :32
 VI :7 (Sa · FI b · Wc)
 VII :17
 VII :8
 IX :32 (Wa)
 X :42 (Wb)
 XX :43 (Td · PII c)
 XX :32 (Wb · HIVc)
 XX :7 (FVIIa · Wc)

- XV: 44 (FIIIc · Wc)
 XV: 34 (FVIIa)
 XX: 6 (FIIIa · Xc)
 XX: 45 (FIIb)
 XX: 7 (YXIa · Xc)
 XX: 44 (O I b · MIIIc)
 XX: 5 (Wa · Qa)
 XX: 42 (Wb · Sd)
 XXI: 42 (Wb · Sd)
 XXII: 43 (Sc)
 XXII: 7 (HIIII · Wb · FIIc)
 XXII: 7 (HIIII · Wb · FIId)
 XXII: 43 (Wb · AAIIc)

- XMI: 34 (YXIIIb)
 XMI: 34 (AA I b · YXIIc)
 XMI: 34 (AA I b · YXIIc)
 XMI: 34 (Wa)
 XMI: 37 (Sa)
 XMI: 30 (Sc · FII c)
 XMI: 43 (Wb · FII a)
 XMI: 7 (ZXIIc · FII b)
 XMI: 13 (Wc · HXIIc)
 XMI: 35 (Wd)
 XMI: 47 (FII c · Sd)
 XMI: 12 (Wb · HXIIb)
 XMI: 43 (HXIIb · Wd · Sd)

第16図 遺構(9)

4 出土遺物

1 土器・陶磁器・瓦・土製品

今回の調査では非常に多数の遺物が出土した。そのうち図化可能なものとして484点掲載した。種別としては土器・陶器・磁器・土製品・瓦がみられ、器種・器形も多岐にわたっている。これらの出土遺物はほぼ全てが戦国時代末~近代のものである。以下検出面毎に概要及び器種・器形の傾向等を述べていく。

(1)器種分類

ア)磁器

磁器は91点図化した。産地を見ると肥前産81点(89.0)、瀬戸美濃産6点(6.5%)、中国漳州窯産3点(3.2%)、 と肥前産が大多数を占めている。これは江戸時代後期に瀬戸美濃地方で磁器生産が始まるまでは磁器流通の 主体が肥前地方にあったことを示していると思われる。

器種は多様であるため、形状を中心に碗類・皿類・鉢類・壷類・瓶類・蓋類・その他に大別した。さらにその中で用途別に碗類は碗・小杯・猪口・蕎麦猪口、皿類は皿・段皿、鉢類は鉢・段重、瓶類は瓶・徳利・神酒徳利に細分した。また、その他として向付、紅猪口、人形水滴などがみられた。器種別にみると生活雑器と考えられるものとして碗、小杯、猪口、蕎麦猪口、皿、段皿、鉢、段重、徳利、神酒徳利、壷類、蓋が出土している。中でも碗、皿が圧倒的に多く、碗は36点(39.5%)、皿は29点(31.8%)みられた。やはり生活の道具として碗や皿が身近にあったのであろう。また、生活雑器以外では人形水滴、向付、紅猪口等がみられるが、点数はごくわずかなものであった。

イ)陶器

陶器は磁器に比べ点数が多く、265点図化することができた。産地もバラエティに富んでおり、瀬戸美濃産、肥前産、京・信楽産、常滑産などがみられる。比率は瀬戸美濃産219点(82.6%)、次いで肥前産28点(10.5%)、京・信楽産13点(4.9%)であり、瀬戸美濃産が極端に多くなっている。磁器では肥前産が大多数を占めていたことを考慮すると、磁器は肥前産、陶器は瀬戸美濃産が主体的に流通していた事が推察できる。

器種は碗類、皿類、鉢類、蓋類、壷類、瓶類、甕類、その他に分類した。さらに磁器と同じく用途別に碗類は碗・小杯、皿類は皿・灯明皿・灯明受け皿、鉢類は鉢・擂鉢・捏鉢・植木鉢、蓋類は蓋、壷類は壷・四耳壷、瓶類は瓶・徳利・神酒徳利、甕類は甕というように細分化した。

器種については碗59点(22.2%)、皿82点(30.9%)、鉢16点(6.0%)、すり鉢15点(5.6%)、蓋9点(3.3%)が特に多く、磁器と同じく生活雑器が多く出土しているといえる。また、磁器に比べてより多様な器種がみられる事も大きな特徴であり、より身近な道具として陶器があったことが窺える。もう一つ大きな特徴として天目茶碗8点、向付10点、茶入2点と商人地にしては茶器が多く出土していることが挙げられる。特に天目茶碗と向付は多く出土しているため、当該地の住人が茶の湯を嗜んでいたことが推察できる。その他、特殊な品として仏花瓶、仏飯具、神酒徳利などの神仏用品や煙管の雁首、餌猪口、秉燭、鬢油壺、鬢盥等がみられた。ウ)土器

本遺跡では土師質のものを土器として区分した。これらは総じて無釉のものである。土器はどの検出面でも普遍的にみられ、総計113点図化することができた。陶磁器とは違い、器種はごく限られており、皿79点(68.1%)、内耳鍋23点(19.8%)がほとんどである。その他のものとしては蓋、植木鉢、焙烙鍋、火鉢が少数あるのみであった。土器皿のほとんどには灯明皿として使用された痕跡がみられるが、中には底面に墨書のあるものも確認できた。墨書土器は4点出土しており総じて底面に墨書が書かれていた。墨書は「三」が1点、「○」が3点であった。

また、数点ではあるが瓦質陶器も出土している。瓦質陶器は3点の内2点が火鉢であり、残る1点は壷類であった。総じて残存状態が悪く、詳細は不明である。

工)瓦

瓦は破片での出土が多く、出土点数は多いものの図化できたものは3点のみであった。2点が丸瓦であり、 1点が五七桐紋の軒丸瓦であった。

オ)土製品

土製の出土物の中でも土器・陶磁器にあたらない製品を土製品として区分した。土製品は非常に少なく、 9点を図化したのみである。9点のうちのほとんどは鞴の羽口であり、計6点出土している。残る3点は土鈴2 点と面摸1点である。共に遊戯具であると考えられる。

(2)各検出面の様相

第 I 検出面

第 I 検出面では近世に属する遺物を中心に29点の土器・陶磁器を図化した。出土量は磁器4点(13.8%)、陶器24点(82.8%)、土器1点(3.4%)と陶器が多い。陶器磁器共に瀬戸美濃産が圧倒的に多く、実に90%以上が瀬戸美濃産である。これは当該期の陶磁器流通においては瀬戸美濃が中心であったことを示していると思われる。

全体的な遺物の様相から第 I 検出面は19 c 以降、明治期であると思われる。

ア)磁器

出土点数は多くはないが、瀬戸美濃産が2点、肥前産が2点の計4点出土している。器種は3点が碗、残る1点が蓋であった。

2は染付の筒型碗である。器面はほぼ直に立ち上がり、外面には青海波に植物が描かれている。肥前産で18 c 中ごろに比定されるであろう。

イ)陶器

陶器は総じて瀬戸美濃産のものであった。器種は多岐に渡っており、碗・徳利・壷・鉢・灯明受け皿等の 生活用品に加え、植木鉢や水滴等も出土している。中でも碗3点、皿3点、徳利4点が若干多いように見受け られるが、点数的な差異が大きいわけではないため各器種が普遍的に出土しているといえよう。

22~24はいわゆる貧乏徳利である。やや灰色の胎土に鉄釉で文字が書かれている。総じて破片での出土となるため文字は読みとり難いが、23には「本」の字が認められる。5は鎧手茶碗である。内面と外面口縁部に鉄釉がかけられ、外面には回転施文具による連続沈線が施されている。

ウ)土器

土器は17の1点のみ図化した。植木鉢の底部と思われ、中心と思われる箇所には穿孔がみられる。帰属時期等は不明である。

第Ⅱ検出面

第 II 検出面では134点の遺物を図化した。磁器59点(44.0%)、陶器64点(47.7%)、土器6点(4.4%)、土製品5点(3.7%)と他の検出面に比べて磁器が多く見受けられる。産地では瀬戸美濃産49点、肥前産61点と肥前産が多く出土しており、特に磁器は59点中55点が肥前産である。これは当該期に於いては瀬戸美濃地方での磁器生産が行われていないことに起因すると思われる。第 III 検出面に比べると磁器の出土点数が3倍近く増加していることを踏まえると、この頃から肥前産磁器の流通量が増加したと考えられるであろう。陶器は64点中45点が瀬戸美濃産であり、次いで京・信楽産が10点、肥前産が6点みられる。このことから陶器は瀬

戸美濃が流通の主流を占めていたことが分かる。

器種構成としては碗類36点、皿類38点など生活雑器である碗皿類が多数を占めている。また、少数ではあるが仏花瓶、仏飯具、神酒徳利など信仰に関わるものや向付なども出土している。

上層からの混入品も多数あると思われるが、全体的な様相からこの面は18 c 中葉~後葉に属すると考えられる。

ア)磁器

磁器は59点を図化した。先に触れた通り59点中55点が肥前産である。残る4点は瀬戸美濃産であるがこれらは上層からの混入遺物であると考えられるものであるため、磁器は肥前産のみが出土していると考えてもよいであろう。

器種構成は碗類19点(32.2%)、蕎麦猪口3点、段重3点、皿類23点(38.9%)、瓶類2点、徳利2点、神酒徳利2点、 蓋3点、人形水滴1点であり、やはり碗皿類が多く出土している。

36は染付の碗である。外面には斜格子文の中に菊花文が描かれている。器形はやや丸みを帯びて立ち上が る碗であるが、内面口縁付近の釉が削り取られている。18c中葉のものであろう。41は肥前産の段重であ る。外面は恐らく8分割され、宝文と蛸唐草文が交互に配置されている。器形はほぼ垂直に立ち上がり、内 面口縁部付近は釉が削り取られている。18c中葉~後葉のものであろうと思われる。45はやや斜めに立ち 上がる蕎麦猪口である。 外面には氷裂地に菊花様の花が描かれている。 18c後半~ 19c初頭のものであろう。 62は染付の蓋である。上面には連弁文がみられる。内面には中心に向けて5つの文字が書かれているが、読 み取りづらく何の字であるかは不明である。64はやや口径が広い碗である。外面には蛸唐草文、内面には 四方襷がみられる。蛸唐草文はやや省略されたものであり、四方襷も崩れている。恐らく18c中葉~後葉 のものであると思われる。68・72は染付碗である。外面を3単位に区画し、区画内に紅葉の葉を描いている。 内面見込みには「寿」の字が記されている。双方共に17c後半から18c初頭であろうと思われる。76は斜格 子に菊花文が描かれた筒型碗である。胴部のみの出土であるが、やや薄手で垂直に立ち上がる碗であると思 われる。78は染付の輪花碗である。外面には矢羽状の区画の間に井桁様の文様が施されており、口縁部の 一部を窪ませて輪花状に成形している。全面被熱しており、やや白色化している。80・81はやや薄手の蕎 麦猪口である。双方共に底径がほぼ同じで外面に同様の風景文が描かれているため同製品であると考えられ る。18 c 中葉~後葉に比定されるであろう。106は口径18cmの大皿である。内外面ともに呉須染付が施され ており、外面は唐草文、内面は花唐草文が描かれている。高台が低く緩やかに立ち上がる皿で口縁部には口 錆が施されている。18c中葉の皿であろうと思われる。110は肥前産の段皿である。内面には梅花文、外面 には唐草文が描かれている。口縁部付近で若干の段がつき、口縁は輪花状に成形されている。また、口縁部 に口錆がみられる。159は人型の水滴である。欠片での出土であるため詳細は判断しがたいが、右手に鯛を 抱えた恵比寿様であると思われる。外面は透明釉を施釉した後金や赤で上絵付けされているが、絵付けのほ とんどは剥落してしまっており詳細は分からない。また、右手の肩部には穿孔がみられる。

イ)陶器

陶器は64点を図化した。産地をみると45点が瀬戸美濃産、10点が京・信楽産、6点が肥前産であり、瀬戸 美濃産が70%を占めている。瀬戸美濃産陶器には多数の器種が見受けられるが、中でも碗類、皿類、鉢、瓶 類などの食膳具や秉燭、擂鉢、灯明受け皿などの生活雑器が多く出土している。また、その他の器種でも水 滴、仏花瓶、仏飯具、神酒徳利など恒常的に使用するものが多くみられるため、瀬戸美濃産陶器はより身近 に使用されていたと考えられる。京・信楽産陶器はほぼ碗で構成されている。碗の多くは灰釉に上絵付けを 施されたものであり、京焼と考えられる。肥前産もやはり碗、皿、雪平鍋などと食膳具が多く見受けられる が、向付が1点出土している事も特徴の一つとされるであろう。 34は鉄絵皿である。器高が低くやや厚みのある皿で、中央には鉄釉で樹木のような絵付けが施されている。見込みには3箇所トチン痕がみられる。18 c 初頭~中葉の瀬戸美濃産であろう。44は唐津向付の一部と思われる。中央付近から若干段を持ち、外側に大きく開く形状であり、口縁部は恐らく輪花状に成形されていると思われる。内面は鉄釉で絵付けが施されており、やや薄い長石釉が施釉されている。16 c 末~17 c 初頭のものであろう。47は肥前産の大皿である。全面が被熱してしまっているため釉調が判別し難いが、呉須と鉄釉で絵付けされた後透明釉が施釉されていると思われる。17 c 後半~18 c 前葉のものであろう。48の蓋は無釉陶器の蓋である。外面は同心円状にハケ目がみられ、内面には窯印と思われる印刻がみられる。内面には一面にベンガラが付着している。ベンガラは器面に塗布してあるわけではなく付着している程度であるので、おそらくベンガラ容器として使用されていたものであると思われる。51は灰釉・鉄釉掛け分けの仏花瓶である。扁平な脚からふくらみを帯びた胴部の上端に耳が付き、口縁が大きく広がる形状であり、上半は灰釉下半は鉄釉が施釉されている。瀬戸美濃産18 c 中葉のものであろうと思われる。

82は京焼の丸碗である。全体的に丸みを帯びた形状をしており、灰釉が施釉されている。外面には銅緑釉 で唐草様の模様が上絵付けされている。18 c 前半代であろうと思われる。83は厚みのある丸碗である。外 面は呉須と鉄釉で樹木が絵付けされている。肥前産であると思われるが帰属時期は不明である。85・89は 共に京焼の碗である。85は口縁端部が外側に反る丸碗、89は胴部が垂直に立ち上がる筒型碗である。双方 共に鉄絵付けされており、同様の松文が描かれている。共に透明釉施釉であるが被熱して若干白色化してい る。18c中ごろに帰属するであろう。91の皿は摺絵皿である。全面が被熱しているため詳細がつかみにく いが型紙摺りで桜花が描かれていると考えられる。17 c 後半~18 c 前半の肥前産であろう。92は底部の一 部のみの出土であるが、恐らく碗であると思われる。外面には灰釉が施釉されており、高台には錆が塗布さ れている。底面高台内には墨書がみられる。何らかの文字であると思われるが、破片のみの出土であるため 全容は不明である。120から123は灯明受け皿である。123は受けが低く、それ以外は受けの高い皿で、121 が鉄釉施釉である以外は総じて灰釉が施釉されている。また、122の受け皿は油口が穿孔により設けられて いた。140の鉢は京焼であると思われる。やや低い高台から丸みを帯びて立ち上がり、外面を輪花状に成形 した鉢である。胴部中央には鉄釉で花弁文が絵付けされている。18c末に帰属するであろう。154・155は 陶胎染付の仏飯具である。155の方が口径がやや大きいが双方共に斜格子に菊花文が描かれているため同製 品であると考えられる。18 c 後半に帰属するであろう。160は総織部の水滴であると思われる。上部の1/4程 度の破片であるため詳細は不明であるが、型押し成形で菊花弁様の切り込みの上部に葉が表現されている。 穿孔は上部外側よりに空けられており、中央部にも穿孔の一部と思われる箇所がみられる。

ウ)土器

土器は6点出土した。器種ごとの内訳は皿3点・焙烙鍋2点・火鉢1点である。

125・126の皿にはススが付着しているため、灯明皿としての使用が推定される。124はカワラケであると思われる。器高は低く、底面には回転糸切り痕がみられる。口径は16.8cmと広く、スス等の痕跡はみられないため灯明皿としてではなく、地鎮や抱衣皿など他の用途が想定できるであろう。147は口径13.8 c m とやや小ぶりの焙烙鍋である。内外面ともに丁寧なミガキがかけられていた。143は一部のみの出土であるため詳細は図りかねるが、恐らく火鉢の口縁部であると考えられる。外面はほぼ直に立ち上がっており、「田」と思われる刻印がみられた。器面はナデ調整の後外面のみミガキがかけられている。

エ)土製品

5点の土製品が出土している。総じて鞴の羽口であった。大きさはおおよそ同じであると思われ、口径は約6~8cmの範囲でまとまっている。中でも58は胴部外面に鉄滓が付着していた。また、49は外面に被熱痕が認められた。

第Ⅲ検出面

第Ⅲ検出面からは167点の遺物が出土している。種別ごとの内訳をみると、磁器19点(11.3%)、陶器91点(54.4%)、土器52点(31.1%)、瓦2点(1.1%)、土製品3点(1.7%)であった。磁器が若干出土しているがやはり陶器の割合が多く、実に半数以上が陶器であった。また、これら陶器の中に2点のみ瓦質陶器がみられた。土器は陶器に次いで出土量が多く、全体の約30%が土器である。土器のほとんどは皿であり、ススが付着しているものが多いため、灯明皿としての用途が示唆される。土製品は3点のみ出土した。

器種別の様相では碗26%、皿15.5%、鉢16%とやはり食膳器が多数出土している。鉢類は鉢と擂鉢がほぼ 半数ずつ出土している。擂鉢はほぼ陶器であったが1点のみ土製の擂鉢が出土している。また、その出土数 こそ少ないが、内耳鍋、焙烙鍋など多種多様な器種がみられることも特徴の一つといえよう。その他特殊品 として陶器製のキセルや面摸、土製の鈴、茶器とされるものなども出土している。特に茶器においては、調 査地が町屋であるとされている場所であることを踏まえると、注目すべき特徴であると言えよう。

産地別では瀬戸美濃産79点(47.3%)、肥前産24点(14.4%)、京・信楽産2点(1.2%)、常滑産1点(0.5%)、中国産3点(1.8%)、在地産47点(28.1%)、産地不明品11点(6.6%)と瀬戸美濃産が約半数を占めている。瀬戸美濃産は全てが陶器であり磁器はみられない。反対に肥前産は陶器8点、磁器15点と磁器が多い。これは当該期には瀬戸美濃地方における磁器生産が行われていないことに起因すると思われ、陶器は瀬戸美濃産、磁器は肥前産が占めるという流通の様相が見受けられる。

出土遺物からおおよそ17c中葉~18c前葉に帰属すると思われる。

ア)磁器

18点の磁器が出土している。産地別にみると、3点のみ中国産磁器が出土している他は全て肥前産磁器である。器種は碗8点、皿6点、鉢1点、向付1点、小杯1点、猪口1点とほとんどが染付の碗・皿であったが、1点のみ波佐見産の向付が出土している。

碗は8点出土している。181は筒型碗であるが、それ以外のものは丸碗となる。全てに染付がみられ、226 は山水文、235・236・265は草花文が描かれていた。263には漆継ぎ痕がみられる。外面には草花文の中に 屏風が描かれている。181は筒型碗である。高台端部及び底面には砂が付着していた。

213は猪口である。底部のみの出土であるが見込みには菊花、底面には「福」の銘がみられる。211は小杯である。灰白色の胎土に透明釉がかけられており、全面が若干被熱している。

皿は6点みられた。内177・204・227・279の4点が肥前産、169・217の2点が中国産である。279は染付皿の胴部である。見込みには草花文と思われる文様が描かれている。177は段皿である。見込みには雲文が描かれ、その下には菊花文が描かれている。204・227は同形の皿である。ロクロで成形された後内面口縁部に型打ちで捻花状の模様が入れられている。227はほぼ完形で出土しており、見込みには染付で山水文に鳥が描かれている。双方とも17 c 中葉の伊万里製品であろう。204は口縁部のみの出土である。断面の一部には漆継ぎ痕がみられる。

169は中国漳州窯産の皿である。外面は雲文で充填され、見込みには雲間に龍が描かれている。217も同じく漳州窯産の皿である。17 c 前葉のものであろう。169に比べてやや小ぶりな皿であり、見込みには鳳凰が描かれている。底面には銘が描かれており、恐らく「長」であると思われるが一部しかみられず詳細は不明である。17 c 中葉のものと思われる。

鉢は237の1点のみ出土している。高台の低い鉢であり、見込みには草花文が描かれている。 $17\,\mathrm{c}$ 中葉に帰属するであろう。241は波佐見産青磁の向付である。型打ち成形で見込みには花文と思われる印刻がみられる。口縁部には口錆が施されている。 $17\,\mathrm{c}$ 中頃のものであろうと思われる。

イ)陶器

94点の陶器が出土している。内2点は瓦質陶器である。陶器は瀬戸美濃産が最も多く、79点(84.0%)出土している。次いで肥前産9点、京・信楽産2点、常滑産1点が出土している。数量としては瀬戸美濃産が突出して多く、ほぼ瀬戸美濃産によって占められているといってもよいだろう。

器種は実に多種多様なものが出土しており、碗、小杯、皿、灯明受け皿、鉢、擂鉢、捏鉢、香炉、壺類、四耳壷、神酒徳利、急須、鬢盥、キセル、向付、茶入、天目茶碗などがみられる。中でも食膳具である碗皿は多くみられ、擂鉢も若干多く見受けられる。また、向付・天目茶碗・茶入等の茶器がみられることも特徴であるといえよう。

192は錆釉の碗である。口縁部の一部のみ残存しており、口縁端部にはキザミがみられた。このキザミが 意図的に付けられたかは不明である。17c中葉から後葉に帰属するであろう。200は器高約8cmとやや大型の 碗である。内外ともに黄緑色の釉がかけられており、胎土はやや褐色である。一部に漆継ぎ痕がみられる。 産地は特定しがたいが恐らく唐津産であると思われる。274は唐津の碗である。錆釉の碗の外面には白泥が 刷毛塗りされていた。17cのものと思われる。276は京焼風肥前陶器の碗である。外面には鉄絵で山水流水 文が描かれ、鉄絵付け後に灰釉が施釉されている。底面中央には刻印がみられるが文字等の詳細は判別でき なかった。168・180は京・信楽系の碗である。168の碗には鉄釉・銅緑釉により草が描かれていた。施釉は 透明釉であり鉄絵付け後に施釉されている。18c中葉のものであろう。180は錆釉の湯呑碗である。錆釉施 釉後に赤・白の顔料で梅が上絵付けされていた。一部には焼き継ぎ痕がみられ、底面には何らかの墨書がみ られる。249は志野の皿である。器高は低く口縁部がやや外反する皿で、全面に長石釉がかけられていた。 底面には墨書がみられた。墨書は一部残存しているのみではあるが、恐らく「春」の字であろうと思われる。 248も志野の皿である。やや深めの皿であり全面被熱していた。口縁端部にはタールが付着していたため灯 明皿として使われていた可能性が考えられる。283・284は志野の菊皿である。双方とも破片での出土であ るが、型打ちによる成形後ヘラ状の工具により切れ込みが入れられている。313・314は美濃産の笠原鉢で あると思われる。双方ともに灰釉施釉後に銅緑釉を流し掛けしており、313の一部には漆継ぎ痕がみられた。 これらは特徴が酷似している為同一個体である可能性も考えられる。また、1点のみ特殊品として織部の陶 製キセルの雁首(327)が出土している。火皿のみの出土であるが、鉄釉により絵付けされた後透明釉がかけ られている。17 c 前葉のものであろうと思われる。

茶器

第Ⅲ検出面出土の陶器の中には茶器として使用されたものとして天目茶碗2点(190・191)、茶入2点(186・326)、向付3点(173・310・311)、沓茶碗1点(207)がみられた。天目茶碗はともに瀬戸美濃産の鉄釉天目茶碗である。口縁部やや下で屈曲し、ほぼ直に立ち上がる。口縁部はやや外反していた。 $16\,c\,$ 末~ $17\,c\,$ 初頭のものであろう。 $186\cdot326$ は茶入である。326は胴部しか残存していなかったが恐らく双方とも肩衝茶入であると思われる。ともに鉄釉の茶入であり、 $17\,c\,$ 中葉の瀬戸美濃産であると思われる。向付は $173\cdot310$ が唐津、311が織産であった。唐津向付はともに鉄絵付け後長石釉がかけられている。 $16\,c\,$ 後半から $17\,c\,$ のものであろう。311はロクロによる成形の後口縁部のみ押圧成形されていた。器面は灰釉施釉後銅緑釉が流し掛けされており、一部に鉄絵付けが施されている。207は唐津の沓茶碗である。小片のみの出土であるため詳細は定かではないが、ケズリの施された胴部に灰釉がかけられている。 $16\,c\,$ 末~ $17\,c\,$ 初頭に帰属するであろう。これらの茶器は出土量としては決して多くはないが、調査地が商人地であることを考慮すると一考すべき特徴であろうと思われる。

ウ)土器

土器は50点出土している。産地はほぼ在地産であると思われるが、不明とせざるを得ないものも多い。

器種は皿が38点、擂鉢1点、鍋1点、内耳鍋7点、焙烙鍋1点、蓋1点、不明品1点である。他の検出面同様皿が圧倒的多数を占めるが、内耳鍋などの鍋類が9点出土していることは特徴的であるといえる。皿は31点にススの付着が確認できるため、ほとんどが灯明皿として使用されていると思われるが、内3点には底面に墨書がみられるなど灯明皿以外の用途も想定されるところである。

171・251・256は墨書のある皿である。総じて底面に墨書がみられ、171・251は「○」の墨書が書かれていた。171には内外面ともにススの付着がみられるため灯明皿としての用途も想定できるであろう。256は底面にススが多量に付着しており文字は判別できなかった。皿は口径に対して器高がやや高く、他と違って精製された土で焼成されている。

工)土製品

3点出土している。2点は土鈴、1点は面摸であると考えられる。

土鈴は185・198である。185は径3cm程の球状を呈しており、下端には直線状の切れ込みが確認できる。 上面には少々長めのつまみが捻り出されており、切れ込みとは直交する方向で穿孔がなされている。帰属時期については不明である。

328は半分程度欠損していると考えられるため詳細は不明であるが、土製の小皿のような製品の見込み部分に人面乃至は鬼の顔のような模様が凸型に施されている。皿の口縁にあたる部分はある程度の角度を持って平坦に整えられている。このような形状から何らかの型であると推定し、泥面子を作る際に使用する面模であると判断した。このような面摸は東京都東大構内遺跡工学部14号館地点等でも出土している。

オ)瓦

合計2点の瓦が出土している。482は丸瓦、483は軒丸瓦である。483は被熱しており、多量のススが付着していた。瓦当面には五七桐紋がみられる。これは豊臣秀吉が特定の家臣に使用を許したもので、松本城においては石川氏が使用を許されている。そのため石川氏が在城していた天正18(1590)年~慶長18(1612)年のものであると考えられる。

第Ⅳ検出面

第 \mathbb{N} 検出面では36点図化することができた。種別ごとにみると磁器4点(11.1%)、陶器28点(77.8%)、土器4点(11.1%)とほぼ陶器で構成されていることが分かる。

器種構成は皿が全体の63.9%を占めており、突出して皿が多く出土している事がわかる。そのような中、 茶器として使用される天目茶碗と向付が合わせて4点(11.1%)出土している。遺構に伴わないものであるため詳細は不明であると言わざるを得ないが、注目すべきことである。

産地はほぼ瀬戸美濃産で占められており、瀬戸美濃産22点(61.1%)、肥前産9点(25%)である。これら以外のものは在地産か産地不明品である。

出土遺物の様相から17 c 前葉~中葉に帰属すると考えられる。

ア)磁器

磁器は4点図化した。3点が碗、残る1点が鉢であり、ほぼ碗で占められるといえる。これらの磁器は全て肥前産である。331は染付碗である。やや丸みを帯びており口縁付近で若干外反している。外面には染付で草花文が描かれている。

イ) 陶器

陶器は28点出土している。内1点は瓦質陶器である。産地はほぼ全てが瀬戸美濃産であり、5点のみ肥前産が見受けられる。特に皿は全てが瀬戸美濃産であり、中でも志野皿が多数を占めている。肥前産陶器は天目茶碗、向付、灯明皿に限られており、全て唐津であると思われる。

 $341 \cdot 344 \sim 349 \cdot 351$ は志野の皿である。全て長石釉がかけられており、法量もほぼ一定している。一部には被熱したものや内面にススが付着したものがみられるため、灯明皿に転用された可能性も考えられる。総じて16c末~17c中葉のものであろう。356は総織部の皿である。口縁部には同心円状の沈線が入れられ、口縁端部は切込みによって波状に成形されている。恐らく17c 初頭に帰属するであろう。 $354 \cdot 355$ は恐らく同一個体の灯明皿である。双方とも暗灰色の胎土にややくすんだ鉄釉がかけられている。355の内面には灯芯を固定するために中央に切れ込みを持つ突帯が付けられている。 $333 \cdot 334$ は共に天目茶碗である。特に334は歪みの大きい天目茶碗である。腰部で緩やかに折れ、口縁付近で屈曲しながら立ち上がる。施釉は鉄釉であり、胎土は暗灰色を呈している。恐らく唐津であろうが、初山産である可能性も考えられる。

ウ)土器

土器は4点のみ図化した。3点が皿、1点が器種不明品である。皿は総じて内外面にススが付着しており、 灯明皿としての用途が想定できる。364は器種不明品である。その形状から火鉢等の脚部である可能性が高いと思われるが、小破片のみの出土であり断定はできない。帰属時期等も不明である。

第V検出面

第V検出面では45点の土器を図化した。種別は磁器2点(4.4%)、陶器23点(51.1%)、土器18点(40%)、瓦1点(2.2%)、土製品1点(2.2%)である。Ⅲ・IV検と同様にして陶器が多く出土しているが、並んで土器が多く出土しているのは特徴的である。土器の多くは皿であるが、内耳鍋も多数出土しており、皿11点(61.1%)、内耳鍋7点(38.9%)であった。特に内耳鍋は一部集中して出土した箇所も存在するため注目すべきであろう。産地は瀬戸美濃産17点(37.8%)、肥前産7点(15.6%)、中国産1点(2.2%)と瀬戸美濃産が若干多く出土している。特に皿・碗などの食膳具は瀬戸美濃産が多く、向付などの茶器は肥前産が多いという傾向がみられ、生活雑器は瀬戸美濃産が多く流通しているという様相が窺える。

出土遺物から16c末~17c前葉であると思われる。

ア)磁器

磁器は2点のみの出土である。破片のみの出土であるため時期産地ともに特定しがたいが、恐らく1点は 肥前産、1点は中国産(405)であると思われる。405は壷類の底部である。白色の胎土で成形されており、外 面にはやや長石釉の混じった透明釉がかけられている。胴部及び高台の付け根には青色の横線がみられるが、 非常に不明瞭であり、染付ではなく釉が厚くたまったものである可能性も考えられる。

イ) 陶器

陶器は23点図化した。産地はやはり瀬戸美濃産が多く、17点(73.9%)が瀬戸美濃産、6点(26.1%)が肥前産である。器種は皿が多く9点が皿、5点が碗である。他には鉢1点、壷類2点、天目茶碗2点、向付3点が出土している。

373は唐津の碗である。全体的に被熱しており、外面にはススが付着している。暗灰褐色の胎土で成形され、施釉は錆釉である。16 c 後半のものであろうと思われる。372はいわゆる瀬戸黒である。胴部からあまり外反せず立ち上がる碗であり、漆黒に近い黒色を呈している。16 c 中葉から後葉に比定されるであろう。384は灰釉折縁菊皿である。口径約12cm、器高約2cmを計る皿であり、内面は丸ノミ鎬がみられる。胴部付近で屈折し、口縁部がわずかに立ち上がる。施釉はやや白濁した灰釉で、内面にはススが付着していた。16 c 後半から17 c 初頭の瀬戸美濃産であると思われる。368は錆釉・灰釉二度掛けの皿である。高台が低く器高も低めの皿であり、全面錆釉を施釉したのち中心から放射状に灰釉を塗り掛けしている。内外面共に口縁部付近にタール状のススが付着しているため灯明皿としての用途が想定できる。370は耳付の壷である。やや丸みを帯びて立ち上がり口縁部付近で屈曲する壷で、胴部には貼り付けで把手が付けられている。内外面

共に灰釉を施釉したのち鉄釉が掛けられており、内面のくびれ部は釉が拭き取られている。また、把手部先端には砂粒が釉着していた。

ウ)土器

土器は18点出土している。皿が11点、内耳鍋が7点であり皿が多数を占めている。皿はほぼ全てにススが付着しており、灯明皿としての用途が想定される。内耳鍋は総じて器高が高く内面に工具ナデ、外面に縦方向の工具ナデにより成形している。

調査区外・廃土

調査の中で調査区外の壁面や重機掘削中の廃土などからも多数の遺物が出土した。いずれも出土位置が特定できないが、調査地内からの出土品であることは明確であるため参考資料として67点の遺物を掲載した。

417は志野の碗であると思われる。底部は残されていなかったが、丸みを帯びた碗であることが分かる。 内外面ともに長石釉が施釉されており、全面に被熱痕が認められる。口縁部と思われる部分は水平に削られ たように破損しており、摩滅も認められる。この破損が意図的に行われたものであるかは不明であるが、口 縁部破損の後に二次利用されている事は明白である。時期は18c中葉であると思われる。420は鉄釉の天目 茶碗である。高台のほとんどが欠損してしまっているが、割と緩やかに立ち上がり口縁部付近でなだらかに 折れる形状である。胴の一部には漆継ぎ痕がみられる。その形状から17c前葉~中葉であると考えられる。 415は碗の底部であると思われる。高台は高く、外面にヘラケズリ痕がみられる。内面見込みには呉須で十 字の花文が描かれている。肥前産18 c 代の碗であろうと思われる。419は陶器焼締めの筒型碗であると思わ れる。胎土は暗灰色で非常に硬く締まっており、内面は茶色に変色している。外面には染付で風景文と思わ れる模様が描かれている。恐らく肥前産で18c代のものであろう。459は唐津の茶入である。灰褐色の胎土 にやや緑がかった灰釉がかけられている。恐らく17 c 代のものであろう。467は志野菊皿である。ロクロ成 形の後内面を型打ち成形し、口縁部を菊弁状に削っている。全体長石釉が施釉されているが、若干被熱して おり多少黒ずんでいる。479は脚付きの香炉である。胴部中央で折れる形状の香炉であり、脚は3単位付け られていたと考えられる。器面は鉄釉施釉の後うのふ釉がかけられている。18c末~19cに瀬戸美濃地方 で焼かれたものであろう。480は内耳鍋の胴部である。やや外反しながら立ち上がり口縁付近で真っ直ぐ立 ち上がる。内外面共にススが付着している。胴部口縁下には穿孔がみられるが、鍋という性質上使用中に穿 孔されたとは考え難いので恐らく使用後に空けられたものであろうと思われる。472は土器皿である。器高 2.8cm、口径10.5cmを測る皿で、内面に若干のスス付着がみられる。底面には墨書があり、「三」の字が 書かれているようにみえる。460は灰釉天目茶碗である。底部は欠損してしまっているが深めの天目で、口 縁部下から急に立ち上がる。瀬戸美濃産17 c 前葉のものであろう。

東部トレンチ

調査区東部に設定した東部トレンチ内からも少数ではあるが遺物が出土している。その中で図化できるものを6点掲載した。414は紅猪口であると思われる。内面は透明釉が施釉されており、外面は無釉で蛸唐草文が彫られている。

第2表 出土土器·陶磁器一覧表

第2表 片	器土土出	・陶磁器-	-覧表										
番号 検出	出土地点	注記	種別	器形	SCHOOL STATE OF STATE OF	法量(cm)	1790-000-90039-001-00155	残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	産地
Series H	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0		E2055755	6.50989955	口径	底径	器高	AND THE RESERVE OF THE PARTY.			84.71		肥前
1 I 検	検出面	I 検-001	磁器	碗	(9.8)			□:1/6	白	外面唐草文か?	染付 染付	18 c 中	肥前
2 I 検	検出面	I 検-001	磁器	碗	7.5	ļ		□ : 1/4	白	外面青海波に植物 内面口縁四方襷	染付	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
3 I 検	検出面	I 検-001	磁器	碗	(9.4)			口:一部残	白	口綠端部染付全面被熱	染付	18 c 後~19 c 初	瀬戸美濃
4 I 検	検出面	I 検-001	陶器	碗	(9. 2)			□ : 1/8	黄灰白	胸胎染付 外面宝文か?	鉄釉・灰		1
5 Ⅰ検	検出面	Ⅰ検-001	陶器	砂		(3.9)		底:1/4	灰	鎧手碗 外面回転式施文具による連続沈線 内面、外面口縁部に鉄釉	釉	18 c 中	瀬戸美濃
6 I 検	検出面	I 検-001	陶器	碗	(9.8)			□:1/4	乳白			18c中	瀬戸美濃
7 I検	検出面	I 検−001	陶器	.III.	(11.4)			□ : 1/12	黄灰	志野織部	長石釉	16 c 後〜17 c 初	瀬戸美濃
8 I 検	検出面	Ⅰ検-001	陶器	Ш		4.8		底:2/3	黄灰	陶胎染付 内面見込み草花文 全面被熱	染付	19c前	瀬戸美濃
9 I 検	検出面	I 検−001	陶器	Ш		(9.4)		底:1/6	黄白	高台端部回転糸切り痕あり	鉄釉	17c中	瀬戸美濃
10 I 検	検出面	I 検−001	陶器	灯明受皿	(9.5)	(4.0)	(1.4)	口:1/8 底:1/4	淡黄灰		灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
11 Ⅰ検	検出面	I 検-001	陶器	灯明受皿	(8.8)			□:1/4	灰	the state of the s	長石釉	18 c 後 19 c 中〜	瀬戸美濃か? 瀬戸美濃
12 I 検	検出面	I 検-001	磁器	蓋	6, 5	7		口:一部欠	自	青磁上絵付け 天井部樹木 内面口縁部無釉 天井部一部に釉溜りあり	青磁	<u>`</u>	瀬戸美濃
13 I 検	検出面	I 検-001	陶器	鉢		(6.0)		底:1/8	乳白		灰釉 灰釉・長	18 c 後	
14 I 検	検出面	I 検-001	陶器	鉢	(19.7)			□:1/6	赤褐	内面被熱	石釉	18 c 後	瀬戸美濃
15 I 検	検出面	I 検−001	陶器	擂鉢	(28. 2)			□:1/8	暗灰		鉄釉	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
16 I 検	検出面	I 検-001	陶器	植木鉢	(8.5)		·	□:1/6	黄白	総織部 内面口縁部、外面銅緑釉	銅緑釉	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
17 Ⅰ検	検出面	I 検-001	土器	植木鉢		(8.5)		底:1/6	褐				
18 I 検	検出面	I 検-001	陶器	瓶類		(8.6)		底:1/4	淡黄灰		鉄釉	不明	瀬戸美濃
19 I 検	検出面	I 検-001	陶器	瓶類		(7.5)		底:1/4	淡黄白		長石釉	不明	瀬戸美濃
20 I 検	検出面	I 検-001	陶器	徳利		(11.6)		底:1/6	灰	底部トチン痕あり	灰釉・透 明釉	18 c 後一19 c 初	瀬戸美濃
21 I検	検出面	I 検-001	陶器	徳利		(11.7)		底:1/8	淡黄灰	底面トチン痕あり	灰釉·透 明釉	18c後一19c初	瀬戸美濃
22 I 検	検出面	Ⅰ検-001	陶器	徳利		(14, 6)		底:一部残	灰白	鉄絵付け	透明釉	18 c 後一19 c 初	瀬戸美濃
23 I 検	検出面	I 検-001	陶器	徳利	2.8			□:1/2	灰白	鉄絵付け 内面頸部ねじり整形	透明釉	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
24 I 検	検出面	I 検-001	陶器	徳利		(15. 2)		底:一部残	灰	鉄絵付け	透明釉	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
25 I 検	検出面	I 検-001	陶器	甕	(9.2)			□:1/6	淡黄灰		鉄釉	17 c 中一後	瀬戸美濃
26 I 検	検出面	I 検-001	陶器	鍋	(19. 2)			□:1/8	淡黄白		鉄釉	18 c 前一中	瀬戸美濃
27 I 検	検出面	I 検-001	陶器	餐油壺	2.6	4.5	5. 5	口:3/4 底:完	乳白		灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
	検出面	I 検-001 Ⅱ 検-012	陶器	仏飯具	6. 1	3.8	5. 9	口:1/3 底:ほぼ完	乳白	陶胎染付 斜格子地に菊花文	灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
29 I 検	検出面	I 検-001	陶器	水滴か?				胴:一部残	淡黄白		御深井釉	17 c 中	瀬戸美濃
30 Ⅱ検	土1	土1-003	陶器	碗	(8.6)			□:1/4	灰白	陶胎染付 外面宝か?一部被熱	染付	18 c 後	瀬戸美濃
31 Ⅱ検	土1	土1-002	陶器	仏花瓶				胴部:完	暗灰	胴部にうのふ釉 内部ねじれの痕跡あり	漆黒釉	18 c 後	瀬戸美濃
32 Ⅱ検	±1	土1-001	土製品	鞴の羽口	6.6	()	6.6		暗褐一黒褐	mant Ne Cl. 1. Discovered a select Other second at the Comment of	20h / 1	10 ///	44 A/- Mh
33 Ⅱ検	±4	±4-006	陶器	碗	(9.0)	(3.4)	5. 1	口:1/5 底:1/3	黄灰	陶胎染付 内外面雨垂れ 高台端部スス付着	染付	18 c 後	瀬戸美濃
34 Ⅱ検 35 Ⅱ検	土4	±4-006 ±4-008	陶器	乗燭	11.8 4.6	4. 7 3. 6		口:5/6 底:ほぼ完 口:完 底:完	灰 淡灰〜暗灰	鉄絵皿 内面見込みトチン痕あり 全面被熱している	透明釉	18 c 初一中 19 c 初	瀬戸美濃
36 Ⅱ検	土5	土4-008 土5-011	磁器	碗類	9.1	3.0	4.5	口:元 底:元	校庆 ^一 唱庆 白	蓋付碗 斜格子地に菊花文 内面口縁部釉削り取り	染付	18c中	肥前
37 Ⅱ検	±5	土5-011	磁器	瓶類	3.1	(4. 1)		底:1/4	灰白	底部一部に釉飛び散り	染付	18 c 後	肥前
38 Ⅱ検	±5	土5-011	陶器	瓶類		5. 2		高台:2/3 底:完	淡灰	外面施釉 外面被熱している	灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
39 Ⅱ検	土5	土5-011	磁器	III.	(21. 1)	(13. 2)	3.0	口:一部残 底:1/6	白	外面唐草文 内面見込み花唐草文・笹文 口錆 II 検-84と同一か?	染付	18 c 前〜中	肥前
40 Ⅱ検	土5	土5-011	磁器	皿類		(19.9)		底:1/12	白	折縁皿 内面見込み山水文	染付	18 c 後一19 c 初	肥前
41 Ⅱ検	土5	土5-011	磁器	段重	(14.4)	(9.7)		口:1/6 底:1/3	白	内面口縁釉削り取り 外面蛸唐草文・宝文	染付	18 c 中一後	肥前
42 Ⅱ検	土5・Ⅲ検 土62	±5-011	磁器	神酒徳利				頸:一部	白	外面蛸唐草文下に連弁文 仏花瓶の可能性も	染付	18c後~19c初	肥前
43 Ⅱ検	土7	土7-013	磁器	段重	(15.8)			□:1/12	白	内面口縁部釉削り取り 外面雲文	染付	18 c 後	肥前
44 Ⅱ検	土12	土12-015	陶器	向付		<u> </u>		口:一部残	暗灰	絵唐津 草花文	長石釉	16c末〜17c初	肥前
45 Ⅱ検	±14	土14-016	磁器	蕎麦猪口	ļ	(5, 0)		底:1/6	白	氷裂地に菊花文	染付	18 c 後〜19 c 初	肥前
46 Ⅱ検	土18	土18-026	陶器	碗	ļ	(6.8)		底:1/6	暗灰褐	唐津産 内面一部に被熱痕あり	灰釉		肥前
47 日検	±18	±18-023	陶器	<u> </u>	(0.0)	(12.3)		底:1/8	暗灰	内面見込み草花文、トチン痕あり	染付	17 c 後〜18 c 初	肥前
48 Ⅱ検	土18	土18-021	陶器	盖	(6.0)		(0, 0)	□ : 1/6	暗黄灰	内面全面にベンガラ付着の方面印刻あり	1		不明
49 Ⅱ検	土18	±18-022	土製品	鞴の羽口	(8.0)	<u> </u>	(6.9)	·	暗褐〜灰褐	外面一部被熱している	76 / L	10 - 66 - 10 - 40	不明
50 Ⅱ検	土22	土22-032	陶器	碗	(8.6)	 	 	口:一部残	黄灰白	陶胎染付 外面草花文	染付 灰釉・鉄	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
51 Ⅱ検	土23	±23-033	陶器	仏花瓶	(9.4)	L	14.6	口:一部残	黄白	鉄釉・灰釉重ね掛け 底部回転糸切り	八相 、	18c中	瀬戸美濃

新き 新田 出土地域 田田 新規 新規 新規 日本 新規 日本 新規 日本 新生 新生 新生 新生 新生 新生 新生 新	肥前 肥前 瀬戸美濃 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
18	京・儒楽 肥前 漢 照前 漢 漢 瀬戸美濃 瀬戸美濃 瀬戸美濃 平明 不明 肥前
18	肥前 瀬戸美濃 瀬戸美濃 瀬戸美明 不明 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
18	瀬戸美濃 瀬戸美濃 瀬戸美濃 不明 ・ 肥前 ・ 肥前 ・ 肥前 ・ 肥前 ・ 肥前 ・ 肥前 ・ 肥前 ・ 肥前
55 12章 集石1-01 議議	瀬戸美濃 瀬戸美濃 不明 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
56 日検 集石1 集石1-001	 瀬戸美濃 不明 不明 肥前 肥前 應前 肥前
5 日後 集石 集石 (9.4) (4.9)	不明 不明 肥前 肥前 肥前 瀬戸美濃 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
58 日検 名印 第4-01 第4-04 上拠品 棚の羽口 7.2 (7.2) 自常 円板 円板 円板 円板 円板 円板 円板 円	不明 肥前 肥前 肥前 瀬戸美濃 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
17 c 後 - 18 18 19 19 19 19 19 19	
1 日 1 日	肥前 肥前 瀬戸美濃 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	肥前 瀬戸美濃 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
18c 11kg	瀬戸美濃 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 肥前
10 10 10 10 10 10 10 10	肥前 肥前 肥前 肥前 肥前 : 肥前 前 肥前
64 11枚 検出面 11枚 11枚 11枚 11枚 110 11 110 11 11	肥前 肥前 肥前 : 肥前 前 肥前
66 日検 検出面 日検-014 磁器	肥前 肥前 : 肥前 前 肥前
66 日検 検出面 日検-014 磁器 碗 (10.6)	肥前 2 肥前 前 肥前 肥前
67 II検 検出面 II検-009 磁器 碗 (10.5) 口:1/10 白 外面松文 祭付 18c 後 (88 II検 検出面 II検-008 磁器 碗 (10.4) 口:1/12 灰白 外面化产文か? 祭付 17c 後 -18c (10.5) 日検 検出面 II検-009 磁器 碗 (9.8) 口:1/6 欠白 外面地产文か? 祭付 18c 前 18c	肥前前肥前肥前
18 1後 快出面 1後-008 磁器 碗 (10.4) 日 : 1/12 灰白 外面電持竹文 全面被熱 染付 17 c 後~18 c 前 17 c 後~18 c 前 18 c 前	前 肥前 肥前
18 c 前 横 横山面 11 横 400 磁器 一碗 10	肥前
70 1 使 使出間 1 検 -009 極器	
71 1 検 検出面 1検-009 磁器	DITT A.C.
72 1 棟 検出面 1 検 や出面 1 検 の	肥前 肥前
73 1 使 検出面 1 使 -012 磁器	,,,,,,,,
74 1 1 1 1 1 1 1 1 1	前肥前肥前
18 c	肥前
77 日検 検出面 日検-002 磁器 碗屋	肥前
78 1棟 検出面 11検-008 総器 機類 (7.6) 日 18 c 中 18 c P 18 c	肥前
R T R T R T T T T T	肥前
79 1棟 検出面 11検-012 内部 柳 (4.2) 成:1/4 11 11 12 13 12 13 14 14 15 15 15 15 15 15	京・信楽
80 1 使 使出間 1 使 -009 00	
8 1 1 使 使由出 1 1 使 1 0 9 停	
	京・信楽
R2 II 検 検出面 II 検 -008 陶器 碗 (9.0) 口:一部 淡黄灰 京焼 絵付け部分銅練和 灰和 18 c 削	京・信楽
Ref Ref	京・信楽
65 II 検 校出面 II 検-017 陶器 碗 (10.6) 口:1/12 灰白 京焼 衛型碗 鉄絵、松文 一部被熱 若干被熱 透明釉 18c中	京・信楽
Bal If	瀬戸美濃
OS If William If If OO Piggar Was OS S If S If If OS If If OS If If OS If If OS If	瀬戸美濃
また 601 MP で	瀬戸美濃
88 工作 保田田 工作 10年	京・信楽
69 If (模 模田田 If (模 014 PN 66 We (1.0) I	瀬戸美濃
90 1 1 使 使出出 1 1 使 1 0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	100 2404
9 1 1 使 使由 1 1 使 700	瀬戸美濃
92 II 検 検出面 II 検 -009 陶器 碗か? (6.0) 底: 1/4 複一次灰褐 底面に墨書あり 外面一部粗刺落 内面も剥落している可能性あり 灰細 18 c 93 II 検 検出面 II 検 -012 磁器 皿 (13.4) 口: 1/8 白 外面唐草文 内面花唐草文	
93 11棟 検口面 11棟 検口面 11枚 検口面 94 11棟 検出面 11枚 (6.2) 底: 1/4 灰白 内面見込み雲	
94 II 使 使口間 II 使 使口間 II 使 使口間 II 使 95 II 検 検出面 II 検 内面見込み草花文 染付 18 c	肥前
96 II 検 検出面 II 検-009 磁器 皿 (5.7) 底:1/2 白 内面見込み草花文 一部鉄絵 全面被熱 II 検ー71と同一固体か? 染付 17 c 中	肥前
90 1模 検出面 1模 1模 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 検 1 k	肥前
98 IT 検 検出面 IT 検 -009 破器 皿 (14.2) (8.6) 3.6 口:一部残 底:1/16 灰白 内面扇文か? 染付 17c中	
99 11検 検出面 11検-009 磁器 皿 (9.1) 底:1/10 灰白 液佐見産 ハリ支え 内面見込み五弁花 底面 寿」か? 染付 18c前一	肥前
100 II 検 検出面 II 検-009 破器 皿 (5.7) 底:1/4 白 外面源氏香文 内面見込み草花文か?全面被熱 II 検-75と同一固体か? 染付 17 c 中	
Total Tike Maria Tike Tike	
TO Trigo Rectal Trigo Trigo	1 肥前
	型 肥前 肥前
	吧前 肥前 肥前 肥前 肥前
103 II 検 検出面 II 検 -009 磁器 皿 (6.6) 底:1/5 白 内面見込み草花文 築付 18 c	. 肥前 肥前 肥前 肥前
103 耳検 検出面 耳検-009 磁器 皿 (6.6) 底:1/5 白 内面見込み草花文 染付 18 c 104 耳検 検出面 耳検-014 磁器 皿 胴:一部残 白 外面唐草文 内面松文か? 染付 18 c 105 耳検 検出面 耳検-018 磁器 皿 (7.9) 底:1/4 白 蛇の目凹形高台 内面見込み山水文 染付 18 c	9
103 II検 検出面 II検 -009 磁器 皿 (6.6) 底:1/5 白 内面見込み草花文 染付 18 c 104 II検 検出面 II検 -014 磁器 皿	9

		V 4.3994 1:03	143,442,573,57	1.000350	10. H	i taki xa	Pottor 2008 9 9 9 9 9 8 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	1		i e e e e e e e e e e e e	MAKEN MENTERS IN THE STATE OF T	
番号 検出 出土地点	注記	種別	器形	口径	法量(cm)	器高	残存度	胎士	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	産地
108 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-009	磁器	III.	1411	(13, 2)	40 [7]	底:1/16	É	ハリ支え 外面高台部施釉後掻き取り 外面唐草文 内面見込み草花文	染什	17 +	9 m 24
109 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	磁器			(10. 2)		口:一部	白色	型打成形	染付	17c中 17c後〜18c前	肥前
110 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-009	磁器					口:一部残	自	生11以内 外面唐草文 内面見込み梅花文か?口錯	染付	17 c 後~18 c 削 17 c	肥前
to to	Ⅱ検-012	陶器		(11. 2)			日:1/6			灰釉・鉄		
								淡黄灰	全面被熱	釉	18 c 中一後	瀬戸美濃
112 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	陶器		12.0			□ : 1/6	淡灰	全面被熱	灰釉	18 c 中〜後	瀬戸美濃
113 II 検 検出面 114 II 検 検出面	Ⅱ 検-009	陶器		(12.0)		-	□ : 1/5	淡黄灰	京焼 絵付け部分釉調不明	灰釉	18c初	京・信楽
	II 検-023	陶器		(13. 2)			□ : 1/12	黄白	陶胎染付 内面草花文か?	染付	18 c 後	瀬戸美濃
115 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-008	陶器		(13.1)		 -	□ : 1/8	黄白	陶胎染付 内外面草花文か?	染付	19 c	瀬戸美濃
116 II 検 検出面 117 II 検 検出面	Ⅱ 検-017	陶器 陶器	III.	(10.7)			□ : 1/12	灰	内面草花文か?全面被熱	染付	18 c 後	瀬戸美濃
118 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-012	陶器		(9.0)		<u> </u>	□ : 1/5	淡灰		長石釉	18 c 初	瀬戸美濃
119 日検 検出面				9. 2	3.8	1.9	口:ほぼ完 底:完	淡灰褐	内面被熱している	灰釉	19 c 中	瀬戸美濃
120 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-009	陶器	Azc El 202 mm	(13.5)	(6, 2)		口:1/6 底:1/2	黄白	陶胎染付 内面見込み樹木・鶴 外面唐草文	染付	19 c 初	瀬戸美濃
121 日検 検出面	Ⅱ検-001	陶器 陶器	灯明受皿 灯明受皿	10.4	5. 3		口:完 底:完	淡灰	底面炭化物付着 外面被熱	灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
122 Ⅱ検 検出面				(10.4)	(5.0)	(1.6)	口:2/5 底:3/4	淡黄灰		錆釉	18 c 中	瀬戸美濃
123 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-005	陶器	灯明受皿	(10.0)	0.0	1.0	□ : 1/3	淡黄灰	A TENNAN IN VENNA IN TO LANGE AND A STATE OF THE STATE OF	灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
124 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-006	陶器 上器	灯明受皿	9.2	3.6		口:7/8 底:完	暗灰	全面に鉄分混じりの土が付着している 内面被熱	灰釉	18 c	瀬戸美濃
125 日検 検出面	Ⅱ検-014	土器		(16.8)	(13. 0)	(1.9)	口:一部 底:一部	淡褐一暗褐	47 a w (1.45 1cm)			在地か?
126 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-002	上器		(9.6)	5. 6		口:1/8 底:1/4	暗褐	内面スス付着 灯明皿か		16c末	在地
127 11 検 検出面	Ⅱ 検-002	磁器	蓋	(9.6)	(8.3)	(2.1)	口:2/5 底:4/5	暗褐	内面スス付着 灯明皿か		17 c 前半	在地
128 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検=012	磁器	蓋	(10. 6)	(8. 3)		□:1/4 □:1/6	黄灰	天井部円形区画 外に草文 口縁部無釉	染付	17 c 後〜18 c 初	肥前
129 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-017	陶器	蓋	(14. 6)	(12.7)		H:1/0 H:1/16	白	外面菊弁に菊花 内面菊弁	染付	18 c 初一中	肥前
					(12.1)			灰白	外面花店草文 砥部産の可能性あり	染付	17 c 中	肥前
130 II 検 検出面 131 II 検 検出面	Ⅱ検-008	胸器	蓋	(16. 1)	(1.0)		口:1/10	黄白	織部 内面口縁釉剥ぎ取り 灰釉刷毛掛け	灰釉・銅 緑釉	17c中	瀬戸美濃
131 Ⅱ検 検出面 132 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-014	陶器	蓋	(6, 0)	(4.8)		□ : 5/8	黄灰	天井部鉄釉・銅緑釉で模様 穿孔あり 摘み部欠損	灰釉	18 c 後〜19 c 初	瀬戸美濃
133 Ⅱ検 検出面	II 検-017	陶器	蓋				つまみのみ残存	淡黄灰	織部	銅緑釉	17 c 中	瀬戸美濃
134 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-017	陶器 陶器	蓋				つまみのみ残存	暗灰		漆黒釉		不明
135 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-017	陶器	蓋	(8.4)			つまみのみ残存	暗灰		灰釉		不明
136 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-012	陶器	蓋	9.3	C 1	1.0	日:1/5	淡黄灰	And the Little	灰釉	18 c	瀬戸美濃
137 Ⅱ検 検出面	II 検-008	磁器	鉢	9. 3	(7. 9)	1.9	口:1/3 底:5/6 底:1/4	暗灰	つまみ部欠損	灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
138 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	磁器	鉢	<u> </u>	(7. 8)		底:1/4	白	蛇の目凹形高台 内面見込み風景画か?外面くぼみあり	染付	17 c 後	肥前
139 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	磁器	段重	-	(8, 8)		底:1/4	<u>白</u> 灰白	蛇の目凹形高台 内面見込み雲文か?	染付	18 c 中一後	肥前
140 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-014	陶器	鉢		(6, 2)		底:1/4		漆継ぎ痕あり	染付	17 c 中	肥前
141 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-013	胸器	香炉		(0. 2)	-	区: 1/3 日: 1/3		京焼 ロクロナデ後型打ち成形 内面重ね焼痕あり 外面花弁文	灰釉	18 c 末	京・信楽
142 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-009	陶器	擂鉢	(33. 2)	(11.0)	13. 3	口:1/5 底:1/2	※ 黄灰	口縁端部釉が剥離している 全面被熱	漆黒釉	18 c 以降	京・信楽
143 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-011	土器	火鉢	(32. 2)	(11.0)	13.3	口:一部	, ., .	内面「田」の刻書か?	鲭釉	18 c 中	瀬戸美濃
144 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	陶器	鉢	(20, 8)	-		П: 1/12	黄灰				
145 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-012	陶器	鍋	(20.0)	(6.6)		底:1/12	暗灰	行平鍋 内面鉄釉付着 内面トチン痕あり 外面スス付着 唐津産か?	灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
146 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	土器	焙烙鍋	(23. 8)	(0.0)	_	□ : 1/9	暗褐	11十両 四回欽相刊者 四回トナン很めり 外面人人刊者 潜揮度かり			肥前
147 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-012	土器	焙烙鍋	(13. 8)			□ : 1/14	暗褶	口縁部の歪みひどく角度不明瞭		18 c 後半	
148 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-012	陶器	瓶類	(20.0)	(3.4)	<u> </u>	高台:一部欠 底:完	※灰	日が印がユニット・ウ・こ 、	Atta ris.L	19c初	100 - 34 100
149 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-017	磁器	瓶類		(4, 4)	-	高台:1/2 底:完	淡灰	内面見込み一部に釉飛び散り 外面被熱	鉄釉	18 c 中	瀬戸美濃
150 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-017	磁器	神酒徳利		\		胴:一部残	灰白	外面蛸唐草文 全面被熱	染付	10 - rh 40	肥前
151 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-013	磁器	徳利				胴:一部残	白	型紙摺り コバルト呉須 外面山水画、雷文	染付 染付	18c中〜後	肥前
152 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-010	陶器	神酒徳利		2. 2		底:完	淡黄灰	一部被熱している	柴竹 灰釉	明治以降	瀬戸美濃
153 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	陶器	神酒徳利		2. 4		底:完	淡黄灰	FE MAIN C C . W	灰釉	18c中〜19c初 18c中〜19c初	瀬戸美濃
154 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-009	陶器	仏飯具	(6.6)	(5. 2)	5. 4	口:1/3 底:一部残	黄白	陶胎染付 外面斜格子地に菊花文	<u> </u>	18 c 中~19 c 初	瀬戸美濃
155 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-023	陶器	仏飯具	(5. 5)			□ : 1/2	黄灰	胸胎染付 外面斜格子地に菊花文	染付	18 c 後	瀬戸美濃
156 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-014	陶器	仏飯具		4. 4		底:2/3	淡黄灰	Property Commercial Control	灰釉		5 -1114
157 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	陶器	仏飯具		4. 4		底:一部欠	淡黄灰		灰釉	18 6 中	瀬戸美濃
158 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-012	陶器	乘燭	5. 7	3. 2		口:1/2 底:完	暗灰	全面被熱している	鉄釉		瀬戸美濃
159 Ⅱ検 検出面	Ⅱ 検-017	磁器	人形水滴				胴:一部残	白	透明釉後上絵付け 手づくね成形 若干被熱か?	透明釉	19 c 初 不明	瀬戸美濃
160 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-014	陶器	水滴				胴:一部残	灰白	総織部上面中心部に穿孔か?	銅緑釉		瀬戸美濃
161 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-008	陶器	水滴					暗灰	Manager and Complete No. 100 Co.	灰釉	17 c 中一後	瀬戸美濃
162 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-013	陶器	餌猪口	(6.1)	(6.0)	(2.4)	口:1/3 底:1/4	暗灰	全面被熱している		18 c 後~19 c 初	瀬戸美濃
163 Ⅱ検 検出面	Ⅱ検-013	土製品	鞴の羽口	7.9		(8. 1)		暗灰	The Beautiful Activity of the St.	灰釉	18 c 後一19 c 初	瀬戸美濃
164 Ⅲ検 ±2	土2-009	陶器	碗	(12.0)			□:1/6	灰白	全面被熱	灰釉	17 a th - 40:	348" == 34-38h
								<i>,</i> ,,⊢	most tick 1/1/	火柑	17 c 中〜後	瀬戸美濃

C. C.	Fr. 7 (27) 371	er ab orman also etal	Jahren Arreiter Wiele	process and the case	Letter Green and The	and the second	PROTON A	11.71.77 av. 10.47 deletion 11.50 avenuaria	ALEXANDER SANCTON		a see le	end Section to Control of the	
番号 検出	出土地点	注記	種別	器形		法量(cm)		残存度	胎士	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	産地
面	S. 10 (40.5)		Mar DD		口径	底径 3.0	器高	口:1/8 底:3/4	灰白	を持ち、あたられたのは、おはいはおけるようなない。 ・ 「一般ないないないないないないないないないないないないないないないないないないない	錆釉・鉄	18 c 中	瀬戸美濃
165 Ⅲ検	土2	±2-011	陶器	碗	(9.0)	3.0	0. 4			別作(次数/位/ルン切り)	鉄釉	17 c 後一18 c 前	瀬戸美濃
166 Ⅲ検	±2	土2-013	陶器	碗	(9.2)	5.1		口:1/4	灰 灰白	全面被熱	灰釉	18 c か?	瀬戸美濃
167 皿検	±2	±2-010	陶器	碗	(11.0)	5.1		底:完 口:1/6	灰白	京焼 鉄釉、銅緑釉による絵付け	透明釉	18c中	京・信楽
168 皿検	±2	±2-017	陶器	碗	(11.0)			底:1/2 高台:欠	白	漳州窯産 内面見込み龍文 外面雲文	染付	16 c~17 c 前	中国
169 皿検	±2	土2-003	磁器	Jer DE av. m	(10. 2)	(4.7)	2. 0	区:1/2 商日:人 口:1/6 底:1/8	灰	初山か?胎士に気泡あり	錆釉		不明
170 皿検	±2	±2-012	陶器 土器	灯明受皿_	10. 5	5. 9	3. 3	口:1/6 底:1/6	暗褐	底部「○」の墨書あり 内外面スス付着		16c末~17c前か?	
171 Ⅲ検 172 Ⅲ検	±2 ±2	±2-015 ±2-017	土器	701.	(9.0)	5. 9	3. 3	口:1/4 成.元	暗褐	松田 〇] ○聖旨の / 「八田 / ・・ 八日		17c前か?	
100	<u> 12</u>				(5.0)				灰〜黄白	絵唐津 内面花唐草か?一部被熱	長石釉	16c後	肥前
173 Ⅲ検	検出面	土2-012	陶器	向付				口:一部残			錆釉	18 c 前〜中	瀬戸美濃
174 Ⅲ検	±2	土2-001	陶器	擂鉢	(33. 4)	(12.4)	13. 1	口:1/3 底:一部	灰白	G 日本	靖釉	18 c 前~中	瀬戸美濃
175 Ⅲ検	土2	±2-008	陶器	擂鉢	ļ <u>. </u>	(9.6)		底:1/3	灰白	物のませず、中角子は羊輪すり	灰釉	18 c 前〜中	瀬戸美濃
176 Ⅲ検	土2	土2-006	陶器	鬢盥	11.7	3.7	3.5	口:一部欠 底:完	黄灰 白	摺絵草花文 内外面付着物あり 内面見込み雲に菊花文	染付	18 c	肥前
177 Ⅲ検	土5	土5-020	磁器	段皿	(20.0)		(O. F)	口:1/10 一部残	灰白	型打ち成形か?底部無釉 全面被熱	灰釉	不明	瀬戸美濃か?
178 Ⅲ検	土5	土5-020	陶器	不明	(10.0)	(0,0)	(2.5)	7.1.00	時褐	四外面スス付着	DUTH	18 c	100 3000
179 Ⅲ検	土9	土9-023	土器	111	(10.2)	(6.0)	(2. 2)	口:1/12 底:1/6	灰	 	錆釉	18 c 中	京・信楽
180 Ⅲ検	±10	±10-024	陶器	碗	(9.1)	(4.1)	(5.9)	口:1/3 底:1/2	灰白	外面的文か?底面砂付着	染付	17 c 前	肥前
181 Ⅲ検	土17	±17-032	磁器	碗	11.0	(6.8)		底:1/4 口:1/2	灰白	鉄絵付け	灰釉	18 c 前〜中	瀬戸美濃
182 Ⅲ検	土17	土17-031	陶器	碗	11.0	(0, 0)	2, 8	口:1/2	黒褐一黒変	内外面スス付着被熱による黒変	DOTA	18 c	100 2 314 7
183 Ⅲ検	土17	±17-031	土器	<u>m</u>	(13. 9) 9. 2	(9. 3) 5. 6	2. 8	口: 完 底: 完	- 無何 - 無後 暗褐	内外面スス付着	1	18 c	
184 Ⅲ検	土17	±17-029 ±17-028	土製品	土鈴	3.0	3. 1	3. 5	一部欠	淡褐	つまみ部ひねり出し成形			
185 皿検	土17		工製品 陶器	茶入	3.0	4.0	3. 0	底:2/3	機褐	肩衝茶入	鉄釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
186 Ⅲ検	土19 土19	±19-034 ±19-034	陶器	神酒徳利	2. 0	4.0		口:3/4	灰	全面被熱	灰釉	17c中~18c中	瀬戸美濃
187 皿検	土19	土19-034	胸器	車類	2.0			胴:一部	暗灰	内面スス付着 V検検-6と同一か?	鉄釉	不明	瀬戸美濃か?
188 Ⅲ検 189 Ⅲ検	土19	土19-034	土器	里.規	(9.4)			Д : 1/8	暗褐	日面ババロ有 千俣快 ひこれ ル・	2.17		
189 Ⅲ検	土19	土24-042	陶器	天目茶碗	(11.4)			□ : 1/6	灰白	口縁部一部釉着あり	鉄釉	16 c 末~17 c 初	瀬戸美濃
190 皿俠	士24	±24-042	胸器	天目茶碗	(10.7)	3. 9	5. 1	底:完	黄灰	外面はさみ具痕あり	鉄釉	16 c 末~17 c 初	瀬戸美濃
192 Ⅲ検	±24	土24-041	陶器	碗	(11.0)	0.0	0.1	□ : 1/8	灰白	口縁端部キザミあり 全面被熱	錆釉	17 c 中~後	瀬戸美濃
193 Ⅲ検	±24	±24-043	陶器	碗	(10.0)			□ : 1/8	灰白	志野 口縁部付近鉄釉付着か?	長石釉	17 c 初	瀬戸美濃
194 Ⅲ検	土24	土24-043	陶器	III.	(10.5)	(7.2)	(17.5)	口:1/2 底:1/3	黄灰	志野 一部被熱 内面見込み、底面にピントチン痕あり	長石釉	17 c 初	瀬戸美濃
195 皿検	±24	±24-040	土器	<u> </u>	10.6	6. 1		口:完 底:完	褐	外面スス付着		18c後?	
196 Ⅲ検	±24	土24-039	土器		(10. 2)	(6.3)		口:1/3 底:1/2	褐	外面スス付着		18 c ?	
197 Ⅲ検	±24	土24-043	土器	<u> </u>	(9.2)	(6.0)		口1/4 底:一部	暗褐			17 c ?	
198 皿検	±24	±24-038	土製品	土鈴	(3.5)	(0.0)		1/4残	明褐	A CONTRACTOR OF THE CONTRACTOR			
199 Ⅲ検		±26-045	陶器	施	(10.8)		(0.2)	日:1/4	灰白		灰釉	18 c 初	瀬戸美濃
200 Ⅲ検	土26	土26-045	陶器	Điệi - Điệi	(14.6)	5. 3	8.3	口:1/8 底:完	褐一灰	唐津産か?内面見込みはさみ具痕あり	黄緑	17c前?	肥前か?
201 Ⅲ検	土26	土26-044	陶器	鉢	(111.0)	(10.6)	- 37.0	底:1/4	灰	唐津産 内面見込み・高台端部にはさみ具痕あり	銅緑釉	16 c後〜17 c前か?	肥前
202 Ⅲ検	土29	±27-047	土器	不明	(14.6)	,===,		□:1/8	黒褐	機種不明 (甕・鉢・釜・火消し壷か?) 胴部ロクロナデ 口縁横ナデか?			
203 Ⅲ検	±27	±27-046	陶器	急須	2.5	T	2. 5	把手:完	淡褐	把手のみ残存			常滑か?
204 Ⅲ検		土29-049	磁器		(13. 2)			□ : 1/8	白	型打成形 漆継ぎ痕あり	染付	17 c 中	肥前
205 Ⅲ検	土29	土29-049	陶器	Ш	(12. 3)			□:1/10	灰白	志野 口縁端部釉ハギか?	長石釉	17 c 中	瀬戸美濃
206 Ⅲ検		土29-049	瓦質陶器	火鉢か?	1	1		底:一部	黒灰	火鉢の脚部か?			
207		±30-050	胸器	施				一部残	黄灰	沓茶碗 唐津産 胴部一部ケズリ取り	灰釉	16c末〜17c初	肥前
208 Ⅲ検	土31	土31-051	陶器	鉢	(26. 6)			□:1/12	黄灰	笠原鉢 全面被熱	灰釉	18 c 中一後	瀬戸美濃
209 Ⅲ検	土34	土34-052	土器	111	(12.4)		2.6	口:1/6 底:1/8	黒褐	内外面スス付着		18 c	
210 Ⅲ検	土34	土34-052	土器	焙烙鍋	(25, 7)	(17.8)	5. 1	□:1/10	暗褐	外面スス付着			
211 Ⅲ検	土35	土35-054	磁器	小杯	(6. 2)			□:1/3	灰白	全面被熱か?	透明釉		不明
212 Ⅲ検	土35	土35-053	陶器	碗	(11. 2)			□:1/10	灰白	士35-2と同一か?	灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
213 Ⅲ検	土35	土35-054	陶器	碗	(11.2)			口:一部	灰白	土35-1と同一か?	灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
214 皿検	土35	土35-054	陶器	四耳壺		(8.4)		底:一部	灰	内面肩部に炭化物付着 (廃棄後付着か?) 灰釉後鉄釉	灰釉・鉄	18 c 中一後	瀬戸美濃
215 皿検	土38	土38-057	陶器	壷				胴:一部	灰	灰釉後鉄釉	灰釉・鉄	17 c 後〜18 c 初	瀬戸美濃
216 Ⅲ検	土41	土41-059	陶器	擂鉢	(35. 2)	†		口:一部	黄灰	漆継ぎ痕あり	鉄釉	17c前	瀬戸美濃
217 Ⅲ検		土42-060	磁器	11.02	1	(7.3)		底:1/3	白	漳州窯産 内面見込み鳳凰 底面「長」銘	染付	17 c 中	中国
218 Ⅲ検		土43-061	磁器	碗	1	(4.5)		底:1/4	自		染付	17 c 中	肥前
219 田検		土43-061	陶器	m	(11.7)	(6. 9)	2. 4	口:一部残 底:ほぼ完	黄白	志野織部鉄絵皿 蘭竹文 内面見込みトチン痕あり	長石釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
220 Ⅲ検		土43-061	土器		(10.2)	<u> </u>		口:1/12 底:1/6		内面スス付着 外面一部スス付着		17 c 前〜中	
					<u> </u>								

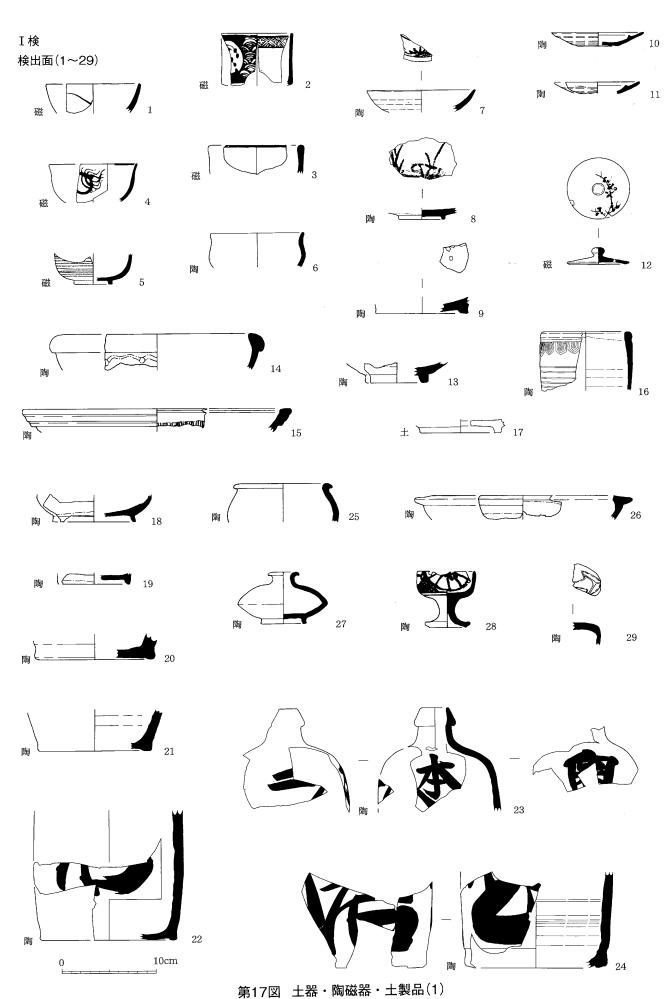
255554.06	. 204010.	75.115.181.185 L	THE ROMESTANDING	GO JANUAR WAR	TOUR LEGISLATION	F. W. 191, 52, 52	NAME AND ADDRESS OF THE PARTY O	1212222001-0091		Test control of the		en er oan yn en a geniferia	Per Service Control of	
	面	出土地点	注記	種別	器形	2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	法量(cm)	Annual Control of the	残存度	胎士	技法・文様・形態の特徴	和調	推定年代	産地
20 3 0s . 3 m - 42	10.45	1.40	1 40 001	1 00		口径	底径	器高	to all our basistan	104		1 - 6		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
	Ⅱ検 Ⅱ検	土43 土43	±43-061	土器	± 1954. S	(11.4)	(7. 2)	2.8	口:1/6 底:1/4	暗褐一黒変	外面スス付着		17 c	
	[[検	土47	±43-061 ±47-063	瓦質陶器 陶器	壷類か?	(9, 4)	(9.4)		底:1/5 口:1/10	黒	外部底部ケズリ調整			不明
	[[検	土47	土47-063 土47-063	陶器	 鉢	(9.4)	(14.5)		<u>口:</u> 1/10 底:1/4	灰		灰釉	17c初	瀬戸美濃
	II検	土47	土47-063	土器	# *	(10, 2)	(14. 5)		瓜: 1/4 口: 1/6	黄灰	市エファレギ がエー ガファレギ	靖釉	17 c 初	瀬戸美濃
	II検	土48	土48-065	磁器	碗	(13.4)			□ : 1/8	暗褐 白	内面スス付着 外面一部スス付着 外面山水文	34. / 1.	17 c ?	no Afr
	[[検	土48	土48-064	磁器	19/L	13. 7	5. 2	3. 2	口:2/3 底:完	白	内面見込み山水文に鳥 型打ち成形	染付 染付	18 c	肥前
	[[検	土48	土48-066	陶器		(11.0)	(6, 9)	18.5	底:1/4	黄灰	志野 全面被熱か?	長石釉	17 c 中	肥前
	[[検	土50	土50-080	陶器	碗	(11.0)	(5, 6)	10.5	底:1/4	黄灰	高台底部施釉後掻き取り	灰釉	17 c 初 不明	瀬戸美濃瀬戸美濃
	Ⅱ検	±51	土51-069	陶器	Щ.	<u> </u>	(6.6)		口:1/4 底:1/4	灰白	志野 底部トチン痕あり 若干被熱	長石釉		瀬戸美濃
	II検	土51	土51-069	陶器	擂鉢	1	(11. 2)		底:1/3	黄灰	内面摩滅 使用によるものか?	錯釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
	II検	土52	+.52-070	十器	III.		(5.4)		底:1/4	黒褐	内外面スス付着	2月 7日	不明	柳广天低
	II検	±:55	土55-072	陶器	擂鉢	1	(8, 6)		底:1/2	灰	摩滅が激しい 使用によるものか?	錆釉		瀬戸美濃
	Ⅱ検	土60	土60-074	陶器	鉢	(27. 2)	(0.0)		□ : 1/12	黄灰	I AMININA CA . EVITER O BOXY .	鉄釉	17 c後~18 c 初	瀬戸美濃
	Ⅱ検	士62	土62-075	磁器	碗	(= 11 = /	(4. 1)		底:1/2	自	外面草花文 底部見込み渦福	染付	17 c 末~18 c 初	肥前
	Ⅱ検	土62	±62-075	磁器	碗		(5. 9)		底:1/2	灰白	外面草花文か?	染付	18c中	肥前
	Ⅱ検	土62	士62-075	磁器	鉢	l	(9.2)		底:1/10	灰白	内面見込み草花文か?	染付	17 c 中	肥前
238 I	Ⅱ検	土62	±62-075	陶器	壷類	(9.0)			□ : 1/8	灰	全面被熱 灰釉鉄釉掛け分け 全面被熱?	灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
239 I	Ⅱ検	土63	±63-076	陶器		(10.7)	(5. 6)	1.9	口:1/4 底:1/6	灰白	志野 底部に「春」の墨書あり 若干被熱か?	長石釉	17 c 前	瀬戸美濃
	Ⅱ検	土63	土63-076	土器	111	1	4.7		底:ほぼ完	暗褐	内面スス付着	八日十四	不明	7007 大版
241 I	II検	土63	土63-076	磁器	向付	†	(6.2)	(5.9)	口:一部 底:1/4	白	波佐見産 型打ち成形 口縁部口錆 内面見込みに印刻あり 全面被熱	青磁	17 c 中	肥前
242 I	II検	土64	土64-078	土器	内耳鍋	(31.0)	(23.4)		口:一部残 底:1/12	黒褐	摩滅が著しい	1	2.01	在地
243 I	Ⅱ検	土64	土64-077	土器	内耳鍋	(29.6)			П:1/4	黒褐				在地
244 I	Ⅱ検	土64	土64-078	土器	内耳鍋		24. 5		底:一部	黒褐	摩滅が著しい			在地
245 I	Ⅱ検	P17	P17-003	陶器	Ш	(11.6)	(6.8)	(2.2)	口:1/10 底:一部	灰	志野 全面被熱	長石釉	17c前	瀬戸美濃
246 I	Ⅱ検	P37	P37-010	土器			(6.4)		底:1/3	暗褐	外面スス付着	X 10.1M	1.004	1007 2000
247 I	Ⅱ検	P43	P43-013	陶器	擂鉢		(10.0)		底:1/4	灰白	内面被熱 外面スス付着	錯釉	18c前~中	瀬戸美濃
248 I	Ⅱ検	Т3	T3-002	陶器	Ш	(12.2)	(7.0)	2. 3	口:1/5 底:1/6	黄灰	志野 全面被熱 口縁端部タール付着 灯明皿か?	長石釉	17c中	瀬戸美濃
-	Ⅱ検	T4	T4-005	. 陶器	小杯	(6.8)	(3.8)	3.6	口:一部 底:1/8	黄灰	内外面被熱か?	灰釉	16c末	瀬戸美濃
	[[検	T4	T4-005	土器	内耳鍋	(30.4)			口:1/6	黒褐		0.771		100 500
	Ⅱ検	T7	T7-007	土器	Ш	(11.0)	(7.0)	2.6	口:1/3 底:1/3	暗褐	底部「○」の墨書あり		17 c 中か?	
	Ⅱ検	T7	T7-008	陶器	擂鉢	(24. 8)			□:1/10	黄灰		錆釉	16c末	瀬戸美濃
	[[検	T8	T8-010	磁器	猪口		2.3		底:1/2	白	内面見込み草花文 底面見込み渦福	染付	17 c 後〜18 c 初	肥前
	[[検	T8	T8-010	陶器		(13.6)			□:1/10	黄灰	志野	長石釉	17c前〜中	瀬戸美濃
	[[検	T10	T10-012	陶器	碗		4.8		底:ほぼ完	黄灰		鉄釉	18c中か?	瀬戸美濃
	[[検	T10	T10-013	土器		(10.9)	6.2		口:1/3 底:完	淡褐	底部墨書あり 内外面スス付着		16 c 末〜17 c 初か?	
	[[検	T10	T10-015	土器	内耳鍋	(16. 0)		_	□ : 1/6	黒褐	胴部に明瞭なキザミあり			在地
	[[検	T11	T11-019	土器	<u> </u>	(11. 2)			口:1/3	暗褐	内面スス付着 灯明皿か?			
	[[検	T11	T11-019	土器	盖	(15. 6)			□ : 1/10	黒	外面ミガキ			1
-	Ⅱ検 Ⅱ検	T11	T11-019	陶器	鉢 サマイロ	(22.4)	(00.4)		□ : 1/6	灰褐	唐津産 内外面鉄絵付け 一部スス付着 一部被熱	灰釉	17 c 前	肥前
	Ⅱ検	T11 T13	T11-017	土器	内耳鍋	 	(28.4)		底:1/4	暗褐一黒変	外面スス付着			在地
		検出面	T13-020 III検-018	陶器 磁器	擂鉢	(10.0)	(8, 7)		底:1/2	灰白	摩滅が著しい	錆釉	不明	瀬戸美濃
		検出面	Ⅲ検-018	磁器	碗	(13. 2)			□ : 1/10	白	漆継ぎ痕あり	染付	17 c	肥前
	- 12 4	検出面	Ⅲ検-014	磁器	碗	(11.0)			□ : 1/6	白	外面屏風に草	染付	18 c 中〜後	肥前
		検出面	Ⅲ検-014	磁器	碗	(8.0)	(4.0)		口:1/8	白	外面草花文	染付		肥前
		検出面	Ⅲ検-018	施器 陶器	碗	11.0	(4.8)		底: 1/2 口: 1/10	灰白	高台端部砂目痕あり 一部漆継ぎ痕あり	透明釉	17 c 前〜中	肥前
		検出面	Ⅲ検-015	陶器	砂道	(10.4)	-		□:1/10 □:1/4	黄灰	陶胎染付 摺絵碗	染付	18 c 中〜後	瀬戸美濃
		検出面	Ⅲ検-019	陶器	191E	(10. 4)			П:1/4 П:1/8	灰	全面被熱	錆釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
		検出面	Ⅲ検-014	胸器	191E	(9. 2)	-		口:1/8 口:1/6	灰白		鉄釉	18c中	瀬戸美濃
		検出面	皿検-014	陶器	碗	(12. 3)			日:1/8	黒灰	外面雨降り文	灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
		検出面	Ⅲ検-018	陶器	砂	(11.4)			П:1/8			灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
	_	検出面	Ⅲ検-015	陶器	碗	(7.8)	(3.5)		口:1/8 底:2/3	灰	若干被熱か?	灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
		検出面	Ⅲ検-015	陶器	1911 1981	(1.0)	4.2		日:1/3 <u>底:2/3</u> 底:完	黄灰	小型碗 高台タール付着、廃棄後に付着か?	灰釉	不明	瀬戸美濃
		検出面	Ⅲ検-015	陶器	施か?		(5. 0)		底: 1/2	灰匠	唐津産 白泥ハケ塗り 一部に漆継ぎ痕あり	鲭釉	17 c	肥前
		検出面	Ⅲ検-015	陶器	19/6/75" :	-	5, 5		底:1/2	灰 灰白	古藤岡田芸駒思	灰釉	17 c 中~18 c 初	瀬戸美濃
-		検出面	Ⅲ検-015	陶器	碗		4.1		底:一部欠	灰白	京焼風肥前陶器 底面刻印 漆継ぎ痕あり	灰釉	17 c 中	肥前
278 II		検出面	Ⅲ検-008	陶器	碗		5. 2		底:完	灰白		灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
					., 4	·	u	(2.0)	~~·/u			灰釉	17 c 中	瀬戸美濃

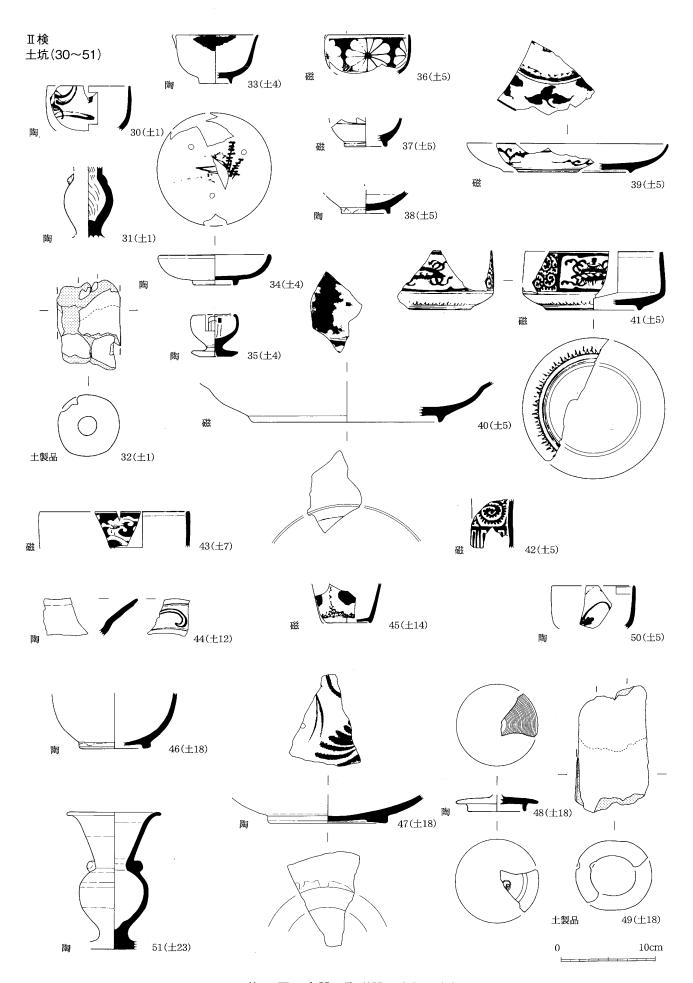
平口 検出	e a factor	18 14 15 14		THEALTS!	E. d. t. w	法量(cm)	al Park		4.7457#176		釉調	推定年代	産地
番号面	出土地点	注記	種別	器形	口径	底径	器高	残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	不如问	1年2年10	
279 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-017	磁器	III.	(18, 6)	/ex j.1.	жин јец	口:一部残	灰白	内面見込み草花文か?	染付	17 c 中〜後	肥前
280 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検~007	陶器	III.	(12.6)	(7.8)	2. 3	口:1/6 底:1/6	黄白	志野鉄絵皿 内面見込み輪文	長石釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
281 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-020	陶器	Ш	(11.2)			□:1/6	黄灰	志野	長石釉	17 c 中	瀬戸美濃
282 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-020	陶器	碗	(11.0)			□:1/10	灰	腰折碗	灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
283 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-012	陶器		(12. 2)	(6.4)	2.7	口:1/6 底:1/6	黄灰	菊皿 型打ち成形後口縁部ヘラ状工具による切り込み 内外面被熱 外面トチン痕あり	灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
284 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-015	陶器	Ш				口:一部残	黄灰	菊皿 型打ち成形後口縁部ヘラ状工具による切り込み	灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
285 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-001	陶器	Ш	13.0	5. 9	3. 1	口:5/8 底:完	黄灰	印花皿 内面見込み輪ハゲ 一部にスス付着	鉄釉	17 c 初	瀬戸美濃
286 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-013	陶器	Ш		(5.4)		底:1/4	灰白	印花皿 内面見込み輪ハゲあり	灰釉	16c末~17c初	瀬戸美濃
287 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-019	陶器		(13.8)			口:1/4	灰	折綠皿	灰釉	16c末	瀬戸美濃
288 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-014	陶器	Щ	(14. 2)			□:1/4	黄灰	外面一部施釉後掻き取り	灰釉	17 c 初	瀬戸美濃
289 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-018	陶器	III.	(10.6)	(5.4)	2.4	口:1/6 底:1/6	黒灰	志野 全面被熱	長石釉	16c末〜17c初	瀬戸美濃
290 Ⅲ検	検出面	III検-015	陶器	Ш				口:一部残	白	灰釉・鉄釉掛け分け	灰釉・鉄 釉	18 c	瀬戸美濃か?
291 Ⅲ検	検出面	Ⅲ檢-018	士器	III.	(10. 2)	<u> </u>		□:1/10	暗褐	内外面スス付着		18 c か?	
292 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-019	土器		(9, 8)	 		□ : 1/10	黒褐	内外面スス付着 灯明皿		18 c 中	
293 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-018	土器		(9.8)			□ : 1/8	淡褐	内外面スス付着 灯明皿		18 c 後	
293 Ⅲ検_	検出面	Ⅲ検-015	土器	1111	(10. 2)	(5.2)	(2.0)	口:1/8 底:一部残	褐	内外面スス付着		18 c 後	
294 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-015	土器		(10. 4)	(6.6)	(2.2)	口:1/6 底:1/6	暗褐			18c中?	
296 川検	検出面	Ⅲ検-010	土器	III.	9.7	5. 4	2.2	口:一部欠 底:完	黒褐	内面一部スス付着		18c中?	
297 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-017	土器		(9.4)	(5.4)	(2, 1)	口:1/8 底:一部残	褐	内面スス付着		18 c 後	
297 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-005	土器		10. 4	6.4	2. 1	口:3/4 底:完	黒褐	内外面スス付着		18 c 中?	
299 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-019	土器	III.	(10. 2)	(6, 2)		口:1/4 底:1/4	褐			18 c 中 ?	
300 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-014	土器		(10.8)	(7.1)	2.8	口:1/4 底:1/6	暗褐	内面スス付着		17 c 末〜18 c 初	
301 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-015	土器		(9, 4)	-(1.1)	2.0	□ : 1/8	暗褐	内外面ともスス付着		18 c 後	
301 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-019	土器	Ш.	(10.4)	(5.4)	(2.7)	口:1/6 底:1/4	黒褐	内外面口縁部にスス付着 灯明皿		18 c 初	
302 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-019	土器		5. 5	6.6	2. 9	口:1/3 底:2/3	暗褐	内面全面にスス付着 灯明皿		17 c か?	
304 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-018	土器		(11, 1)	(6.8)	2. 2	口:一部残 底:1/3	暗褐	内外面スス付着		18 c	
305 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-017	土器	<u> </u>	(10.8)	(6.8)	2, 2	口:1/4 底:1/3	褐	1471 (447) 0 1474		18 c	
306 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-018	土器	<u>m</u>	(10.0)	(6, 0)	2, 2	底:1/6	暗褐	内面スス付着		18 c か?	
307 Ⅲ検	検出面	皿検-019	土器		(12. 2)	(6.4)	2.8	口:一部残 底:1/4	暗褐	外面スス付着		18 c	
308 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-019	土器	ш.	(14. 4)	(0. 4)	2.0	□:1/12	暗褐	内面、外面口縁部にスス付着 灯明皿			
309 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-009	土器	III	(15, 0)	(8.0)	2.8	口:1/6 底:1/3	暗褐	内面スス付着 灯明皿か?		19 c か?	
310 Ⅲ検	検出面	Ⅲ换-011	陶器	向付	(10.0)	(5. 2)	2.0	底:1/2	赤褐	絵唐津 内面見込み方形区画に草花文	長石釉	16 c 末〜17 c 初	肥前
310 血俠	伊山田	III 190 UTI	PHUTA	IFUTO	 -	(0.2)	 	MEN . 1/ 2			灰釉・鉄		
Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-014	陶器	向付		İ		口:一部残	黄灰	織部 ロクロナデ後口縁部一部押圧整形 銅縁釉流し掛け	釉・銅緑	17 c 後	瀬戸美濃
311 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-015	陶器	ML	(12.0)	-		□:1/6	灰白	陶胎染付 蛇の目高台か?	灰釉	18 c	瀬戸美濃
		Ⅲ検-016	胸器	鉢	(14.0)	(11.0)	<u> </u>	底:1/6	灰	笠原鉢 内面灰釉後銅縁釉流し掛け 内面トチン痕あり 底部漆継ぎ痕あり 検-10と同一か?	灰釉	17 c 中~18 c 初	瀬戸美濃
313 Ⅲ検 314 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-016	陶器	鉢		(11.0)	<u> </u>	口:一部残	灰	笠原鉢 内面灰釉後銅緑釉流し掛け 検-11と同一固体か?	灰釉	17 c 中~18 c 初	瀬戸美濃
314 Ⅲ検 315 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-017	陶器	捏鉢	(36. 0)	+		口:1/12	灰白	立 京野	灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
315 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-015	陶器	捏鉢	(27. 8)		 -	口:一部残	灰	玉縁口縁 全面被熱	灰釉	18 c 後	瀬戸美濃
316 皿候	検出面	Ⅲ検-014	陶器	捏鉢	(61.0)	1		胴:一部残	黄灰	五線 日線 美国 欧州	灰釉	18 c	瀬戸美濃
318 皿検	検出面	Ⅲ検-014	陶器	擂鉢	(26.0)	 	 	□:1/8	灰白	N. N. Land 44	靖釉	18 c 中	瀬戸美濃
319 皿検	検出面	Ⅲ検-014	陶器	擂鉢	(20.0)	10. 1		底:1/2	灰白	靖 釉流し掛け	靖釉	18 c 後~19 c 初	瀬戸美濃
320 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-017	胸器	香炉	(11.0)		 	日:1/10	黄灰	外面うのふ釉	鉄釉	17 c 後〜18 c 初	瀬戸美濃
					_		-	日:1/10	黄灰	鲭釉後鉄釉	錆釉・鉄	18 c 初〜中	瀬戸美濃
321 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-018	陶器	香炉か?	(11.3)	+	ļ				錆釉・鉄		
322 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-018	陶器	香炉か?	(12.4)			□:1/6	黄灰	鲭釉後鉄釉	釉	18 c 初〜中	瀬戸美濃
323 単検	検出面	III検-015	土器	擂鉢		(10.0)		底:1/4	褐	内面見込みに擂目のような沈線あり			不明
324 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-020	土器	鍋類か?	(28.8)			□:1/12	暗褐	口頸部に穿孔あり 用途、器種不明			不明
325 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-014	土器	内耳鍋か?	(24. 1)	(19.8)	7.4	口:1/6 底:1/6	暗褐	外面スス付着			
326 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-014	陶器	茶入	(3.0)			□:1/2	灰		鉄釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
327 Ⅲ検	検出面	Ⅲ検-023	陶器	キセル	(1.1)			雁首:1/2	灰	織部 雁首 鉄絵付け	透明釉	17 c 前	瀬戸美濃
328 Ⅲ検	検出面	III 検-003	土製品	面摸	(3. 6)	(3.0)	(0.8)	1/2残	褐			不明	不明
329 IV検	検出面	IV検-002	磁器	碗		(8. 2)		底:一部	白	内面見込み雲文か?	染付	18 c 前	肥前
330 IV検	検出面	IV検-002	磁器	碗	(12.5)			□ : 1/4	白	外面桜花文	染付	17 c 後一18 c 前	肥前
331 IV検	検出面	IV検-002	磁器	碗	9.0			口:一部	白	外面草花文	染付	18 c	肥前
332 IV検	検出面	IV検-002	陶器	1 11		4. 2		底:完	黄白	志野織部鉄絵皿 内面見込みトチン痕あり	長石釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
333 IV検		IV検-002	陶器	天目茶碗	(11.2)			□ : 1/8	黄灰		鉄釉	16 c 後	瀬戸美濃
300 111X	1 12/14/11	1 1/2 002	1 179 HH	1 2 1 2 1 1 1/0	., .====/			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	L	<u> </u>			

A A DESCRIPTION	F. 3 F. 5 V	- 15 Mar - 15 M	FIGURE STOLEN	1 7	4. 11. × 15. 15	12472235174	(A)	Anno actions and action and access that	T have an arrange		MARKET TO SECOND 1		el a compression de la compression della compression de la compression della compres
番号 検出	出土地点	注記	種別	器形	-	法量(cm)		残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	産地
面	S. 100 S. 20		100	100	口径	底径	器高		Para Laborate	The Market Control of Market C	134169	STATE OF THE COMPANY	
334 IV検	検出面	IV検-002	陶器	天目茶碗	(11.0)			口:一部	暗灰褐	唐津産か?初山の可能性も考えられる	鉄釉	17 c 前〜中	肥前か?
335 IV検	検出面	IV検-002	磁器	鉢	(11.8)	(6.5)		口:一部残 底:1/4	白	外面唐草文か?内面見込み宝文に五弁花 底面渦福	染付	17 c 後〜18 c 初	肥前
336 IV検	検出面	IV検-002	陶器		(11.8)	(6.8)	2. 7	口:1/4 底:1/4	黄灰白	志野織部鉄絵皿 内面見込み、底面トチン痕あり	長石釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
337 IV検	検出面	IV検-002	陶器		(11.5)	(5.9)	2.9	口:1/5 底:1/4	黄白	志野織部鉄絵皿 内面見込み格子に山文	長石釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
338 IV検	検出面	IV検-002	陶器		(10.7)	(5.8)	1.9	口:1/16 底:2/5	淡灰	志野織部鉄絵皿 内面見込みにトチン痕あり 底部釉拭き取り 全面被熱か?	長石釉	16 c 後〜17 c 前	瀬戸美濃
339 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(10.7)	(6.0)	2. 2	口:1/7 底:1/3	灰	印花皿 全面被熱 口縁端部にタール付着、灯明皿の可能性も考えられる 内面・底面にトチン 寝あり	長石釉	17 c 初	瀬戸美濃
340 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(11.9)	(5.8)		口:1/4 底:1/5	淡黄灰	内面見込み重ね焼痕 内面灰釉に銅緑釉の流し掛け 全体被熱か?	灰釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃
341 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(12.0)	(7.4)	2, 2	口:1/16 底:1/6	淡黄灰	志野 内面見込みに沈線あり	長石釉	17 c 前	瀬戸美濃
342 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(10.0)	(5.0)	1.7	口:1/8 底:1/4	灰		灰釉	16c後	瀬戸美濃
343 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(9.9)	(5.0)	2. 1	口:1/4 底:1/3	淡黄灰	内面見込みピントチン痕、底面輪トチン痕あり	鉄釉	16 c 後一17 c 前	瀬戸美濃
344 IV検	検出面	IV検-002	陶器	.IIIL	(11.7)	(7.6)	2. 2	口:1/12 底:1/8	淡灰	志野 底面にトチン痕あり	長石釉	17c前	瀬戸美濃
345 IV検	検出面	IV検-002	胸器	III	(11.5)	(6.1)	2. 3	口:1/3 底:2/3	淡黄灰	志野 外面被熱 内面見込みにトチン痕あり	長石釉	17 c 中	瀬戸美濃
346 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(12.3)	6.2	2.4	口:3/4 底:7/8	淡灰	志野 底部炭化物付着 内面見込みトチン痕あり	長石釉	16 c 後	瀬戸美濃
347 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш	(12.6)	(7.4)	2. 5	口:1/5 底:1/3	淡黄灰	志野 内外面一部にスス付着 灯明皿か?	長石釉	17 c 中	瀬戸美濃
348 IV検	検出面	IV検-002	陶器	.III.	(10.5)	T		□:1/12	淡黄灰	志野 若干被熱か?	長石釉	17 c 中	瀬戸美濃
349 IV検	検出面	IV検-002	陶器	m	(11.7)			□ : 1/12	淡灰	志野	長石釉	17 c 中	瀬戸美濃
350 IV検	検出面	IV検-002	陶器	III		(5.8)		底:1/4	灰	内面見込みピントチン痕、底面輪トチン痕あり	鉄釉	17 c 中	瀬戸美濃
351 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш		6.4		底:完	淡灰	志野 内面・底面にトチン痕あり	長石釉	17c中か?	瀬戸美濃
352 IV検	検出面	IV検-002	陶器	Ш		5. 9		底:ほぼ完	淡黄灰	底面に輪トチン痕 内外面一部被熱か	灰釉	16c末	瀬戸美濃
353 IV検	検出面	IV検-002	陶器	III.	(10.7)	(5.4)		口:1/4 底:1/3	黄灰	菊皿 型打成形後切り込み調整 内面トチン痕あり 全面被熱か	灰釉	17c中	瀬戸美濃
354 IV検	検出面	IV検-002	陶器	灯明皿	(8.5)	(5.0)	2.2	口:1/4 底:1/4	暗灰	唐津産か?突出部貼り付け後穿孔 検-21と同一の可能性が高い	鉄釉	不明	肥前か?
355 IV検	検出面	IV検-002	陶器	灯明皿	(8.1)	(5.0)	2.0	口:1/3 底:1/4	暗灰	唐津産か?突帯部切込み後灯芯部貼り付け 検-22と同一の可能性が高い	鉄釉	不明	肥前か?
356 IV検	検出面	IV検-002	陶器					口:一部	淡黄灰	総織部 口縁端部切込み調整 一部被熱か?	銅緑釉	17 c 初	瀬戸美濃
357 IV検	検出面	IV検-003	土器	Ш	10.3	6.0	3. 1	口:3/4 底:完	暗褐〜黒褐	内外面スス付着	SP\$INSC/PA	16c末	在地
358 IV検	検出面	IV検-002	土器		8.6	5. 4	1.9	口:一部欠 底:完	褐〜黒褐	内外面スス・炭化物付着	 	17 c 後一18 c 前	在地
359 IV検	検出面	IV検-002	土器	.III.	(10.0)	(4.8)		口:1/3 底:3/4	暗褐	内外面スス付着	 	16 c 末〜17 c 前	在地
360 IV検	検出面	Ⅲ検-002	陶器	向付				胴:一部残	褐	絵唐津 内面見込み鈴蘭か?溝2-2と同一製品	長石釉	17 c 後〜中	肥前
361 IV検	検出面	IV検-002	陶器	向付					暗褐	唐津産	長石釉	16 c 末〜17 c 初	肥前
362 IV検	検出面	IV検-004	瓦質陶器	火鉢か?		19.4		底:1/5	暗灰	工具ナデ 底面ヘラケズリ	ストロイル	不明	不明
363 IV検	検出面	IV検-002	陶器	水滴	2. 6	3.6	1.7	口:ほぼ完 底:完	淡黄灰	注口部ケズリ後ナデ	鉄釉	16c中	瀬戸美濃
364 IV検	検出面	IV検-002	土器	不明					淡褐	火鉢等の脚部か?	рустра	不明	不明
365 V検	土18	土18-003	陶器	碗		(5.4)		底:完	暗灰	全面被熱	灰釉	16 c 中	瀬戸美濃
366 V検	土20	土20-006	土器	Ш	(10.4)	6.6	(3.1)	口:3/8 底:完	暗褐〜黒変	内面スス付着	2010	17 c 前	1007 //2100
367 V検	土20	土20-005	土器	ш	9.4	5.4	2.4	口:完 底:完	暗褐	内面スス付着 灯明皿か?		17c前	
368 V検	土21	土21-007	陶器	ш	(10.4)	(6, 2)	(2.3)	口:1/5 底:1/4	暗灰	口縁部炭化物付着 内面鉄釉後灰釉二度掛け 灯明皿	鉄釉・灰		345 - 344 3db
369 V検	溝2	溝2-001	陶器	向付	(444.2)	4. 9	(2.0)	底:完			釉	16 c 末〜17 c 初	瀬戸美濃
77.60					f	4. 3			褐	絵唐津 内面見込み鈴蘭か?V検-35と同一製品	長石釉	17 c 前〜中	肥前
370 V検	T1	T1-001	陶器	壷	(11.0)			口:1/8	暗灰	耳部単位不明 内外面灰釉後鉄釉 内面口縁部釉拭き取り 耳部砂付着	灰釉・鉄	不明	瀬戸美濃
371 V検	検出面	V検-016	陶器	69ti	(12.6)			□:1/7	淡灰	陶胎染付	染付		肥前か?
372 V検	検出面	V 検-003	陶器	碗	(10.4)			□:1/12	淡黄灰	瀬戸黒碗	鉄釉	16 c 中〜後	瀬戸美濃
373 V検	検出面	V検-010	陶器	碗		5, 2		底:3/5	暗灰褐	唐津産 全面被熱 外面スス付着	錆釉	16 c 後	肥前
374 V検	検出面	V 検-016	陶器	碗		5. 0		底:完	暗灰		鉄釉	16c末	瀬戸美濃
375 V検	検出面	V 検-001	陶器	天目茶碗	(11.4)	4.8	(7.0)	口:1/12 底:完	黄灰		鉄釉	17 c 初	瀬戸美濃
376 V検	検出面	V検-016	陶器	天目茶碗	(11.8)			口:一部	暗灰白	外面釉溜り	鉄釉	17 c 初	瀬戸美濃
377 V検	検出面	V検-016	磁器	Ш		(8. 6)		底:1/6	白	内面見込み雲文か?一部漆継ぎ痕あり	染付	17 c 中〜後	肥前
378 V検	検出面	V検-016	陶器	Ш	(10.8)	(5. 6)	(2.7)	口:1/4 底:1/8	暗灰	志野 全面被熱 内面スス付着 灯明皿か?	長石釉	17 c 初	瀬戸美濃
379 V検	検出面	V 検-016	陶器		(11.8)	(6.8)	(2.5)	口:1/10 底:4/1	灰	志野 内面見込みトチン痕あり 高台端部に切り込みあり 全面被熱	長石釉	17 c 初	瀬戸美濃
380 V検	検出面	V 検-016	陶器		(10.0)			□:1/4	淡黄灰	志野 全面被熱 内外面スス付着	長石釉	16 c 末〜17 c 初	瀬戸美濃
381 V検	検出面	V 検-016	陶器		(11.4)			口:1/10	淡黄灰	志野	長石釉	16 c 末〜17 c 初	瀬戸美濃
382 V検	検出面	V検-012	陶器	Щ	(10.8)	(5.8)	(2.2)	口:1/8 底:1/5	黄灰	錆釉後鉄釉 内面見込みトチン痕あり	錆釉・鉄	16 c 末〜17 c 初	瀬戸美濃
383 V検	検出面	V 検-016	陶器	Ш	(12. 2)			□ : 1/10	淡黄灰	全面若干被熱か?	釉		
77.50	検出面	V 検-016				(0.1)	(0)			全国有土板熱か? 「抗縁菊皿 内面丸ノミ削ぎ 底面輪トチン痕あり 内面見込み釉ハギ 内外面一部にタール付着	灰釉	16c末〜17c初	瀬戸美濃
004			陶器		(12.0)	(6.4)	(2.1)	口:1/8 底:1/3	淡灰	幻惑衆血 門面丸ノミ削さ	灰釉	16 c 後一17 c 初	瀬戸美濃
385 V検	検出面	V検-016	陶器		(11.8)	(6.8)	(2.3)	口:一部 底:1/4	暗灰	志野 菊皿	長石釉	17 c 前	瀬戸美濃
386 V検	検出面	V検-016	土器		(9.6)	(4.6)	(2.8)	口:1/8 底:一部	暗褐	内面スス付着	25.1196	17 c 前	7017 75165
387 V検	検出面	V検-016	土器		10.0	(5. 2)	(2.9)	口:1/4 底:一部	暗褐〜黒変	内外面スス付着 灯明皿か?		17 c 前	
388 V検	検出面	V 検-016	土器		(11.1)			□:1/5	暗褐	内外面一部スス付着		17 c	
389 V検	検出面	V検-016	土器		(11.2)			口:1/8	暗褐一黒変	内外面スス付着 灯明皿か?		17 c 前	
											ь	2. 0 89	L

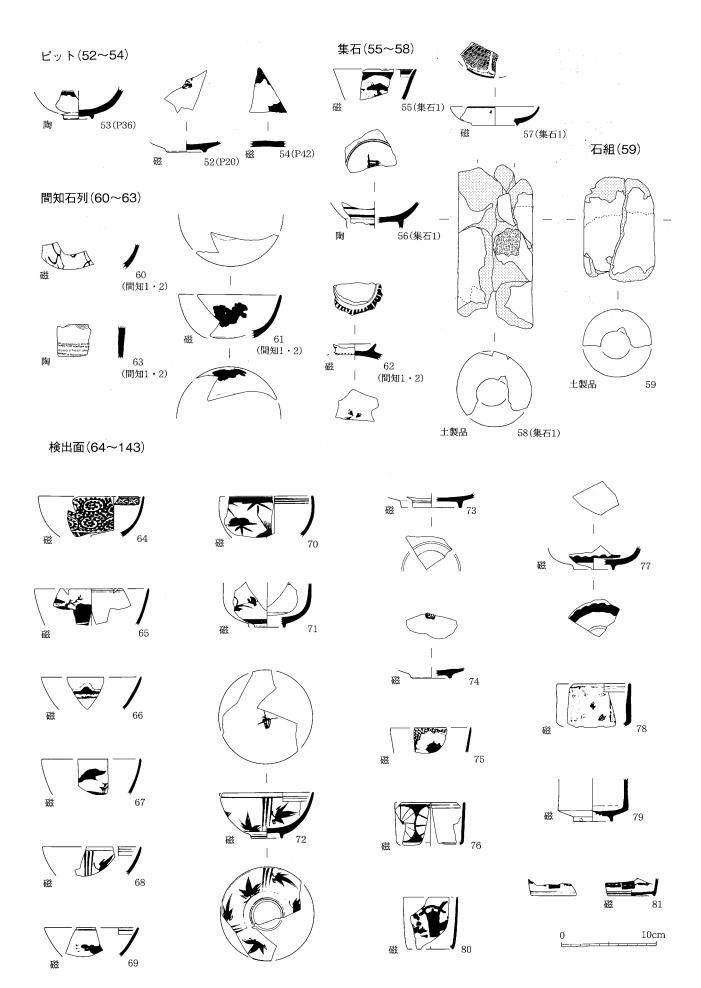
16.11		8 9 10 8 8 8	Tall marks	Ingrana.	Lauria.	法量(cm)	(1944) P. 19		F. 181 . 181 . 187 . 197 . 181		11.04	The second secon	Mare His De
番号 検出	出土地/	注記	種別	器形	口径	底径	器高	残存度	1 胎土。	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	産地
390 V検	検出面	V 檢-016	一器	l m	(11.8)	是刘王	404 (6)	口:一部	暗褐	内外面スス付着 灯明皿か?	- 12 × 12 × 12 × 12 × 12 × 12 × 12 × 12	17c初か?	
391 V検		V 検-016	土器	III.	(8. 6)	 		П: 1/8	暗褐	F17下曲パパド海 パガルル・		不明	
392 V検		V 検-016	土器		(10.0)	(5. 6)	(2.8)	口:一部 底:1/2	黒褐	内外面スス付着		16 c 後〜17 c 前	
393 V検		V検-016	土器		(12.0)	(7.0)	2. 9	口:1/4 底:1/4	黒褐	内面スス付着	1	16 c 後	
394 V検		V検-016	土器		(12.0)	1117		□:1/8	暗褐	1,7-14		17 c	
395 V検		V検-006	陶器	向付	(12, 0)	(6.6)		底:1/2	灰一褐	絵唐津 内面見込み草文	長石釉	17 c 前〜中	肥前
396 V検		V検-011	陶器	向付	 	(5, 0)		底:1/3	暗褐	絵唐津	長石釉	16 c 後〜17 c 初	肥前
397 V検		V検-016	陶器	鉢	(12.0)	, ,		□ : 1/6	灰	全面被熱	灰釉	16 c 後	瀬戸美濃
398 V検		V 検-016	土器	内耳鍋	(25. 8)			□:1/12	暗褐一黒変				在地
399 V検		V 検-008	土器	内耳鍋		22. 0		底:完	暗褐一黒変	内面スス付着			在地
400 V検	検出面	V検-013	土器	内耳鍋	(31.4)			口:一部	暗褐一黒変	外面スス付着			在地
401 V検	検出面	V 検-013	土器	内耳鍋	1	(25.6)		□ : 2/3	暗褐一黒変	外面スス付着			在地
402 V検	検出面	V 検-008	土器	内耳鍋	(33.4)	(26.0)	(15.6)	口:1/4 底:2/3	暗褐一黒変	内外面スス付着			在地
403 V検	検出面	V検-008	土器	内耳鍋	(27.6)			□ : 2/3	暗褐一黒変	内外面スス付着 口縁部炭化物付着			在地
404 V検	検出面	V 検-004	土器	内耳鍋	(24.4)			□:1/8	暗褐一黒変	底部一部剥雕			在地
405 V検			磁器	壷類		(4.0)		底:3/2	白	内面見込み釉飛び散り	染付		中国か?
406 V検			陶器	壷・徳利				胴:一部	灰	内面スス付着 Ⅲ検土19-2と同一か?	鉄釉	17 c 前〜中	瀬戸美濃か?
407 V検			陶器	壷類	L	10.2	<u> </u>	底:3/5	暗灰	唐津産 底面スス付着	灰釉		肥前
408 V検			土製品	鞴の羽口	(9.4)			一部	灰一暗灰	一部鉄滓付着	ļ		1
409 トレ	東部トレンチ	T-021	磁器	碗	(12.8)			□:1/12	灰白	内面見込み草花文	染付	18 c 中	肥前
410 トレ	東部トリンチ	T-021	陶器	ш		5. 2		底:完	黄白	高台端部施釉後掻き取り 蛇の目高台	鉄釉	不明	瀬戸美濃
411 トレ	東部トレ	T1 x 層-001	土器	Ш	11.1	6.7	3. 3	口:3/4 底:完	褐〜黒変	内外面スス付着 底部著しく被熱		16 c 後	
412 トレ	東部トレンチ	T-006	土器		(9.9)	(6.4)	(2.3)	口:1/4 底:1/3	淡褐	内面スス付着		19c初か?	
413 トレ		1-000	陶器	鉢		(19.0)		底:1/4	黄灰	内外面はさみ具痕あり 全面被熱	灰釉	17 c 前	瀬戸美濃
414 トレ	東部ト1	T-021	磁器	紅猪口				一部	白	内面施釉 外面印刻蛸唐草文	透明釉	19 c	肥前
415 外	調査区外		磁器	碗か?		(4.8)		底:1/2	白	高台外面へラ削り痕 内面見込み十時花文か?	染付	18cか?	肥前
416 外	調査区外		陶器	碗	(11.4)			□:1/6	暗灰		灰釉	17c中か?	瀬戸美濃
417 外	調査区外		陶器	碗	(10.0)			□:1/4	淡灰	志野 全面被熱 口縁端部破損後摩滅 一部スス付着	長石釉	18 c 中	瀬戸美濃
418 外	調査区外		陶器	小杯か?	(6.8)	(3.6)	(2.6)	口:1/10 底:1/6	淡灰	外面はさみ具痕あり	灰釉	不明	瀬戸美濃か?
419 外 420 外	調査区外		陶器 陶器	一 碗 天目茶碗	(11.0)	-		- 1/a	暗灰	陶胎染付 内面錯釉 外面風景文か?	染付	18 c	肥前
420 外	調査区外		陶器		(11. 0)			口:1/6	暗灰 暗黄灰	漆継ぎ痕あり	鉄釉	17c前〜中	瀬戸美濃
421 外	調査区外		陶器		(12.0)	(7.0)	(2.5)	口:3/8 底:1/4		志野	長石釉 長石釉	17c前 17c前	瀬戸美濃
423 外	調査区外		陶器		(10, 6)	(6.4)		口:一部 底:1/5	淡灰	全面被熱 内面ピントチン痕あり 底部輪トチン痕あり	灰釉	17c前	瀬戸美濃
424 外	調査区外		陶器	<u>III.</u>	(10.4)	(0.4)	(2.0)	П: 1/8	暗灰	全面被熱 内面スス付着	灰釉	17 c 初	瀬戸美濃
425 外	調査区外		陶器	<u> </u>	(40, 1)	(6. 2)	 	底:1/8	暗灰	志野 全面被熱	長石釉	18c中	瀬戸美濃
426 外	調査区外		陶器		—	(6, 4)		底:1/4	淡灰	志野	長石釉	17c初?	瀬戸美濃
427 外	調査区外		陶器			5. 0	1	底:1/5	暗灰	内面見込み輪ハギか?	灰釉	16 c 後〜17 c 前	瀬戸美濃
428 外	調査区外		陶器	1111	1	(6.4)		底:1/6	淡黄灰	底面一部被熱	灰釉	17c前	瀬戸美濃
429 外	調査区外		陶器	Ш		(6.8)		底:1/4	暗灰	印花皿 内面見込みトチン痕あり 底面輪トチン痕あり 全面被熱	灰釉	16c前?	瀬戸美濃
430 外	調査区外	7	土器	Ш	(9.4)	(6.4)	(3, 0)	口:1/3 底:1/3	暗褐	内外面スス付着	1		1
431 外	調査区外	7	土器	III	(9.2)			□:1/10	暗褐				
432 外	調査区外		土器	Ш	(9.8)	(6.4)	(3.0)	口:1/3 底:1/3	暗褐	内外面スス付着			
433 外	調査区外		土器	Ш	(9.6)			□:1/8	暗褐	内面スス付着			
434 外	調査区外		土器	▥	(10.0)	(5, 0)	(2.5)	口:1/2 底:1/6	暗褐	内外面スス付着		19 c 中一後	
435 外	調査区外		土器	Ш	(10.0)		ļ	□:1/8	暗褐				
436 外	調査区外		土器		(10.4)	 		□ : 1/5	暗褐				
437 外	調査区		上器		(11.0)	(1.0)	(0, 0)	□ : 1/6	暗褐	内外面スス付着			
438 外	調査区外		土器	<u> </u>	(9. 2)	(4. 6)	(2. 6)	口:一部 底:一部	暗褐一黒変	内外面スス付着		18 c 中か	
439 外 440 外	調査区		土器	Ш	(8.6)	(5.0)	(1.9)	口:1/3 底:1/3	暗褐 22	de N T a se / L W		19 c	
440 外	調査区外		土器		(9.8)	5. 5	(3.0)	口:1/8 底:完	暗褐 0x48	内外面スス付着			
441 外	調査区分		土器	III.	(10.0)	+	 	口:一部口:1/5	暗褐暗褐	内面スス付着			+
442 外	調査区名		土器	Ш.	(11.4)	+	-	П : 1/8	暗褐		-	****	1
444 外	調査区名		土器		(6.4)	1	-	底:1/4	暗褐 暗褐		-		-
144 21		- 1	上布	1 1111	(0.4)			JES, 1/4	百节		1		1

20,00	Contraction Contraction		Tarthairte, ned	techer ben darit	-145a54	法量(cm)	Setta 14				2001 G 15 K		10 and 65-81
番号 検出	出土地点	注記	種別	器形	口径	広里(温)	器高	残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	和調	推定年代	産地
445 外	調査区外	7	陶器	鉢	(26, 2)	(14, 2)		口:一部 底:1/6	淡灰	外面はさみ具痕あり 内面ピントチン痕あり 内外面スス付着 外面一部釉ハギ	灰釉	17 c 前	瀬戸美濃
446 外	調査区外	7	陶器	鉢	(2012)	(14. 6)	(11-)	底:1/10		内面はさみ具痕あり	灰釉	16 c 後〜17 c 前	瀬戸美濃
447 外	調査区外	7	陶器	擂鉢	(26. 6)	X2.27 07		□ : 1/12	暗灰		錆釉	17 c 前	瀬戸美濃
448 外	調査区外	7	陶器	擂鉢	(2010)	(11. 2)		底:一部		全面被熱	鉄釉	17 c 中	瀬戸美濃
449 外	調査区外	7	土器	内耳鍋	(29, 0)	(22.2)		口:一部	暗褐				在地
450 外	調査区外	7	土器	内耳鍋	(24. 4)			口:一部		外面スス付着			在地
451 外	調査区外	7	土器	内耳鍋	(28, 0)			日:I/10	暗褐一黒変	口縁部ゆがみあり 外面スス・炭化物付着			在地
452 外	調査区外	7	土器	内耳鍋	(14, 1)	(20, 9)	(12. 1)	口:1/3 底:一部	暗褐一黒変	口縁部ゆがみあり 外面スス付着		i i	在地
453 外	調査区外	7	土器	内耳鍋	X8.80.27	(27.4)		底:一部	暗褐一黒変	外面スス付着			在地
454 外	調査区外	7	土器	内耳鍋		(30. 2)		□:1/6	暗褐	外面スス付着			在地
455 外	調査区外	7	十器	内耳鍋		(18. 0)		底:1/4	暗褐				在地
456 廃土	廃土	廃土-003	陶器	碗		(4.6)		底:1/4	淡灰		鉄釉	17 c 中一後	瀬戸美濃
457 廃土	廃土	廃土-003	陶器	碗	-	(4. 8)		底:ほぼ完	黄白		鉄釉	17 c 初	瀬戸美濃
458 廃土	廃土	廃土-003	陶器	鉢		(5, 4)		底:1/2	淡黄灰		灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
459 廃土	廃土	廃土-003	陶器	小杯		2. 2		底:完	灰褐	唐津	灰釉	17 c か?	肥前
460 廃土	廃土	廃土-017	陶器	天日茶碗	(10.8)			□ : 1/3	暗灰〜暗黄	全面若干被熱	灰釉	17 c 前	瀬戸美濃
461 廃土	廃土	廃土-004	陶器		(12.0)	(7.1)	(2.2)	口:1/10 底:1/3	灰	志野 全面被熱 内面・底面ピントチン痕あり	長石釉	16 c 末〜17 c 初	瀬戸美濃
462 廃土	廃土	廃土-004	陶器	III.	(9, 0)	(4.7)		日:1/4 底:1/5	淡黄灰	底部トチン痕あり	灰釉	16c末	瀬戸美濃
463 廃土	廃土	廃土-004	陶器	<u> </u>	(41.47	(6, 0)	12.27	底:ほぼ完	灰	輪禿皿 高台端部施釉後掻き取り 全面被熱 内面スス付着 底部輪トチン痕あり	灰釉	16 c 末〜17 c 初?	瀬戸美濃
464 廃土	廃土	廃土-004	陶器	III.	(10.2)	(5.4)	(1.8)	口:1/3 底:1/3	灰白	輪禿皿 内面見込み・底部に輪トチン痕あり 内外面一部被熱	灰釉	16 c 末〜17 c 初	瀬戸美濃
465 廃土	廃土	廃土-005	陶器	III.	,	(5, 4)		底:1/4	灰		灰釉	17 c 中	瀬戸美濃
466 廃土	廃土	廃土-004	陶器	ш	(16.8)			□:1/6	淡灰	折縁皿 一部被熱か?	灰釉	18 c 中	瀬戸美濃
467 廃土	廃土	廃土-003	陶器	Ш	(10, 9)	(5, 2)	(2, 9)	口:1/8 底:1/6	灰白	志野 菊皿 全面被熱	長石釉	18 c 中	瀬戸美濃
468 廃土	廃土	廃土-004	土器	Ш	(10, 0)	(4.8)		口:1/6 底:1/10	灰	内外面一部にスス付着		17 c	
469 廃土	廃土	廃土-003	土器	m.	<u> </u>	(6, 6)	<u> </u>	底:1/3	褐			不明	
470 廃土	廃土	廃土-003	土器	Ш	10.4	6.3	2.3	口:1/2 底:完	暗褐〜黒変	内外面にスス付着		17 c 初〜中	
471 廃土	廃土	廃土-004	土器	Ш	(9.2)			□:1/5	褐	外面スス付着		不明	
472 廃土	廃土	廃土-003	土器	.ml	(10.5)	(6.0)	(2.8)	口:1/2 底:1/2	褐	底面「三」の墨書あり			
473 廃土	廃土	廃土-003	土器	Ш	(9.8)	(5, 7)	(2.7)	口:1/4 底:1/8	灰			17 c	
474 廃土	廃土	廃土-004	土器	Ш	(9.5)	(5, 3)	(1.8)	口:1/6 底:1/10	褐	外面スス付着		18 c	
475 廃土	廃土	廃土-004	土器	蓋	13.7			□:2/3	暗褐	外面・内面端部ナデ後ミガキ 内面指頭圧痕あり 摘み部剥離 口縁端部使用による摩滅か?			不明
476 廃土	廃土	廃土-003	陶器	向付		(5. 2)		底:1/4	暗灰一暗褐	絵唐津 内面見込み草文か?	長石釉	17 c 前〜中	肥前
477 廃土	廃土	廃土-004	陶器	擂鉢	(28. 2)			□:1/6	黄灰		錆釉	19 c 初	瀬戸美濃
478 廃土	廃土	廃土-004	陶器	香炉				□:1/8	灰		灰釉	18 c ⊅²?	京・信楽
479 廃土	廃土	廃土-004	陶器	香炉	(12.0)	(8.2)	(5.1)	口:1/3 底:1/2	淡黄灰	鉄釉にうのふ釉 全面被熱 内面見込みに重ね焼痕 脚部貼り付け	鉄釉	18 c 末∽19 c	瀬戸美濃
480 廃土	廃土	廃土-004	土器	内耳鍋	(24.0)	1		□:1/6	褐	胴部に穿孔あり 内外面スス付着			在地
481 廃土	廃土	廃土-004	土器	内耳鍋	(31.4)	(23. 8)	(6.4)	口:1/10 底:1/2	褐	外面一部にスス付着			在地
482 Ⅲ検	土2	±2-016	瓦	丸瓦	16.7	35.0	8.8	胴部一部欠	黒灰	内面一部布目あり			
483 Ⅲ検	土48	±48-067	瓦	軒丸瓦				一部残	黒灰	文様面被熱 スス付着			
484 V検	溝2	溝2-002	瓦	丸瓦			6.3	一部	黒灰	胴部に穿孔 内面布目痕後ナデ 外面削りか?			

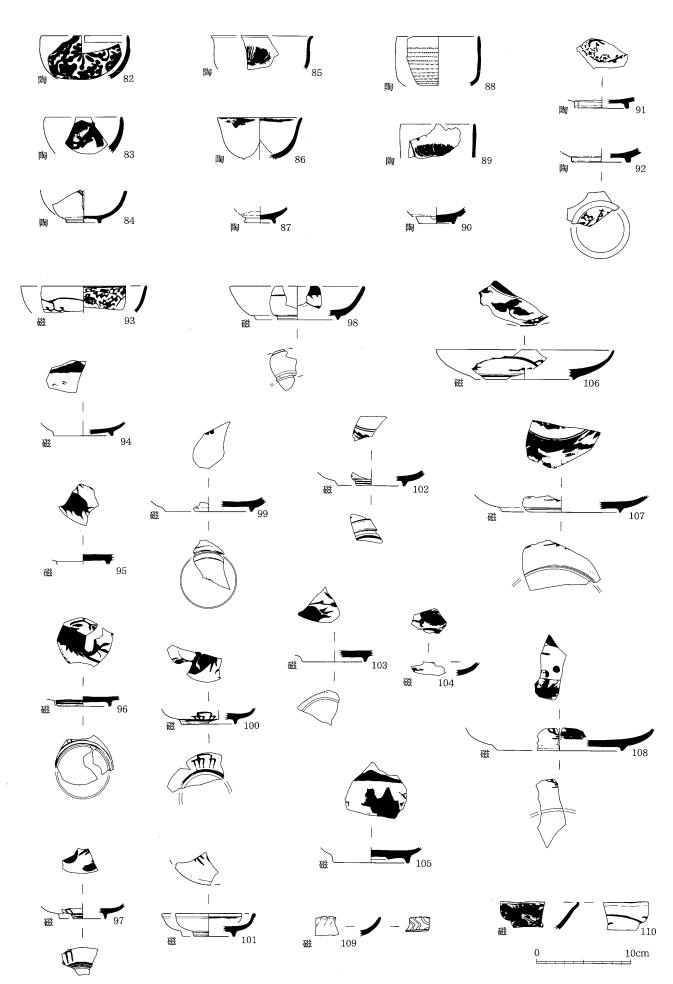




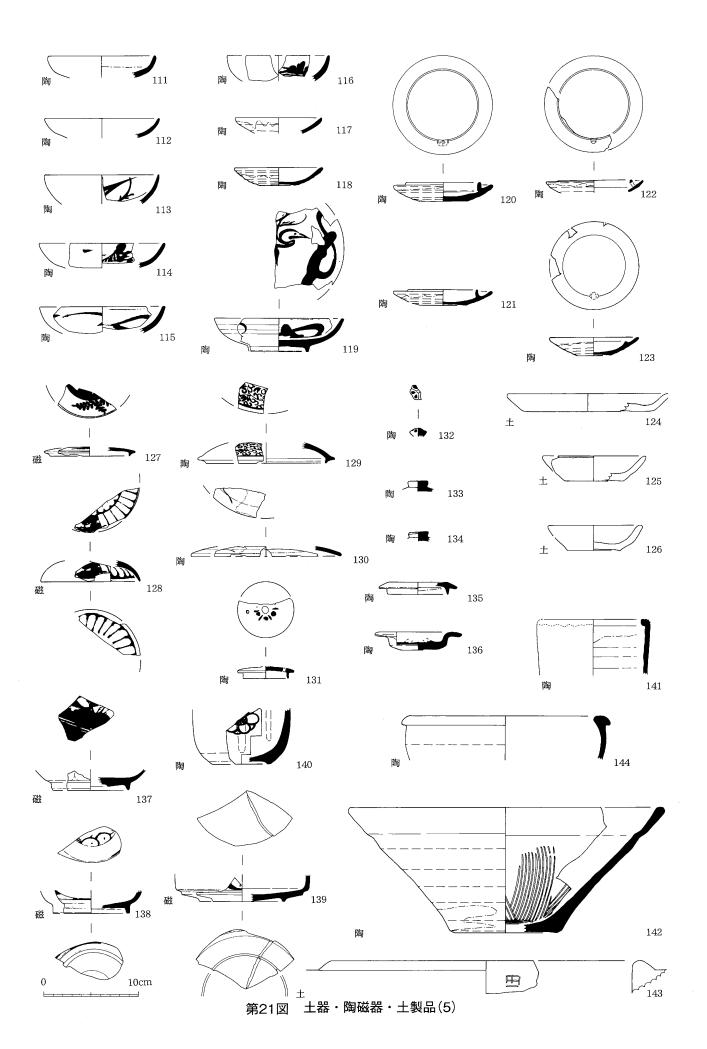
第18図 土器・陶磁器・土製品(2)

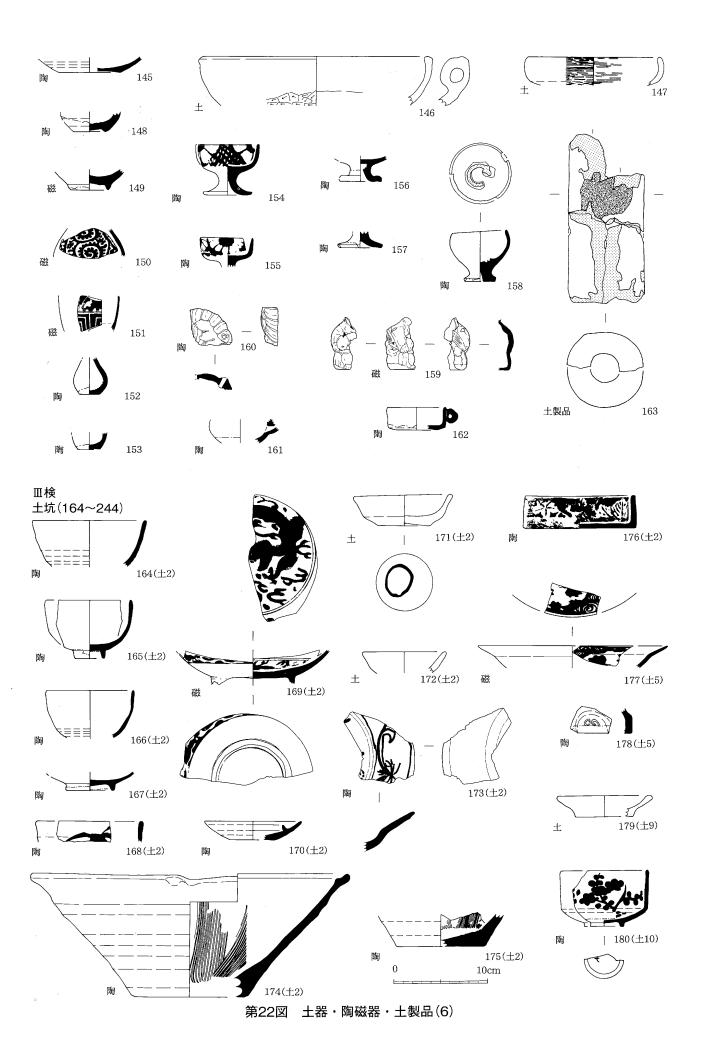


第19図 土器・陶磁器・土製品(3)

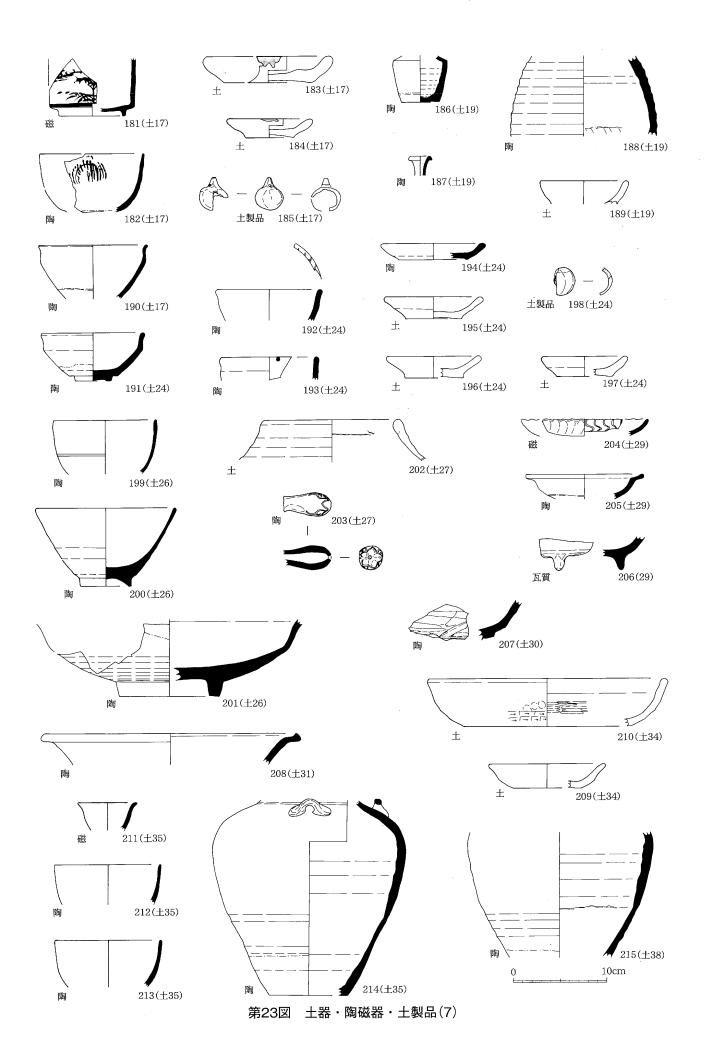


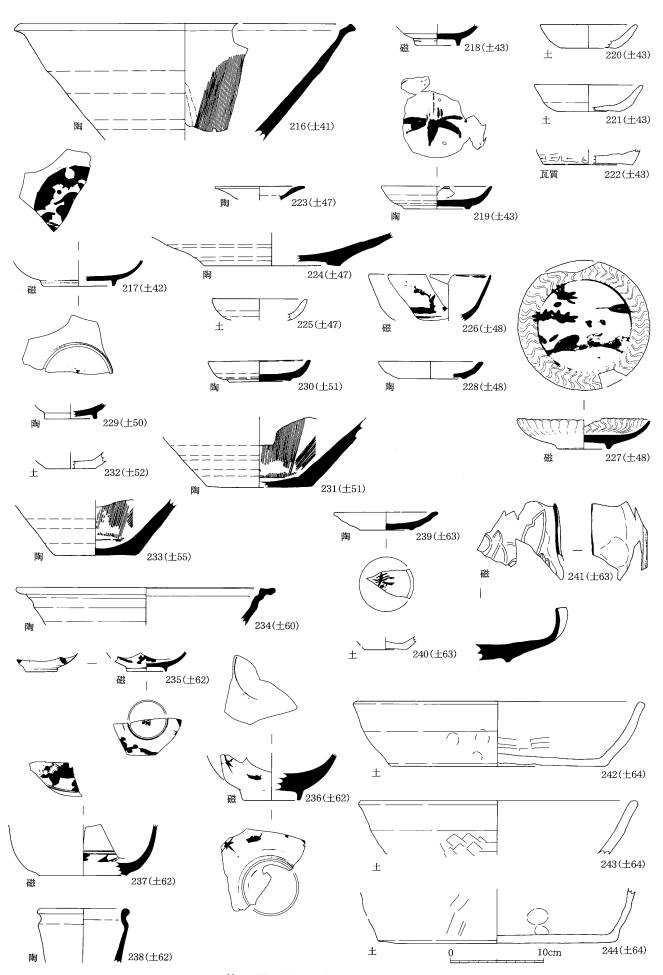
第20図 土器・陶磁器・土製品(4)



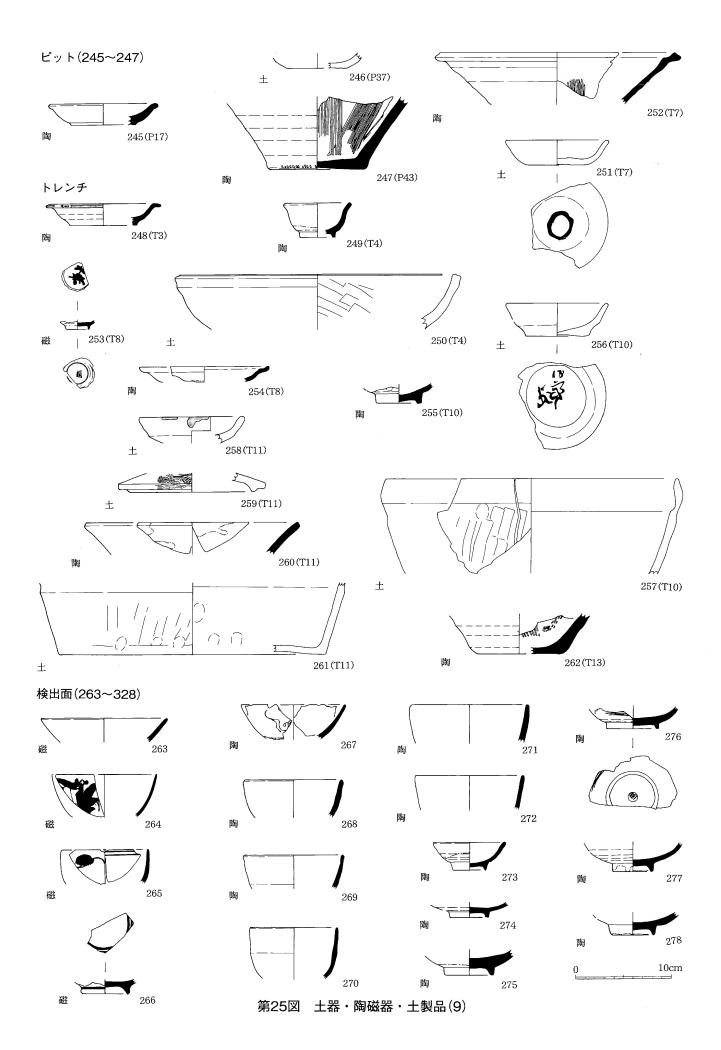


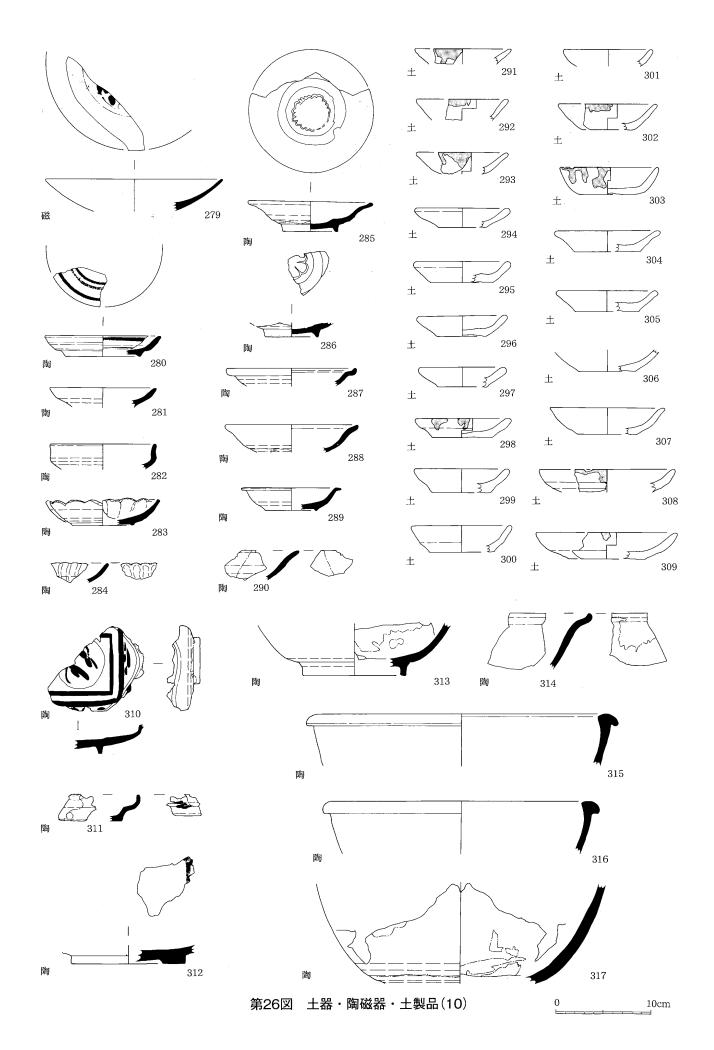
- 56 -

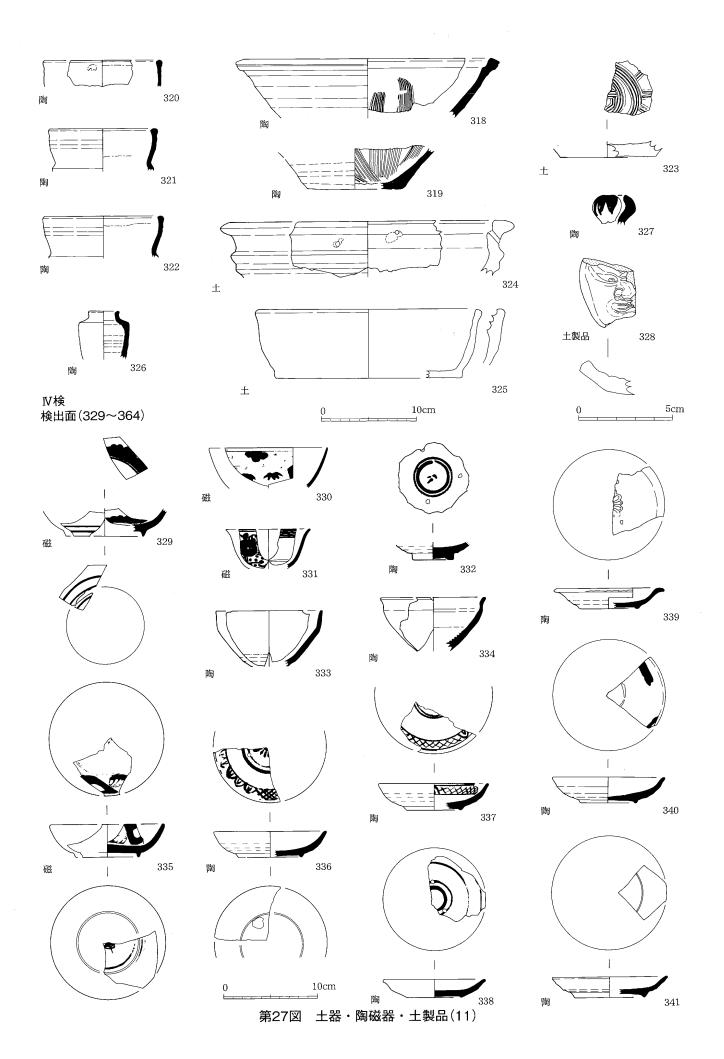


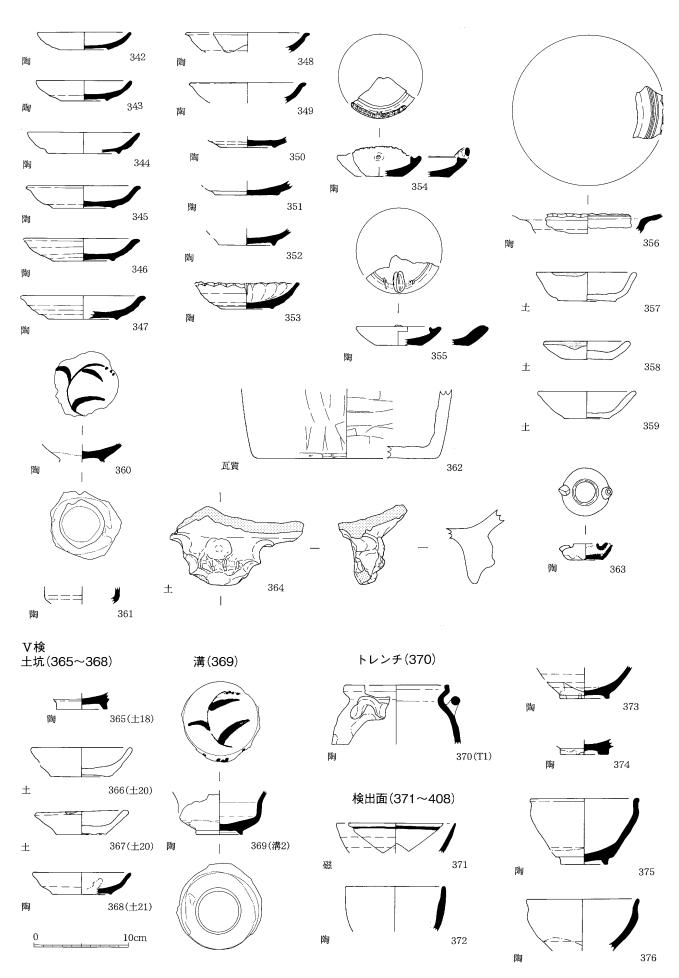


第24図 土器・陶磁器・土製品(8)

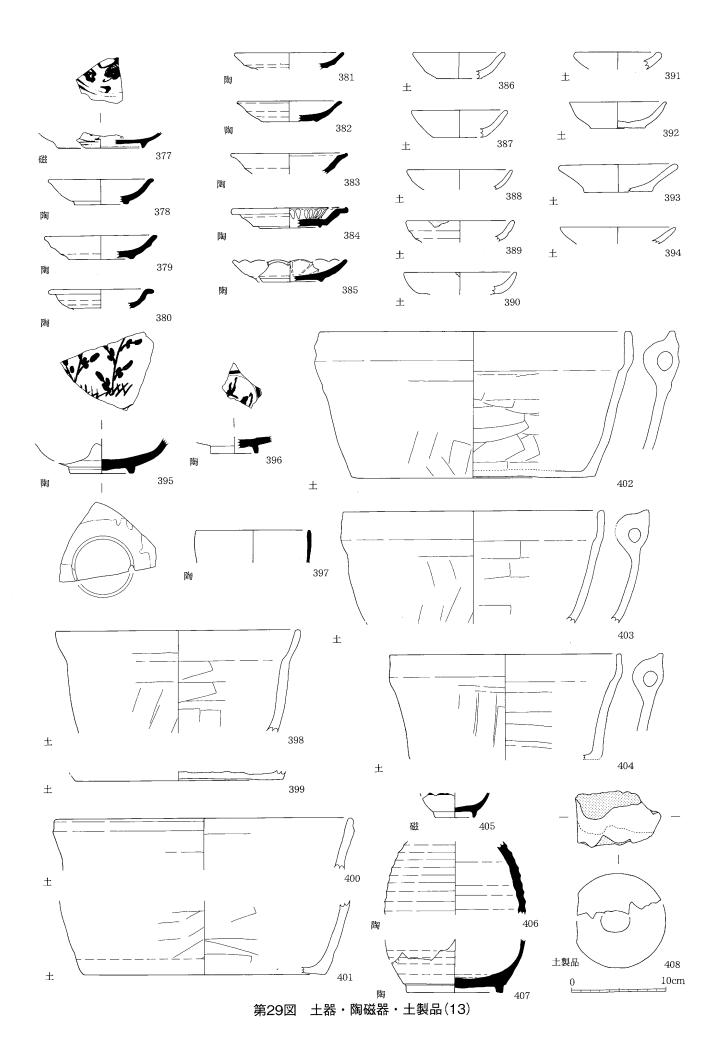


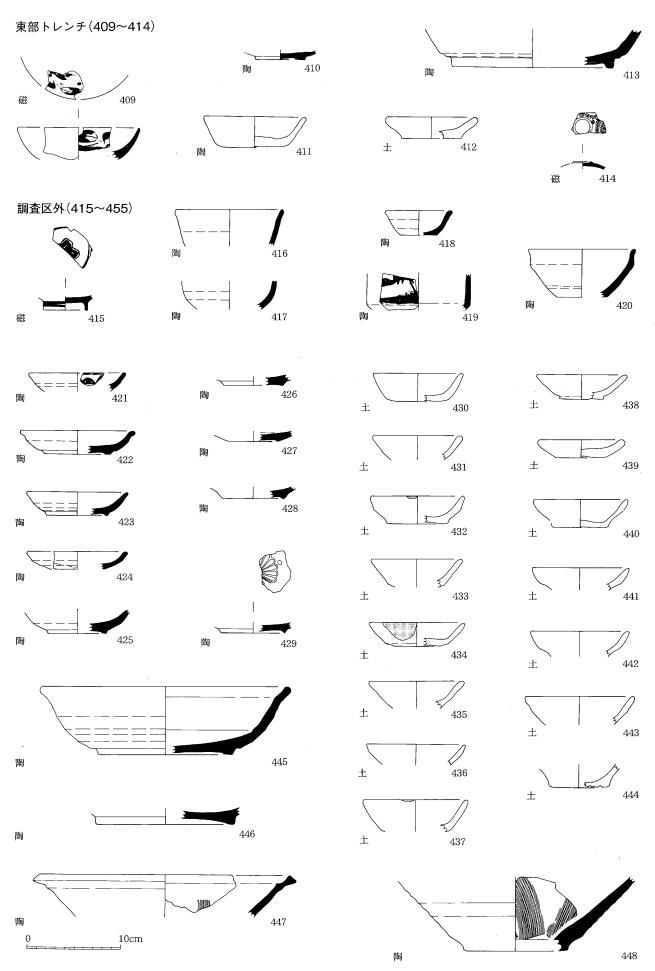




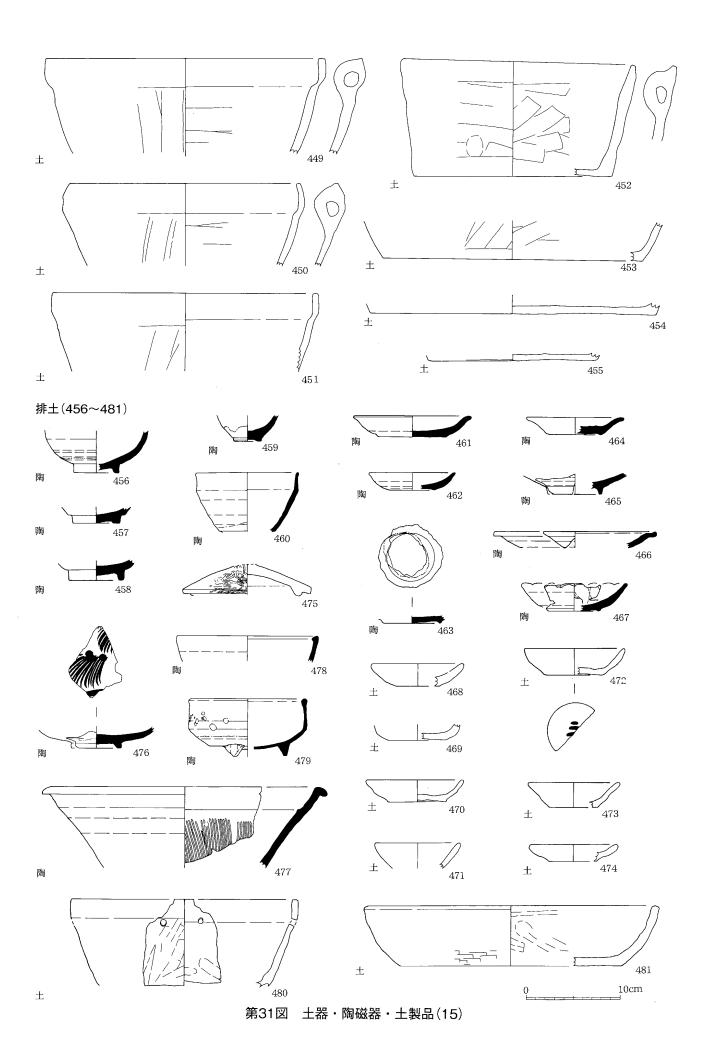


第28図 土器・陶磁器・土製品(12)



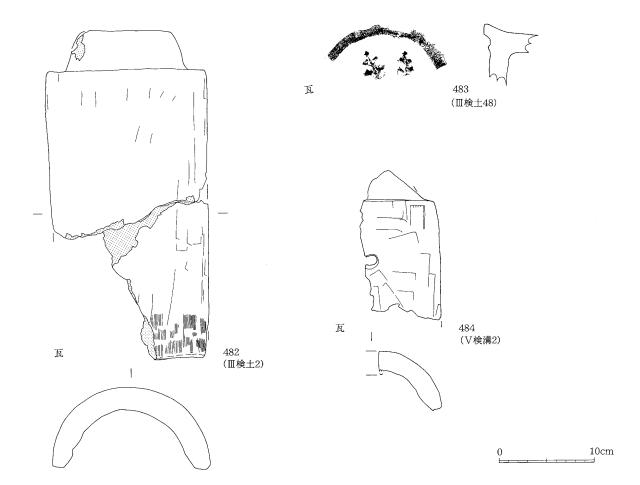


第30図 土器・陶磁器・土製品(14)



- 65 -

瓦(482~484)



2 木製品

(1)出土木製品の概要

今回の調査では、55点の木製品が出土した。これらはすべてⅢ~V検より出土したもので、このうち実測可能な51点について図面を掲載した。層位別の出土量をみると、Ⅲ検25点、IV検8点、V検13点が出土した。出土木製品の種別をみると、漆器製品と木製品がみられる。漆器は漆椀・板類・円板・櫛、木製品は下駄・曲物・円板・鋤・木槌・独楽・櫛・箸・栓・折敷などがみられる。以下、各検出面の様相を述べていく。

(2)第Ⅲ検出面

Ⅲ検からは25点出土した。内訳は、土坑18点・検出面(包含層) 7点である。土坑の中では、土2からが最も多く、10点が出土した。このうち漆器類は4点で、漆椀(1)、円板(2)、板類(3・4)がみられる。1は内面が朱漆、外面は黒漆で1箇所に模様がみられる。2 は、曲物の底板と考えられる円板である。両面と側面の一部には黒漆が残っている。3・4 は膳の側板と考えられる板類で、同一個体と考えられるものである。2 点ともに片面は朱漆の下地に黒漆の重ね塗りで、他面は黒漆の下地に朱漆の重ね塗りがされている。木製品は、円板(5)、栓(6)、下駄(7)、木槌(8)、板類(10)、不明(9)がある。6 の栓は、表面を丁寧に加工してあるため、工具痕は確認できない。上面は、斜めに切断されている。7 は連歯下駄である。歯部は著しく摩滅している。後部中央には、円形の焼印が2箇所残る。土5からは11の漆椀が出土した。外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。外面には草花文が描かれており、底面には朱漆で文字が書かれている。18は、独楽と考えられる。一端を粗く削って尖らせている。19は漆椀である。小片で判然としないが、外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。

(3)第Ⅳ検出面

検出面(包含層)から8点出土した。漆器製品は2点($26 \cdot 27$)、木製品6点($28 \sim 33$)である。26は、漆椀の破片である。内面は黒漆の上に朱漆の重ね塗り、外面は黒漆である。27は両面黒漆塗りの板類である。31は、鋤先である。先端部には刃部が付いていた痕跡がみられる。中央やや上方には、柄部を差し込んだと考えられる 5.5×3.7 cmの長方形の孔がある。

(4)第V検出面

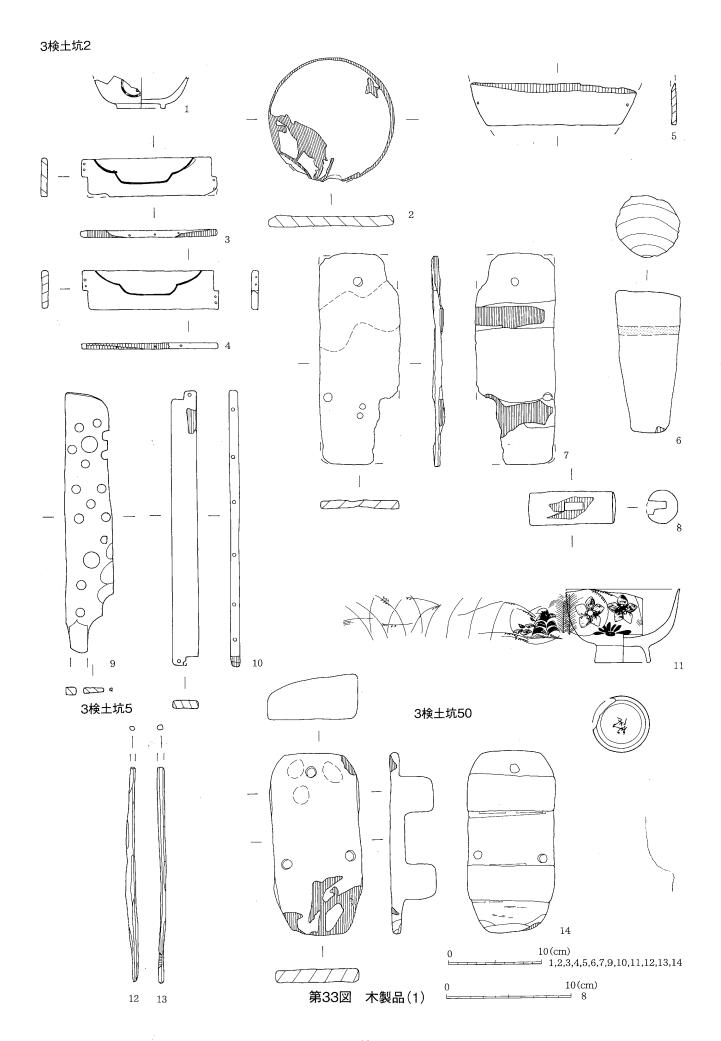
溝1・2、検出面から13点が出土した。漆製品は37・38・46の3点がみられる。37は、漆椀である。外面は黒漆、内面は朱漆に塗り分けられている。外面には、丸に桔梗文の文様が3単位みられる。38は、箱類の部品と考えられる板状の製品である。両面ともに黒漆が塗られている。46は漆椀の小片である。外面は黒漆で一部に文様がみられる。内面は黒漆に朱漆を重ね塗りしている。木製品は10点出土した。36は用途不明の板状の製品である。1枚の板を途中まで割き、その間に他の板材を差し込んでいる。表面の一部には墨書が残る。39は板状の製品で、表面2箇所には小孔がある。形状から折敷の破片と考えられる。41は樽の注口と考えられる。

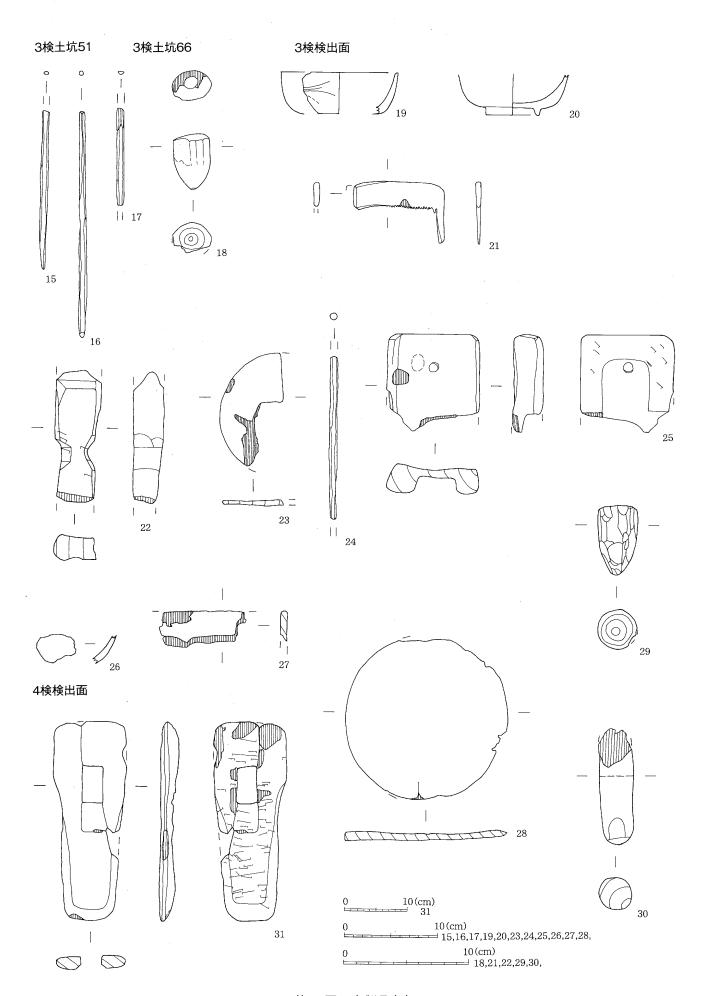
(5)東部トレンチ

東部トレンチからは5点を図化した。46は、内外面ともに黒漆が塗られた漆器製品である。椀形をしているが高台はなく、一部に小孔が穿たれていることから、杓子と推定される。48は、栓である。上面と側面には明瞭な加工痕が観察できる。49~51は下駄である。形状はすべて連歯下駄である。50には一部に被熱痕が観察でき、51には明瞭な指頭圧痕が観察できる。

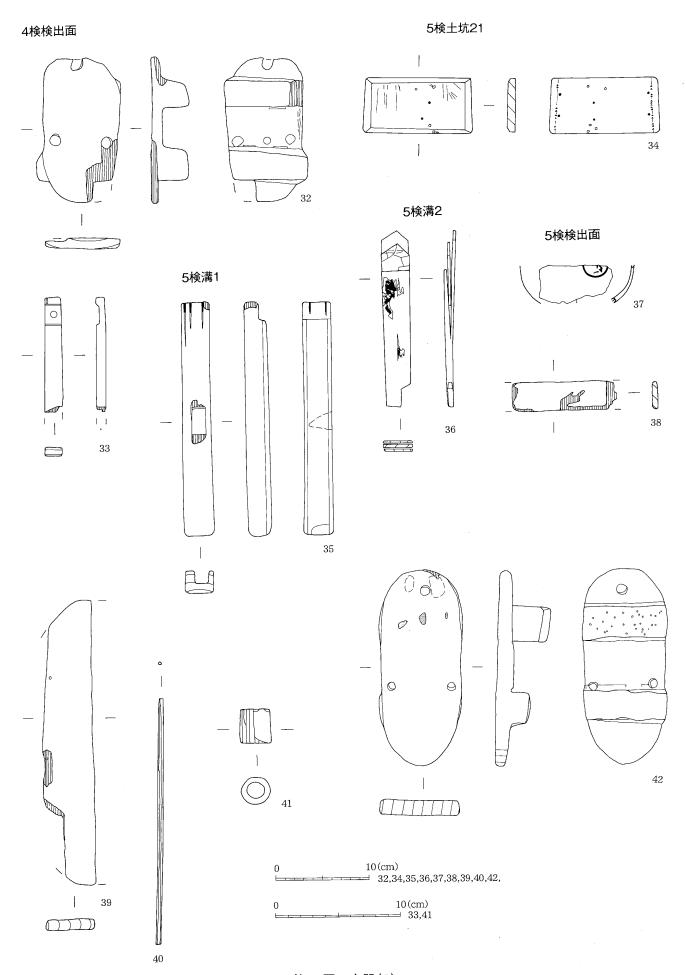
第3表 出土木器一覧表

第3表	出土	木器-	- 覧表			1.40			
⊠ N₀.	検出面	遺構名	整理番号	器種分類	- 手法	長さ・径 (cm)	幅 (cni)	厚さ・高さ (cm)	備考
1	III	土2	A-3-14	漆椀	不明		— (CIII)		内面朱漆、外面黒漆。外面に紋様あり。
									両面黒漆塗り。部分的に被熱し炭化してい
2	Ш	土2	A-3-16	円板	柾目	13. 2		1.3	る。 A-3-13と同様のもの。片面は下地朱漆に黒漆
		_				()			涂り よう片面け下地里漆に朱漆涂り 里漆
3	Ш	土2	A-3-15	板類	柾目	(14. 5)	(4. 0)	1 0.7	面に紋様あり。両端に竹釘各2箇所。 片面は下地朱漆に黒漆塗り、もう片面は下地
									黒漆に矢漆塗り 黒漆面に靫棲あり 両端に
4	<u> </u>	土2	A-3-13	板類	板目	14.3	4. 1		竹釘各2箇所。
5	Ш	土2	A-3-9	円板	柾目	17. 4		0. 1	欠損
6	Ш	<u>±2</u>	A-3-11	栓	板目	6.8		15. 0	 一部欠損、歯部はかなり摩滅。後部中央に2箇
7	Ш	土2	A-3-17	下駄	柾目	22. 3	8.4		所の焼印あり。
8	Ш	土2	A-3-10	木槌	不明	2. 6			柄部欠損
9	Ш	土2	A-3-8	不明	柾目	(7.7)	5.0	0.8	
10	Ш	土2	A-3-12	板類	柾目	28. 2	2. 7		両端2箇所、木口部6箇所に竹釘あり 外面黒漆、内面朱漆、外面に草花の模様、底
11	Ш	土5	A-3-18	漆椀	不明				外囲無徐、四囲木徐、外面に早化の模様、広 裏に朱漆で文字。
12	Ш	土51	A-3-21	箸	板目	23. 9	0.7	0.5	
13	Ш	土43	A-3-19	箸					
									連歯下駄。前・後歯ともに左側の摩滅が著しい。指頭圧痕あり。後部裏端部は斜めに加
14	Ш	土50	A-3-20	下駄	柾目	19. 2	9. 1	1.4	・ 3日時代上次のファ。1次中表細印がよ所のパー加 上。
15	Ш	土51	A-3-21	箸	板目				
16	m	土51	A-3-21	箸	板目				
17	Ш	土66	A-3-22	箸	不明				
18	Ш	土66	A-3-23	独楽	les m	(0, 0)	(4.0)	4.4	 小片、外面黒漆、内面朱漆
19	Ш	検	A-3-6	漆椀	柾目	(8.0)	(4. 9)		外面黒漆、内面朱漆
20	m	 検	A-3-7	漆椀	不明	底径:5.7			
21	m	検	A-3-5	櫛	不明	(7. 1)	4. 2	0.5	歯部欠損、黒漆
22	Ш	検	A-3-3	柄杓	不明	10.5	3.6	2. 3	柄杓の柄の留具
23	Ш	検	A-3-2	円板	柾目	12. 2		0. 5	
24	Ш	検	A-3-4	箸	板目	17. 4	0.8		一端欠損、加工痕明瞭
25	Щ	検	A-3-1	下駄	柾目	(10.3)	9.1		1/2残存、角面取り、
26	IV	検	A-4-3	漆椀か	不明	(4. 2)	(3.1)		内面朱漆、外面黒漆。
27	IV	検	A-4-2	板類	柾目	(8.8)	(3, 7)	0.0	両面黒漆塗り。
28	IV	検	A-4-1	円板	柾目	18. 0	1.0	1.0	
29	IV	検	A-4-5	不明	<u> </u>	(9. 2)	1, 3	0.6	加工痕明瞭
30	IV N	検	A-4-6	栓 鋤先	芯持ち 柾目	5. 5	12.0	3. 2	が上上が交が用水
31	IV IV	<u>検</u> 検	A-4-8 A-4-7	下駄		31. 4 15. 2	12. 0 7. 9		連歯下駄。
33	IV IV	検	A-4-4	不明	柾目	(9. 2)	1.3		<u> </u>
34	V	検	A-5-11	板類	柾目	11. 3	5. 8		竹釘数箇所
35	v	溝1	A-5-13	不明	柾目	24. 9	3. 0	2. 5	
	***			7.00		10.0	0.1	1.0	墨書あり、1枚板を途中まで剥いで、他の板
36 37		溝2	A-5-14 A-5-12	不明 漆椀	框目 不明	18. 6 11. 8	3. 1	1. 2	対を差し込んでいる。 外面模様3単位
38	V	<u>検</u> 検	A-5-12	板類	<u></u> 杯目	(11.0)	(3. 2)		表・裏ともに漆
39	V	検	A-5-3	折敷か	柾目	30. 4	5. 4	1. 1	27 32 37 - 147
40	V	検	A-5-1	箸	柾目	26. 1	0. 5		加工痕明瞭
41	V	検	A-5-7	樽の注口	不明	2. 2		厚0.4・高2.6	
								, , ,	前歯欠損による釘による補修痕、指頭圧痕あ
42	V	<u>検</u>	A-5-9	下駄	柾目	20.7	8.3	1.6	(*)
43	V	検	A-5-10	下駄 不明	柾目 板日	20. 9	11. <u>5</u> 7. 5	1. 8 5. 0	
44 45		<u>検</u> 検	A-5-2 A-5-8	不明	板目 柾目	27.6	3. 6	2. 2	
45	v	199				۵۱.0	ა. 0		 内面:朱漆下塗りに黒漆、外面:黒漆、外面
46	V	検	A-5-5	漆椀	不明	-	_		に模様あり、
47	T	東T	A-東T-5	漆椀	不明	-		-	
	Ţ	東T	A-東T-1	栓	板目	3.8		8.5	
48	_	1 TET	A-東T-2	下駄	柾目	21. 2	7.3		連歯下駄、全体的に摩滅著しい 連歯下駄、一部炭化
49	T	東T		1 HT			8.2	1.5	DESCRIPTION DOWN TO A STREET THE
49 50	Т	東T	A-東T-3	下駄	柾目	20.3			
49	T T	東T 東T	A-東T-3 A-東T-4	下駄	柾目	20. 3	7. 9	1.3	連歯下駄、指頭圧痕あり。
49 50	Т	東T	A-東T-3					1.3	

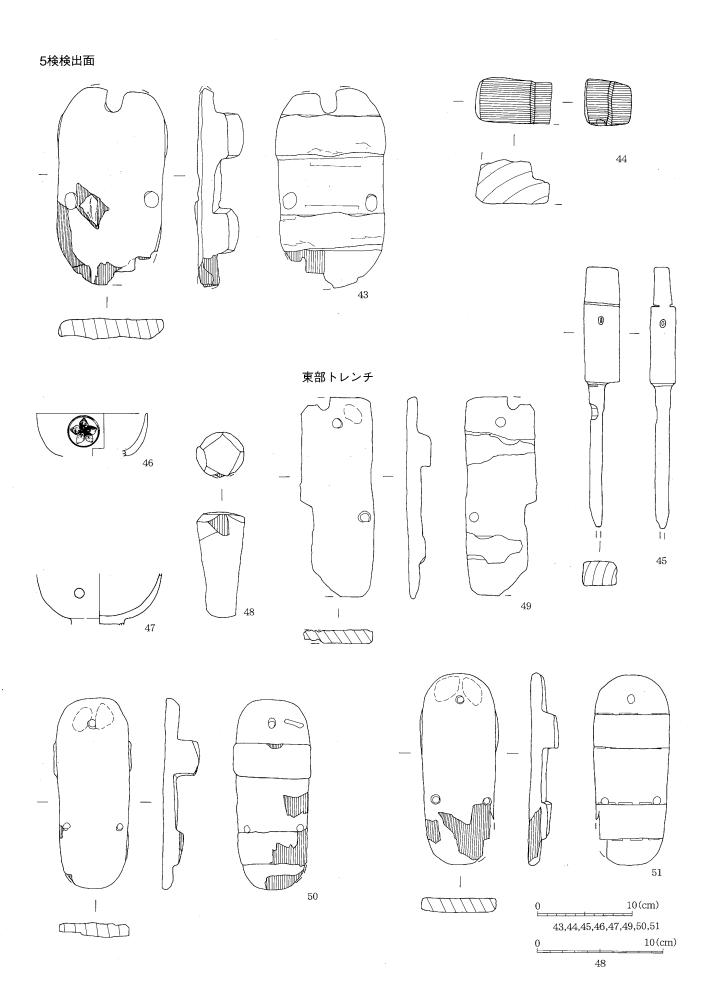




第34図 木製品(2)



第35図 木器(3)



第36図 木製品(4)

3 石製品・骨角製品

(1)石製品

本遺跡では各検出面を通じて総計47点の石製品が出土した。このうち、比較的残存状況の良好なものを図化し、21点の石製品を掲載した。器種は砥石や硯、搗臼など日用品がほとんどであったが、双六駒や碁石などの遊戯具も少量出土している。また掲載はしなかったが石臼、砥石、硯、水晶なども出土している。これらは総じて江戸期に属すると思われる。以下検出面ごとに概要を記述していく。

第Ⅱ検出面

12点の石製品が出土した。内5点を図化した。1は大型の砥石である。3面使用しており、残る1面にはノミの痕が残されていた。2の砥石とほぼ同じ法量であり石材も同一と思われるため、同一個体である可能性も考えられる。3の砥石は砂岩で作られた砥石である。未使用であった下面等に石を切り出した際のノミの痕がみられた。

4は恐らく硯であると思われる。石材は粘板岩であり、摩滅が著しい。上面上端には横位に沈線が入っている。器面には擦痕が残っていた。5は頁岩で作られた硯である。激しく被熱し、白色化している。硯池部分にはわずかに墨が付着していた。

第Ⅲ検出面

計21点が出土した。第Ⅱ検出面同様砥石が多く出土している。また、数点ではあるが黒曜石や水晶の破片、石臼や搗臼等も出土している。これらの内11点を図化して提示した。

砥石は数多く出土しており、実に12点の砥石が見られた。この中で図化したものが $7\sim9$ 、 $12\cdot1305$ 点である。 $8\cdot9$ は上州戸沢産、現在の群馬県甘楽郡南牧村産の砥石である。戸沢産砥石は凝灰岩を使用し、6面にゴザ目が入れられているのが特徴である。過去に行なった松本城下町跡本町4次調査では未使用のまま被熱し廃棄された戸沢産砥石が大量に出土したことから、この本町4次調査の調査地が戸沢産砥石問屋であったことが判明している。今回出土している $8\cdot9$ の砥石はともに使用された状態で出土しているため、恐らく調査地で消費されたものであろう。 $12\cdot13$ は泥質凝灰岩製の砥石である。少々赤みを帯びた泥質凝灰岩を使っており、その石材から京都産の砥石であると推測される。磨耗が激しいためかなり使い込まれたのであろう。

硯は6の1点のみ出土している。頁岩製の硯であり、硯面にはわずかに墨が残っている。なお墨堂は使用 により若干窪んでいる。

14・15はともに搗臼である。14の搗臼は大型のものであり、上面に加えて下面も使用している。15は14に比べて小型の搗臼である。こちらは片面のみ使用している。双方ともに溶結凝灰岩で作られている。

11は双六の駒と思われる。凝灰岩で作られた径約3 c m、厚さ0.5 c mの駒である。表面に模様等はみられず、多少摩滅しているものと思われる。16は碁石である。材質は珪板岩、いわゆる那智黒石であると思われ、やや楕円に近い扁平な形をしている。10は用途不明の石製品である。長さ約10 c m、幅0.7 c mの棒状を呈しており、石英で作られている。石英表面は筋状に削られており、全面に透明釉のような釉が掛けられている。釉には一部模様のようなものが見受けられる。その形状からして笄である可能性が高いが、類例もなく断定することはできない。

第Ⅳ検出面

第IV検出面は石製品の出土が少なく、4点のみ出土した。その中で3点の遺物を図化した。17・18は砥石である。17は凝灰岩を用いており、上面は前後2方向から使用している。残存している5面全てに使用が認められ、摩滅している。材質などから上州戸沢産の砥石である可能性が高い。18は泥質凝灰岩製の砥石である。上面上部には横位に、下部には縦位に擦痕がみられ、中央には削れたように窪んだ擦痕が残っている。

下面には上部に斜めに何らかの痕跡がみられる。材質から京都産である可能性が高い。

第V検出面

第V検出面からは10点の石製品が出土しており、そのほとんどが砥石である。19は砂質泥岩を使った砥石である。4面に使用痕が認められる。使用後に被熱したらしく、一部が煤けて黒く変色している。20は溶結凝灰岩の砥石である。4面使用しており、使用後に被熱している。

21の石製品は暖めて懐炉のようにして使われた温石であると思われる。石材は滑石であり、幅5.7 c mの長方形を呈している。上端中央には径0.7 c mの孔が空けられている。下面には縁から0.3 c mの位置に縁に沿って沈線状の痕が残されている。石材が比較的軟らかいためか全面至る所に擦痕が見られる。この擦痕が使用によるものなのか後に付いたものなのかは定かではないが、一定方向に入る擦痕などは恐らく使用時についたのであろうと考えられる。

(2)骨角製品

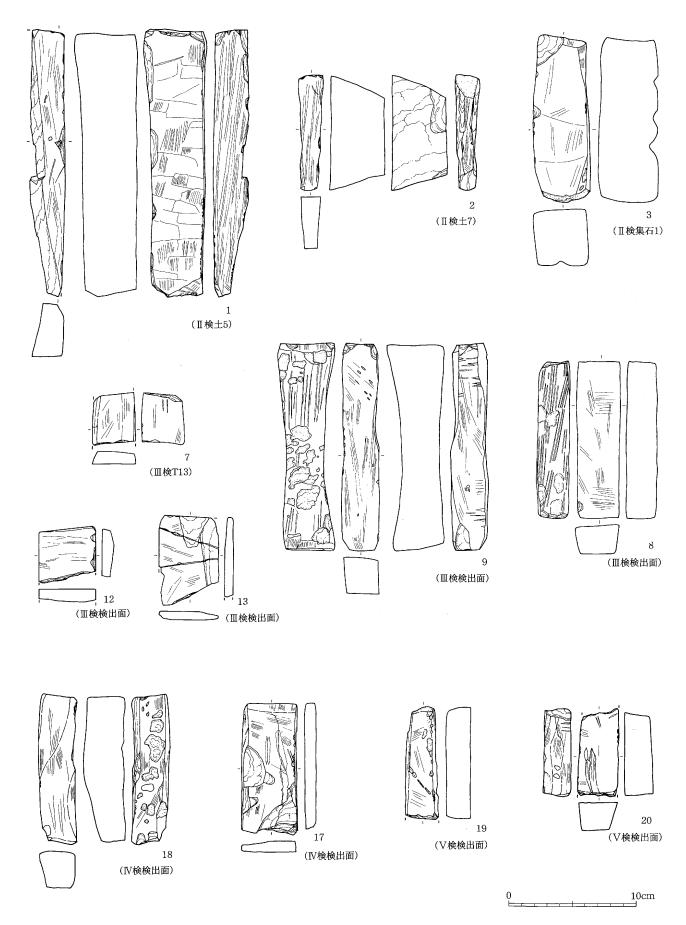
後述する骨角類と違い、明らかに製品として使用されていたものを骨角製品として取り扱った。骨角製品は22・23・24の3点のみが出土している。22は鹿角製であり、径約2 cm、厚さ約0.5 cmの円盤型を呈している。表面には特に模様等はみられない。法量や形状から恐らく双六の駒であると思われる。23は廃土中より見つかったので出土位置等の詳細は不明である。法量は22とほぼ同じであり、形状も酷似している。そのためこれも同じく双六の駒であると思われ、22と関連している可能性も考えられる。種は特定できないが、動物の角で作られた物であろう。24はボタンであろうと思われる。裏面中心部には穿孔がみられるが、U字状に入れられており表面までは貫通していない。穿孔中心はブリッジ状であると思われるが、欠損しているため詳細は不明であった。

第4表 石製品一覧表

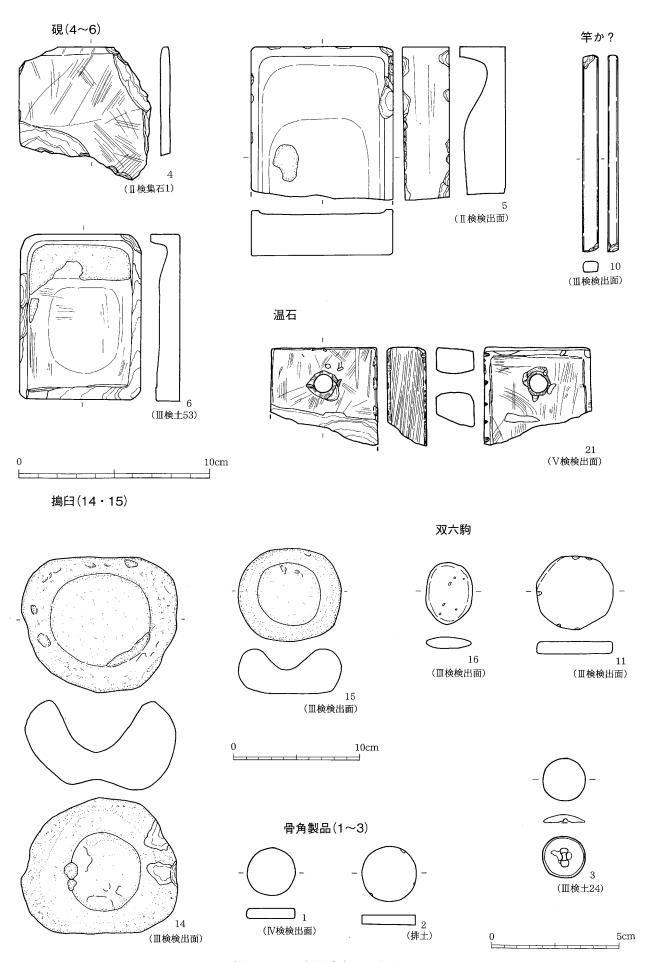
男4	衣 1	口裂品	- 見衣	_							
⊠No.	検出面	出土遺構	往記	種別	・長さ	法量(cm 幅) 厚さ	重量 (g)	残存度	石材	# 15 m
1	Ⅱ検	土5	土5-002	砥石	(21.3)	5. 1	(2.6)	390	ほぼ完	頁岩	2と同一個体か?ノミの痕あり
2	Ⅱ検	土7	土7-003	砥石	(9.2)	4.5	(2.1)	106	一部残	頁岩	1と同一固体か?
3	Ⅱ検	集石1	集石1-004	砥石	(13.4)	4.5	4.5	494	ほぼ完	砂岩	ノミの痕あり
4	Ⅱ検	集石1	集石1-005	硯	(7.0)	(6.9)	0.5	44	一部残	粘板岩	摩滅著しい
5	Ⅱ検	検出面	検出-010	硯	(8, 2)	7.5	2.5	26	上半残	頁岩	被熱により白変
6	Ⅲ検	土53	土53-007	硯	8.9	6.4	1.6	150	一部欠	頁岩	
7	Ⅲ検	T 13	T 13-012	砥石	(4. 2)	3.4	1.0	26	一部残	凝灰岩	戸沢産か?
8	Ⅲ検	検出面	検出-013	砥石	12.5	4. 4	2.4	192	ほぼ完	凝灰岩	戸沢産
9	Ⅲ検	検出面	検出-014	砥石	16.6	3. 0	4.6	336	ほぼ完	凝灰岩	戸沢産
10	Ⅲ検	検出面	検出-015	笄か?	(10, 5)	0. 7	0.6	14	ほぼ完	石英	石英のような石材に釉がかかっている 一部模様あり
11	Ⅲ検	検出面	検出-016	双六駒	2. 9	3. 1	0.5	96	完	凝灰岩	
12	Ⅲ検	検出面	検出-017	砥石	(4.5)	4. 5	1.1	32	一部残	泥質凝灰岩	京都産
13	Ⅲ検	検出面	検出-017	砥石	(7. 2)	4. 7	0.7	36	一部残	泥質凝灰岩	京都産
14	Ⅲ検	検出面	検出-019	搗臼	12. 4	10.9	7.2	1030	完	溶結凝灰岩	両面使用
15	Ⅲ検	検出面	検出-019	搗臼	8. 2	7.4	3. 7	256		溶結凝灰岩	片面使用
16	Ⅲ検	検出面	検出-021	碁石	2. 5	1.8	0.5	10	完	珪板岩	那智黒
17	IV検	検出面	検出-003	砥石	(12.1)	3. 3	3.0	172	一部欠	凝灰岩	戸沢産か?
18	IV検	検出面	検出-003	砥石	10.5	4.5	0.9	78	一部欠	泥質凝灰岩	京都産か?
19	V検	検出面	検出-008	砥石	8. 9	2. 7	2.0	128	一部欠	砂質泥岩	一部被熱により黒変
20	V検	検出面	検出-009	砥石	(7.0)	3. 0	2. 2	92	一部残	凝灰岩	
21	V検	検出面	検出-006	温石か?	(5. 2)	5. 7	2. 1	126	一部残	滑石	中心に穿孔あり

第5表 骨角製品一覧表

⊠No.	検出面	出土遺構	注記	種別	長さ	法量(cm) 幅) 厚さ	重量 (g)	残存度	石材	備考
7.75	San Care	4 4	1.7827 1.77	11.0	及り	門田	/F-C	. 101		C. 1814 F. B. B.	
1	IV検	検出面	検出−004	双六駒	1.9	1.9	0.4	2	完	鹿角	
2		廃土	廃土	双六駒	2.2	2. 2	0.4	4	完	角	
3	Ⅲ検	土24	土24-001	ボタンか?	1.6		0.3		ほぼ完	鹿角	



第37図 石製品(1)



第38図 石製品(2)・骨角製品

4 鉄製品

今回の調査では538点の鉄製品が出土した。内311点は鉄滓である為、製品の出土は227点となる。これら 鉄製品のうち残存状態の良いものを中心に84点について図化掲載することとした。

検出面ごとにみると I 検・11点、II 検・75点、III 検・114点、IV 検・13点、V 検・6点と III 検が突出して多く出土しており、次いで II 検が多くなっている。比べて鉄滓は II ・ III ・ V 検でのみ出土しており、総数 311点(9,194 g) である。

なお、文中では図化提示したものを実○、拓本提示したものを拓○、図化できなかった資料をID○として区別させていただいた。

(1)鉄製品

先にも述べた通り、総数217点の鉄製品が出土している。器種をみるとまず目に付くのは銭貨であり、39%にあたる85点が出土している。中でも寛永通宝は総数61点出土しており、今回の出土銭の72%を占めている。寛永通宝はほぼ全て一文銭であり、1点のみ背に波型のある四文銭が出土している。また、寛永通宝の他に輸入銭の類も多く見られ、開元通寶(1点)・東元重寶(1点)・宋通元寶(1点)・祥符元寶(1点)・祥符通寶(1点)・天聖元寶(1点)・皇宗通寶(2点)・元豊通寶(4点)・元祐通寶(2点)・紹聖元寶(2点)・聖宋元寶(1点)・政和通寶(1点)などが出土している。今回出土した銭貨のうち、最古銭は開元通寶の621年、最新銭は文久永寶の1863年である。また、少数ではあるが明治期の半銭通貨なども出土した。

銭貨に次いで多くみられたのは釘と煙管である。釘は62点出土しており鉄製品の28%を占めている。長さはまちまちであるがほとんどが角釘であり、頭巻釘もしくは切釘であったと思われる。煙管は20点(9%)出土している。総じて羅宇煙管であり、雁首は13点、吸口は7点出土している。その他鎌、鉈、鋏、簪、杓子、風鈴、火打ち金具等の日用品や鑿、鎹等の大工道具が出土するなど、多種多様な金属製品がみられる。

第 I 検出面

第 I 検出面からは銭貨4点、煙管2点、釘3点、風鈴1点、留め金具1点の計11点が出土した。銭貨の内2点は明治期の半銭であり、明治15年・明治8年の銘がみられる。残る2点は寛永通寶である。煙管は2点出土している。

第Ⅱ検出面

第 II 検出面からは75点の鉄製品が出土した。内訳は釘35点、銭貨11点、留め金具5点、鎌4点、刀身3点、 鎹1点、楔・鏨1点、煙管1点、小柄2点、把手2点、ナイフ1点、鉈1点、鑿1点、鋏1点、火箸1点、不明5点で ある。釘は35点が出土している。やはりほとんどが角釘である。銭貨は11点出土した。多くは寛永通寶で あるが文久永寶と半銭硬貨が1点づつ出土している。半銭硬貨は明治期のものであるが、検出面撹乱範囲中 から出土しているため上層からの混入品と思われる。寛永通寶は総じて一文銭であったが拓5のみ背に文の 字がみられた。

その他日用品として鎌、鉈、火箸、鋏、鎹、楔、留め金具などもみられた。鎌は計4点出土している。内 2点は土18からの出土であり、様相も酷似しているため同一個体である可能性が高いように思われる。鋏は ID78である。中心付近に穴を持つが、先端の幅が広くなっているため鉄を挟む金鋏である可能性が高い。

また、武具として刀身、小柄、ナイフが出土している。刀身は破片のみであるため全容は判断しがたいが、 打刀の刀身であると思われる。小柄は2点出土している。実13は小柄の柄である。断面三角の筒状を呈して おり、端部には丸い筒状の装飾が施されていたと考えられる。

第Ⅲ検出面

第Ⅲ検出面からは114点の鉄製品が出土している。半数以上が銭貨であり、実に62点の銭貨が出土している。銭貨の中でも特に多いのはやはり寛永通寶であり、77%にあたる48点が出土している。寛永通寶はそ

の字体により大きく2分されるが、古寛永通寶は41点、新寛永通寶は6点みられた。中でも特に拓13~19は 土48からまとまって出土しており、7枚の銭貨が重なるようにみられた。土48は柱穴であるとみられるため 埋納銭の類とは考えにくいので、まとめられた銭貨がそのまま埋没したものであろうと考えられる。寛永通 寶以外に宋銭も多く出土しており軋元重寶、元豊通寶、皇宗通寶、紹聖元寶、祥符元寶、祥符通寶、聖宋元寶、 政和通寶、宋通元寶、天聖元寶などが出土している。中でも拓50~57は全て土54からの出土であり、土48 同様連なった状態で出土している。こちらは出土状態から備蓄銭である可能性も考えられる。

その他釘、煙管、鋏、鎌、火箸、火打ち金具、笄、小柄、匙なども出土している。中でも釘は最も多く、21点出土している。全て角釘と思われ、頭を潰した釘が多い。次いで多いのは煙管である。煙管は全て羅字煙管であり、雁首が8点、吸口が5点出土している。雁首は全てに補強帯がみられる。鎌は土2から出土している。長さ45cm、太さ2,5cm程の柄に刃部がつけられた状態で出土した。ID227はその一部であると思われる。実7はほぼ完形の火打ち金具である。両端が反り上がるような形状を呈しているため、ねじり鎌式の火打ち金具であると考えられる。実6は和鋏であると思われる。中央より割れてしまってはいるが、ほぼ完形であり若干柄の長い和鋏であると考えられる。

第Ⅳ検出面

第IV検出面では13点の鉄製品がみられた。点数も少ないためか器種も少なく、銭貨3点、煙管2点、釘2点、火箸1点、小柄1点、刀子1点、留め金具2点、鑿1点であった。銭貨は全て輸入銭で、元祐通寶2点と開元通寶1点である。煙管は双方とも吸口であった。

第V検出面

第V検出面では元豊通寶、煙管、楔・鏨、鑢、鑿、火打ち金具の6点が出土している。実23は棒状の鉄製品である。断面角状の製品の先端が潰されて細くなっていた。恐らく楔か鏨であると思われるが詳細は定かではない。実8は完形の火打ち金具である。いわゆる山形の火打ち金具で把手部には木質物が付着していた。使用の便をよくするため把手部を木製にしていたのであろうと考えられる。

(2) 鉄滓

今回の調査では総数311点、総重量9,194 g の鉄滓が出土した。各検出面の出土量は II 検4,586 g、III 検229 g、V 検5,308 g であり、 II・V 検に集中している事がわかる。以下それぞれについて概要を述べたいと思う。

第Ⅱ検出面

4,586 g の鉄滓が出土した。各遺構の内訳は検出面:169.9 g、土18:2239.3 g、P 25:504.2 g、P 26:352.7 g、P 27:390.8 g である。土18をはじめP25・26・27は調査区南西の隅に集中しており、付近には鞴の羽口が出土している土17があるため、この付近の遺構一体として鍛冶関連遺構であると考えられる。

第Ⅲ検出面

229.7 g と少数ではあるが鉄滓がみられた。出土した遺構は土17・24に限られており、両遺構ともに調査区中央に集中しているため、付近を中心に鍛冶遺構が存在した可能性も考えられる。

第V検出面

鉄滓の出土量が最も多く、4969.2gの鉄滓がみられた。出土遺構は土6、トレンチ1・2の他は検出面で発見されており、検出面での出土量が4893gと最も多い。検出面出土の鉄滓は全て調査区北側の流路内から出土している。トレンチ1・2も流路内に設定したトレンチであるため、調査区片側の流路からは4931.7gの鉄滓が出土したこととなり、第V検出面出土鉄滓のほぼ全てが流路に集中していることが分かる。この流路は他に動物骨等も多量に出土しており、付近には焼土等の痕跡も見られなかったため、恐らく洪水等で流入し一括埋没したものであると考えられる。

第6表 出土鉄器一覧表

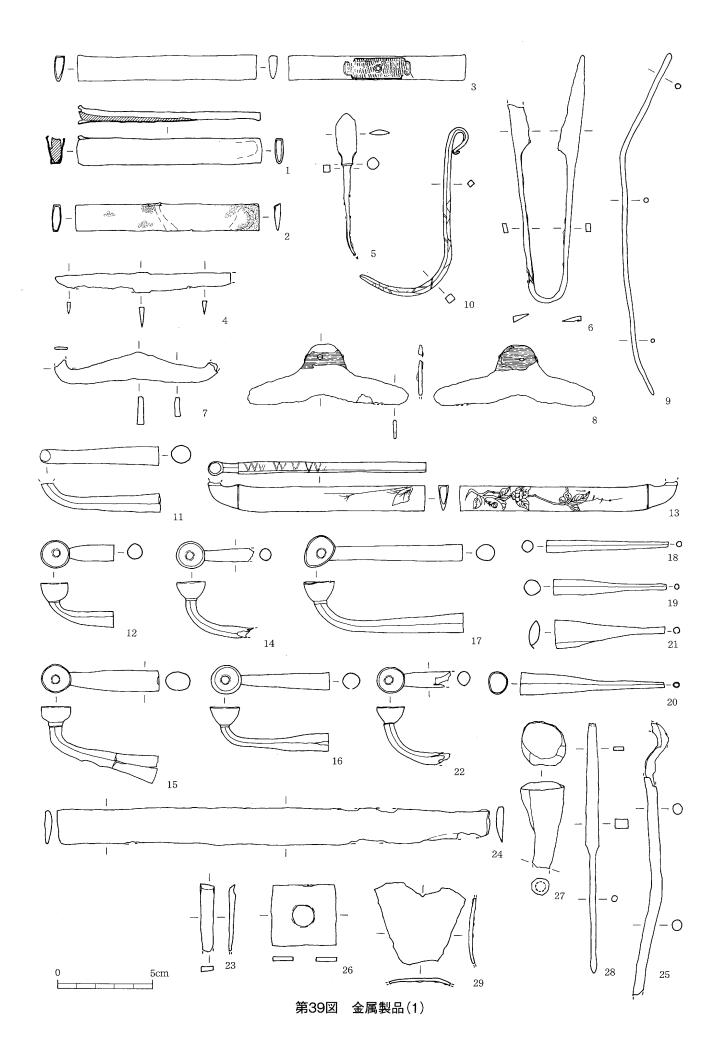
第6	表	出土	.鉄器	器一覧表 _						
		_{ID} 検出					法	:量		
	番号	ID	加加	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
実測	1	209	2	検出面	小柄	62. 6	20. 3	4. 2	18. 7	
実測	2	352		検出面	小柄	97. 4	14. 4	5.0	12. 7	
実測	3	537		排土	小柄	96.0	13. 7	13. 7	31. 2	
実測	4	353	4	検出面	刀子	93. 6	11.1	2. 9	6. 0	
実測	5	333		検出面	匙	76. 9	12. 6	6. 2	6. 2	飯匙
実測	6	229		土2	はさみ	126. 3	11. 3	5. 6	7. 2	TT3 No, 04 R228
実測	6	230	3		はさみ	112. 2	10. 0	6. 2	7. 3	TT3 No, 05 R228
実測	7	293		検出面	火打金具	86. 2	16. 1	4. 9	12. 7	No,14 ねじり鎌式
実測	8	368		検出面	火打金具	85. 5	28. 4	12. 9	12. 4	No, 10 把手部に木質物付着
実測	9	327		検出面	簪	172. 5	3. 0	2. 8	8. 8	
実測	10	233		土2	釣り金具	90. 4	11.1	4. 0	10.0	ТТЗ
実測	11	5		検出面	煙管	61.8	11. 0	10.1	5. 6	雁首 V
実測	12	92		土20	キセル	39. 4	21. 0	15. 2	5. 8	雁首 III
実測	13	196		検出面	小柄	116.0	14. 8	6.3	34. 0	柄 端部に装飾があったと思われる
実測	14	231		土2	キセル	39. 0	28. 7	14. 5	4. 3	TT3 雁首
実測	15	249	3		キセル	87. 1	14. 9	14. 6	8. 4	No, 07 雁首 III
実測	16	253		土24	キセル	59. 9	21.3	15. 3	7.5	No, 11 雁首 Ⅲ
実測	17	319		検出面	キセル	85. 0	23. 3	16. 7	11. 9	雁首 III
実測	18	289	_	検出面	キセル	64. 3	17. 3	17. 2	5. 3	No, 08 吸口 IV~V
実測	19	336	_	検出面	キセル	59. 5	8. 7	8. 7	3. 4	吸口 V
実測	20	348	_	検出面	キセル	76.7	11. 9	10.8	5. 4	吸口 IV~V
実測	21	349		検出面	キセル	58. 4	15. 0	7.4	2. 9	吸口 IV~V
実測	22	525		トレンチ	キセル	42. 4	30.0	14. 3	4. 3	雁首 III〜IV
実測	23	398		検出面	楔・鏨か?	35. 9	8. 3	3.7	4. 4	
実測	24	197	_	検出面	刀身	230. 0	20. 5	7.5	83. 7	
実測	25	351	_	検出面	火箸か	145. 4	9. 7	6. 4	25. 3	
実測	26	356		検出面	留め金具か?	35. 9	33. 1	3. 1	15. 4	
実測	27	357	4	検出面	鑿か?	47. 0	27. 4	25. 0	63. 0	
実測	28	381	5	検出面	鑢か?	133. 5	6. 9	5. 5	14. 9	No, 20
実測	29	538	_	調査区外	不明	44. 4	44. 3	2. 2	8. 5	
拓本	1	1	1	検出面	寛永通寶	23. 6	23. 5	1.1	2. 7	新 初鋳年1668年
拓本	2	191	2	検出面	寛永通寶	24. 4	24. 4	1.0	3.0	新 初鋳年1668年
拓本	3	192	2	検出面	寛永通寶	23. 0	22. 9	1.1	2. 8	新 初鋳年1668年
拓本	4	193	2	検出面	文久永寶	27. 6	25. 7	1.1	3.0	初鋳年 1863年
拓本	5	195	2	検出面	寛□通寶	25. 3	17. 0	1.2	2. 3	新(背:文) 1668年 下部1/3程打 ちかかれている
拓本		234		土4	寛永通寶	24. 7	24. 7	1.6	4. 1	古 初鋳年1626年
拓本	+	235		土4	寛永通寶	24. 4	24. 4	1.4	3. 3	古 初鋳年1626年
拓本	1	236		土10	寛永通寶	25. 1	25. 0	1.1	2. 9	新(背:文) 初鋳年1668年
拓本	_	240	_	上17	寛永通寶	24. 7	24. 4	1.3	3.5	古 初鋳年1626年
拓本	+	241		土17	寛永通寶	25. 0	24. 9	1. 2	3. 4	古 初鋳年1626年
拓本	+	254	_	土17	寛永通寶	24. 2	24. 2	1.1	3. 2	No, 12 古 初鋳年1626年
拓本	+	266		土45	寛永通寶	24. 6	24. 6	1.7	4. 0	古 初鋳年1626年
拓本	+	267		土48	寛永通寶	24. 2	24. 1	1.1	3. 2	No, 03 古 初鋳年1626年
拓本		268		土48	寛永通寶	24. 7	24. 5	1.5	4. 0	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	1	269		土48	寛永通寶	24. 4	24. 4	1.0	3. 2	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	i 	270	_	土48	寛永通寶	24. 3	24. 2	1.1	3. 6	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	+	271	-	土48	寛永通寶	24. 5	24. 3	1.3	3. 0	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	_	272		±48	寛永通寶	23. 9	23. 9	1.6	4. 7	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	+	273	_	土48	寛永通寶	24. 1	24. 0	1.0	2. 9	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	+	288	_	P19	寛永通寶	23. 6	23. 6	1.3	3. 2	No, 04 古 初鋳年1626年
拓本	+	283		P19	寛永通寶	24. 5	24. 4	1.3	3. 6	No, 01 古 初鋳年1626年
拓本		284		P19	寛永通寶	23. 8	23. 7	1.1	2. 6	No, 01 古 初鋳年1626年
1117	1	1 207		1- 10	クロバトベビ 原へ					,

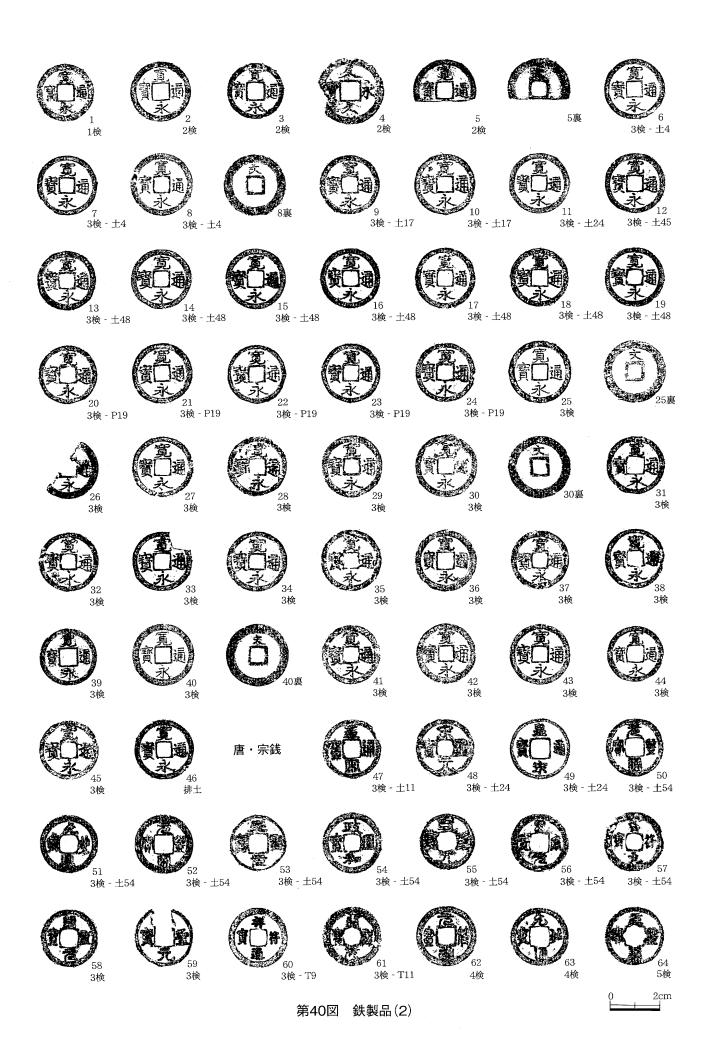
111 / 114 111 / 114 11 / 114		7 0 99 10 56 64	EA TIT				法	·量·		
100	番号	ID	検出面	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
±r-↓-	22	205	146656	D10	海沙洛籍	R SKAM S LAKE HAR	and one are a series	Service Ship At more received		N
拓本	23 24	285 286		P19 P19	寛永通寶	24. 0 24. 3	23. 9 24. 3	1. 5 1. 4	3. 3 4. 4	No, 02 古 初鋳年1626年 No, 03 古 初鋳年1626年
拓本	25	292			寛永通寶 寛永通寶	24. 3	13. 9	1.4	1.7	No, 03 古 初鋳年1626年 No, 12
拓本	26	295		検出面		24. 2	24. 4	1. 0	2.8	
拓本	27	296		検出面	寛永通寶 寛永通寶	24. 0	24. 4	1.0	1. 9	No, 27 古(背:文) 初鋳年1626年
拓本	28	297		検出面	見水畑貞 寛永通寶	25. 0	25. 0	0.9	2. 8	No, 28 古 初鋳年1626年 No, 29 古 初鋳年1626年
拓本	29	298		検出面	夏水畑頁 寛永通寶	25. 0	25. 0	0.9	2. 8	100,29 白 初數平1020平
拓本	30	299		検出面	寛永通寶	25. 3	25. 2	1.4	3. 6	古(背:文) 初鋳年1626年
拓本	31	300		検出面	寛永通寶	23. 8	23. 5	1. 1	3. 2	古 初鋳年1626年
拓本	32	301		検出面	寛永通寶	23. 9	23. 8	1. 3	3, 1	古 初鋳年1626年
拓本	33	302		検出面	寛永通寶	24. 1	24. 1	1.3	2. 9	古 初鋳年1626年
拓本	34	303	_	検出面	寛永通寶	24. 5	24. 5	1.3	3. 6	古 初鋳年1626年
拓本	35	304		検出面	寛永通寶	24. 8	24. 7	1.3	2. 5	古 初鋳年1626年
拓本	36	305		検出面	寛永通寶	25. 0	24. 9	1.1	3. 3	古 初鋳年1626年
拓本	37	306		検出面	寛永通寶	23. 7	23. 6	1. 3	2. 8	古(背:文) 初鋳年1626年
拓本	38	307		検出面	寛永通寶	24. 0	23. 9	1. 3	3. 3	古 初鋳年1626年
拓本	39	308	_	検出面	寛永通寶	22. 9	22. 9	1. 0	2. 9	新 初鋳年1668年
拓本	40	310		検出面	寛永通寶	25. 2	25. 2	1.0	3. 1	新 初鋳年1668年
拓本	41	312		検出面	寛永通寶	24. 1	23. 9	1.6	3. 8	古 初鋳年1626年
拓本	42	313		-	寛永通寶	24. 2	24. 1	1. 1	3. 2	古 初鋳年1626年
拓本	43	315			寛永通寶	24. 6	24. 5	1. 2	3. 9	古 初鋳年1626年
拓本	44	317		検出面	寛永通寶	22. 7	22. 7	1. 0	2. 6	新 初鋳年1668年
拓本	45	318	_	検出面	寛永通寶	23. 9	23. 9	1.1	3. 3	古 初鋳年1626年
拓本	46	535	- 0	排土	寛永通寶	24. 0	·24. 0	1. 2	3. 9	古 初鋳年1626年
拓本	47	237	3	土11	皇宗通寶	24. 3	24. 3	1. 5	3. 5	No, 01 初鋳年1038年
拓本	48	243	3		来通元寶 宋通元寶	23. 6	23. 6	1.0	2. 3	No, 02 初鋳年960年
拓本	49	257	3		皇宗通寶	24. 4	24. 4	1. 1	2. 9	No, 16 初鋳年1038年
拓本	50	274	3		主小四頁 元豊通寶	23. 8	23. 5	1. 2	3. 3	No, 01 初鋳年1078年
拓本	51	275	3		元豊通寶	23. 6	23. 5	1. 1	2. 8	No, 01 初鋳年1078年
拓本	52	276	3	·	元豊通寶	23. 8	23. 8	1. 2	3. 0	No, 01 初鋳年1078年
拓本	53	277	3		天聖元寶	23. 0	22. 7	1.0	2. 4	No, 01 初鋳年1078年 No, 01 初鋳年1023年
拓本	54	278	3		政和通寶	24. 7	24. 6	1. 2	3.5	No, 01 初鋳年1111年
拓本	55	279		土54	_元重寶	22. 5	22. 5	1.7		No, 01 初鋳年758年
拓本	56	280		土54	聖宋元寶	23. 9	23. 8	1. 2	3. 2	No, 01 初鋳年1101年
拓本	57	281		土54	<u> </u>	24. 3	24. 2	1.1	2.7	No, 01 初鋳年1101年 No, 01 初鋳年1009年
拓本	58	291		検出面	紹聖元寶	23. 2	23. 0	1.0	2. 4	No, 11 初鋳年1094年
拓本	59	309		検出面	□聖元寶	23. 6	23. 0	1.0	1.7	天聖元寶か?
拓本	60	343		Т9	祥符通寶	24. 3	24. 2	1. 2	3. 0	No, 02 初鋳年1009年
拓本	61	344		T11	11717 地貝	24. 4	24. 3	1. 2	2. 6	No, 02 初鋳年1003年 No, 02 初鋳年1094年
拓本	62	345			元祐通寶	24. 7	24. 6	1. 1	3. 0	初鋳年 1086年
拓本	63	346		検出面	元祐通寶	23. 6	23. 4	1.1	2. 9	初鋳年 1086年
拓本	64	397	_	検出面	元豊通寶	23. 8	23. 8	1. 1	2. 6	初鋳年1078年
307		2		検出面	寛永通寶	21. 4	21. 3	1.3	2. 0	古 初鋳年1626年
		- 3		検出面	半銭	22. 2	22. 0	1. 2	3. 2	明治15年 1882年
		4		検出面	半銭	22. 0	21. 8	1.2	3. 0	明治8or18年 1875or1885年
		6		検出面	 煙管か?	63. 8	27. 2	10. 2	12. 7	煙管雁首のつぶれたものか?
		7		検出面	風鈴	36. 1	35. 9	31.0	17. 3	V= □ Ub □ 1.5 - 20 4 0 1 € € 2.5 1
		8		検出面	留め金具	58. 0	25. 6	13. 3	4. 7	
		9		検出面	釘	129. 7	12. 4	11. 7	14. 5	丸釘
		10		検出面	釘	73. 4	14. 5	7.8	9. 7	
		11	$\overline{}$	検出面	釘	44. 9	9.5	8.8	3. 6	
		12		土1	寛永通寶	23. 4	23. 3	0. 9	2. 4	新 初鋳年1668年
ļ		13		土1	寛永通寶	25. 6	25. 6	1.8	3. 2	古 初鋳年1626年
		10			見小世貝	۷۵. ۷	۷۵, ۵	1.0	J. L	口 19月9年1020 年

		1			L anding in	VH.	:量::::::::::::::::::::::::::::::::::::		
	番号 ID	検出面	出土遺構	器種			1984 32 5 1 2 3 5 5 5 6 1986 3 5 5 5 6 6 7		備考
0100000 1210101 211110					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	公司 (中国教) 文教教授者、第二人称为 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /
	14		土1	寛永通寶	23. 9	23. 7	1. 9	3. 2	新(背:文) 1738年
	15		土1	釘	52. 3	6. 0	3. 5	3.8	
	16	1	土1	釘	39.3	10.3	6. 2	2. 7	
	17		土1	釘	42.0	9. 6	6. 2	1.6	
	18		土1	釘	22. 2	8. 2	4. 2	1.5	<u> </u>
	19		土2	楔・鏨か?	73. 9	19.8	6. 9	23.0	
	20		土5	<u> </u>	56. 1	7. 2	4.9	3. 2	
	21		土5	<u> </u>	29. 8	8. 6	3.5	1.0	
	22		土7	釘	30. 5	9. 4	8.8	3. 0	
	23		土7	<u> </u>	36. 4	5. 9	5.0	0.8	
	24		土18	留め金具	152. 6	40. 7	30.0		No,01 木質物の留め具
	40	_	土18	鉈か?	164.5	65. 8	6. 2	250. 7	No, 07
	41	_	土18	小柄	75. 5	16. 4	4. 5	9, 9	刃部か?
	42	_	土18	釘	79. 1	11.5	10.6	24. 6	The second secon
	75		土18	不明	165.0	36.8	35. 6	374. 7	棒状
	76		土18	不明	109.5	55. 9	37. 2	242.1	棒状
	77	_	土18	留め金具	92. 1	36. 7	16. 7	93. 6	留め金具か?
	78		土18	鋏か?	116.5	21. 7	12. 2	72. 1	
	79		土18	留め金具	61.6	37. 7	10.8	45. 7	留め具用の穴あり
	80	_	土18	鎌か?	49. 1	27. 3	8.6	38. 5	
	81		土18	鎌か?	62. 4	24. 4	5. 1	19.0	
	82		土18	釘	51. 7	8. 5	7.0	9.3	
	93		ピット24	釘	36.6	3. 9	3. 3	0.7	鋲
	94		ピット24	釖	22. 9	7. 2	5. 6	0.8	鋲
<u> </u>	95		P25	釘	83.8	8.8	8.0	7.3	
<u> </u>	96		P25	釘	81. 1	9. 4	6.5	9. 4	
	97		P25	釘	49.5	6. 3	4. 9	2. 2	
	101	_	P26	釘	46. 7	9. 2	9.1	4. 9	
	174	+	P28	不明	58. 1	28. 7	22. 0		No, 01 金具
	175	_	集石3	留め金具	84. 6	25. 0	13. 3	105.0	
	176	_	集石3	留め金具	84. 7	20. 4	4. 5	24. 3	
	177		集石3	釘	56.9	5. 9	5. 7	4. 0	
	178	_	集石3	釘	54.0	4. 0	3. 9	2. 2	
-	179		集石3	不明	19.4	18. 9	6. 5.	13.5	四角い塊
	180	_	集石3	釘	20.0	10.1	9. 9	2. 8	
	181	_	検出面	ナイフ	114.8	31.0	8.4	88.3	E15, S3 肥後の守か?
	182		検出面	釘	51. 2	4.4	3.4	1.4	鋲 東西部 黒色土層
	183		検出面	釘	36.6	7. 1	3.7	1. 3	鋲 東西部 黒色土層
	184	_	検出面	釘	44. 9	9. 0	8. 1	13.0	南西隅
	185		検出面	釘	38. 8	5. 7	5. 5	3. 9	南西隅
	186		検出面	釘	33. 1	3. 3	3. 1	1.0	南西隅
	188	_	検出面	不明	8. 2	5. 4	5. 1	0. 2	
	189	_	検出面	半銭	27. 8	27. 8	1.4	6. 6	明治16年 1883年
	190	_	検出面	寛永通寶	22. 5	22. 5	1.3	2. 3	古 初鋳年1626年
	194		検出面	(寛永通寶)	27. 0	19.0	1.7	1.5	新(背:波11) 初鋳年1769年
	198		検出面	鑿か?	117.0	10.5	5.0	20.3	
	199		検出面	釘	50. 9	9. 2	5.8	4. 2	
	200	_	検出面	釘	49.0	6. 7	4.3	2. 6	
	201		検出面	釘	46. 2	6. 6	5. 1	3. 9	
	202		検出面	把手か?	29. 5	27. 7	4.0	5. 1	
	203	_	検出面	釖	26. 1	7. 8	6.1	2. 1	
	204	_	検出面	釘	27. 7	6. 2	6. 2	1. 2	
	205	p 2	検出面		18. 7	8. 3	5. 3	1. 5	

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			検出	110 1 Jan 144	BH 1445		法	畫		
	番号	ID.	富	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
200 / 010 / 20	4.5 6.5 7	206	2	検出面	釘	14. 4	5. 4	5. 2	0.8	
		207	-	検出面	火箸か?	143. 2	6. 8	6.8	24. 6	
		208	_	検出面	把手か?	109.8	7. 9	7.4	22. 8	
		210		検出面	刀身	27.7	24. 5	6. 1	16. 1	
		211		検出面	鎹	43. 9	8. 2	7. 4	9.8	
		212		検出面	 釕	38. 1	7. 9	8. 3	5. 4	
	-	213		検出面	釖	57.8	7. 3	4. 0	2. 7	
		214		検出面	釘	32. 9	7.8	5. 3	1.5	
		215		検出面	釘	100.1	6. 0	5. 9	11. 5	
		216		検出面	鎌	68. 6	49.9	4. 6	29. 0	
		217		検出面	鎌	47. 3	43. 9	4. 3	14. 2	
		225	_	石列1,2	寛永通寶	24. 5	24. 4	1.3	3. 4	TT1 新 1668年
		226	_	溝状遺構	寛永通寶	24. 0	23. 8	1.1	2. 4	TT3 古 1626年
		227		土2	鎌	143. 2	52. 6	3.8	30. 6	TT1 No, 05
\neg		228		土2	釘	84. 6	12. 0	4. 3	7. 3	TT3 No, 02
		232		土2	寛永通寶	24. 1	23. 9	1.7	3. 4	TT3 古 1626年
	-	238		土17	釘	44. 4	5. 2	3. 2	1. 5	No, 07
$\neg \uparrow$		242		土19	釘	21. 1	4. 8	4. 4	0. 7	
		244		土24	釘	109.5	11. 2	10.8	14. 6	No, 04
		245		<u>+24</u>	火箸か?	161.0	8. 2	7. 2	20. 8	No, 05
$\overline{}$		246		土24	火箸か?	97.8	9. 1	8. 1	15. 5	No, 05
		247	3		火箸か?	56. 3	12. 2	8.3	8. 8	No, 05
		248		土24	刀子か?	30.3	14. 2	6.8	4. 6	
$\overline{}$		250	_	土24	刀子か?	48. 4	17. 1	5. 7	7. 1	
		251		土24	キセル	35. 5	12. 0	11.3	2. 1	No, 10 雁首か?
		252		土24	キセル	28. 4	7. 5	6. 6		No, 10 雁首
		255		土24	寛永通寶	23. 9	23. 8	1.1	3. 6	No, 13 古 初鋳年1626年
		256		土24	キセル	42. 8	11. 2	11.0		No, 14 吸口 IV
		258		土24	釘か?	63. 8	4. 0	3. 8	3. 0	
		259		土24	釘	29. 8	15. 6	6. 0	3. 7	
		261		土27	釘	70. 3	18. 0	10.0	8. 8	TT No, 01
		262		土34	寛永通寶	23. 3	23. 3	0.8	1. 9	新 初鋳年1668年
		263		土37	キセル	57. 5	9. 2	8. 5	2. 0	吸口 IV
		264		土41	キセル	57. 0	10. 2	9. 6	2. 7	吸口 IV
		265		土43	釘か?	40. 4	6. 7	5. 8	1. 1	
		282		土64	釘	96. 3	21.4	7. 8	12. 4	
		287		P19	寛永通寶	23. 9	23. 9	1. 2	3. 4	No, 04 古 初鋳年1626年
		290		検出面	小柄	98. 0	16.5	10.0	26. 6	No, 10
		294		検出面	寛永通寶	25. 3	25. 3	1.1	3. 2	No, 18 新(背:文) 1668年
		311		検出面	寛永通寶	24. 7	24. 6	1. 1	3. 3	古 初鋳年1626年
		314		検出面	寛永通寶	23. 3	23. 3	1.3	3. 0	古 初鋳年1626年
		316		検出面	寛永通寶	23. 8	23. 7	1.5	3. 2	古 初鋳年1626年
		320		検出面	釘	87. 3	15. 9	6.4	9. 9	Tri Committee Co
		321	_	検出面	釘	49.0	19.5	6.8	6. 0	-
		322	-	検出面	釘	43.8	6. 9	6.1	2. 8	
		323		検出面	釘	22. 7	4. 7	4. 6	1. 1	
		324	_	検出面	刀子か?	55. 8	17. 0	5. 7	11.0	
		325		検出面	釘	46. 4	5. 8	3. 9	1. 5	
		326		検出面	釘	27. 0	6. 8	6.8	2. 6	
		328		検出面	鎌か?	43. 0	34. 7	4. 3	10. 8	
		329	_	検出面	小柄	41.8	20. 8	8. 0	8. 8	
1 1	i	1 023			10 ml (g					
		330	3	検出面	釘	49.0	17.0	10. 2	5.0	

100 100 100 100 100 100 100 100 100 100	番号	ID	検出	出土遺構	器種		浩	量		
2000	角を	LD	検出 面	山上場件	407里	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
		332	3	検出面	釘	64. 3	5. 7	4. 2	5. 2	
		334	3	検出面	不明	39. 9	13. 9	6.4	4. 3	
		335	3	検出面	釘	25. 4	4. 5	4. 4	1.0	
		337	3	検出面	キセル	79. 2	11.4	6. 1	5. 2	雁首
		340	3	T11	キセル	17.8	17. 8	10. 3	3. 1	雁首 Ⅲ
		341	3	Т3	釘	79. 4	5. 0	3. 5	4. 1	
		342	3	T8	釖	59. 1	9. 5	4. 7	9. 4	
		347	4	検出面	開元通寶	23. 1	23. 1	1. 2	1. 9	初鋳年 621年
		350	4	検出面	釘か?	41. 1	9.6	9.4	9. 7	
		354	4	検出面	釘	45. 0	5.0	4. 0	1.4	
		355	4	検出面	留め金具か?	52. 2	34. 9	3. 2	15. 4	
		526	5	トレンチ	鑿か?	88. 7	13. 2	3.8	10. 4	
		531		東部トレンチ	寛永通寶_	24. 5	24. 5	0.9	2. 4	新 初鋳年1668年
		532		東部トレンチ	リング状	18.8	18. 8	2.0	1. 2	
		533		東部トレンチ	キセル	16. 2	15. 8	8. 9	2. 3	雁首
		534		東部トレンチ	釘	84. 3	13. 0	6. 4	13. 7	
		536		排土	銭	22. 2	22. 2	0.8	2. 2	文様不明 胴銭





5 自然遺物・骨類

今回の調査では5点の植物類、22点の自然遺物、23点の骨類が出土している。各検出面通じて出土しているが、自然遺物は第II・III検出面、骨類は第III・V検出面に集中して見られた。

植物類

植物類は第Ⅲ検出面から出土している。5点の内2点がクルミ、2点が桃の種、1点が炭化したコナラであった。恐らくクルミ・桃等は食用にされたものであろう。

自然遺物

第II検出面では3点出土している。内2つはハマグリであり、残る1つはアワビであった。いずれも破片である。第III検出面では19点の貝が出土した。その内訳はハマグリ7点、アサリ5点、ホタテ4点、アワビ1点、サザエ1点である。ハマグリ、アサリ、ホタテなどは二枚貝であるが全て左右の殻が外れた状態で出土しているため、片殻のみで1点と数えた。これらの貝は総じて食用に好まれる物であるため、食されて捨てられたものである可能性が高いが、土47出土のホタテには穿孔らしき痕がみられた。ホタテは貝杓子として用いられることがあるため、このホタテも貝杓子として使用された可能性が考えられる。

骨類

骨類は全て動物の骨であった。ほとんどは破片での出土となるため種の判別は困難であったが、出土した 23点のうち14点のみ種が同定できた。種としてはウマ、イノシシ、シカなどが主であったが、ただ1点イヌ の上顎骨がみられた。また、シカの角が4点みられたが、内1点には基部に切痕が、他の1点には基部に擦痕 がみられた。これらは何らかの目的で加工、使用されたものと思われる。

また、特筆すべきは第V検出面出土の骨類である。第V検出面出土の骨類はほぼ全てが北側の流路から出土している。これらの骨もほぼ全て破片での出土であるが、その破断面は鋭利であり一部化石化しているものがみられるため、この場で捨てられたものではなく別の場所から流されてきた後埋まったものであると考えることができる。

5 調査のまとめ

松本城を中心として広がる松本城下町。その北東部に親町の一つとして東町が存在する。今回の調査地はその東町の北部に位置している。調査地近辺の様子は幾つかの絵図資料に記載がみられ、おおよその変遷は推察することができる。それに拠れば調査地近辺は商人地であり、調査範囲には中央に糀屋、時期によっては北側に塗師屋、南に飴屋や個人宅があったと記されている。このことを踏まえて調査結果をみると、まず注目すべきは第Ⅲ検出面にみられた石組み遺構であろう。径2m40cmの円形とおよそ2mの方形が組み合わされた形状の石組みは深さ1m40cmあり、円形部分には火を焚いていた痕跡が明瞭に残っていた。この石組みはその形状や類例から糀電であると推察できる。第Ⅲ検出面は出土した遺物などから17c中葉~18c前葉に帰属すると考えられるが、絵図資料において調査地で糀屋の記載が確認できるのが元禄10(1697)年から享保9(1724)年であるため、この糀電の時期は絵図資料に糀屋の記載がみられる時期とほぼ一致する。まさに絵図資料と符合する調査結果となった。なお、この糀電は廃絶後石を崩して粘土で埋められていた。この粘土は調査区北東部に広くみられたため、第Ⅱ検出面を整地する際に広く粘土で覆いながら封じたものと思われる。

さて、調査地が糀屋を中心に3軒にまたがっていたことは先に述べた通りであるが、その町割はどのように変遷したのであろうか。年代順に変遷を追ってみたいと思う。まず、第V検出面では調査区北端に東西方向に流れる自然流路が確認できた。そしてそれに直交する形で幅約1m、深さ55cm程の台形状の溝が南北方向に伸びていた。溝には流水の痕跡が認められず、溝を境に西側に柱穴が多数みられるためこの溝は区画溝である可能性が高い。城下町絵図をみると東町は東西に長い短冊形の町割となっているため、仮にこの溝が区画溝であるとするならば城下町絵図にみられる町割とは方向や位置が異なる。第V検出面は出土遺物から16c末~17c前半であると考えられるが、松本城下町は天正13年(1582)年に小笠原貞慶が大普請を行ない親町3町もこの際に町割されたといわれているため、第V検出面は松本城下町成立以前の区割りである可能性が考えられる。

続く第Ⅲ検出面では東西方向の間知石列が調査区北部で検出されており、調査区南部には同じく東西方向に段差が生じていた。この段差は恐らく整地の際に生じたものであると思われるため、この段差付近に屋敷境が存在していた可能性が考えられる。第Ⅱ検出面の段階になると屋敷境を示す間知石列はより明確に把握することができ、調査区北部・南部に計3本の間知石列が確認できた。この結果、調査区は3軒の屋敷にまたがっていることが分かる。第Ⅱ検出面は18 c 中葉~後葉と考えられるが、この頃の絵図には屋号や業種が記載されていない。調査の中では南部に鍛冶炉がみられ、中央部でも鞴の羽口が数点出土しているので中央部南部共に鍛冶屋となっていた可能性も考えられるであろう。

このように第II・III検出面の段階では城下町絵図にみられる東西に長い短冊形の町割に沿った方向で屋敷境が設けられている。そのため、第V検出面段階($16\,c\,$ 末~ $17\,c\,$ 前)では南北方向に区分されていた町割が第III検出面段階($17\,c\,$ 中~ $18\,c\,$ 前)では東西方向に変遷していることがわかる。このような変遷は松本城下町の変遷に伴うものであり、城下町の成立や文化を考察する上で貴重な資料となり得るであろうと思われる。

- 88 -

写真図版

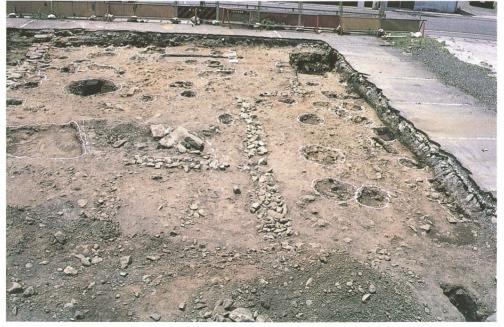
I 検全景 上が西



II 検全景南部 上が西



II 検全景北部 上が西





Ⅲ検全景 上が北

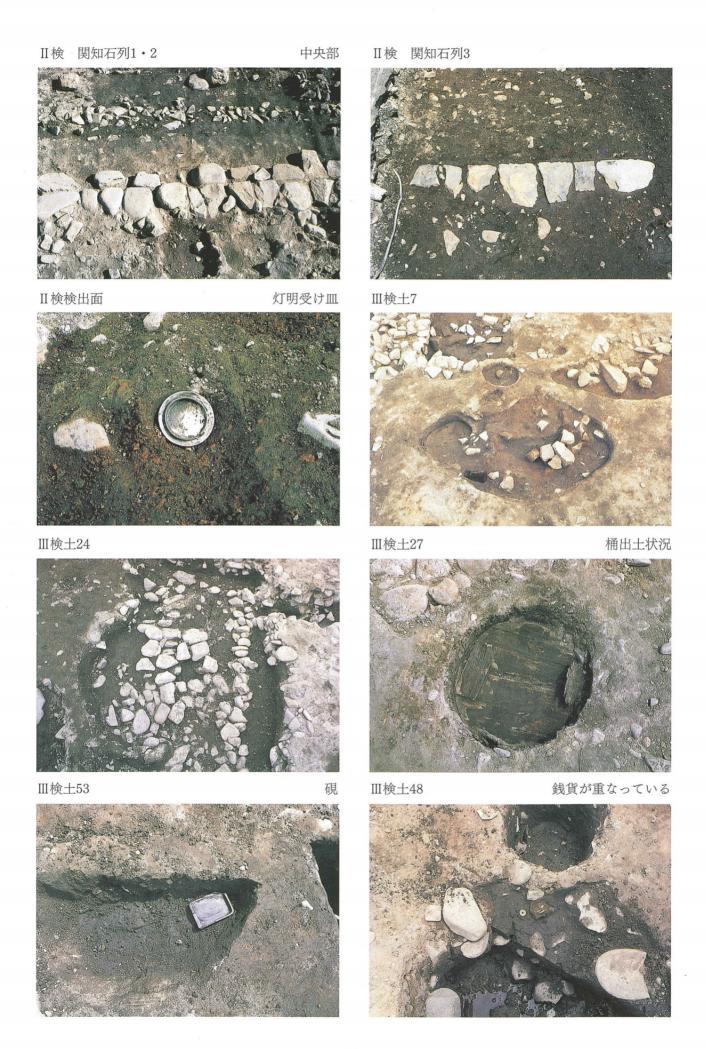


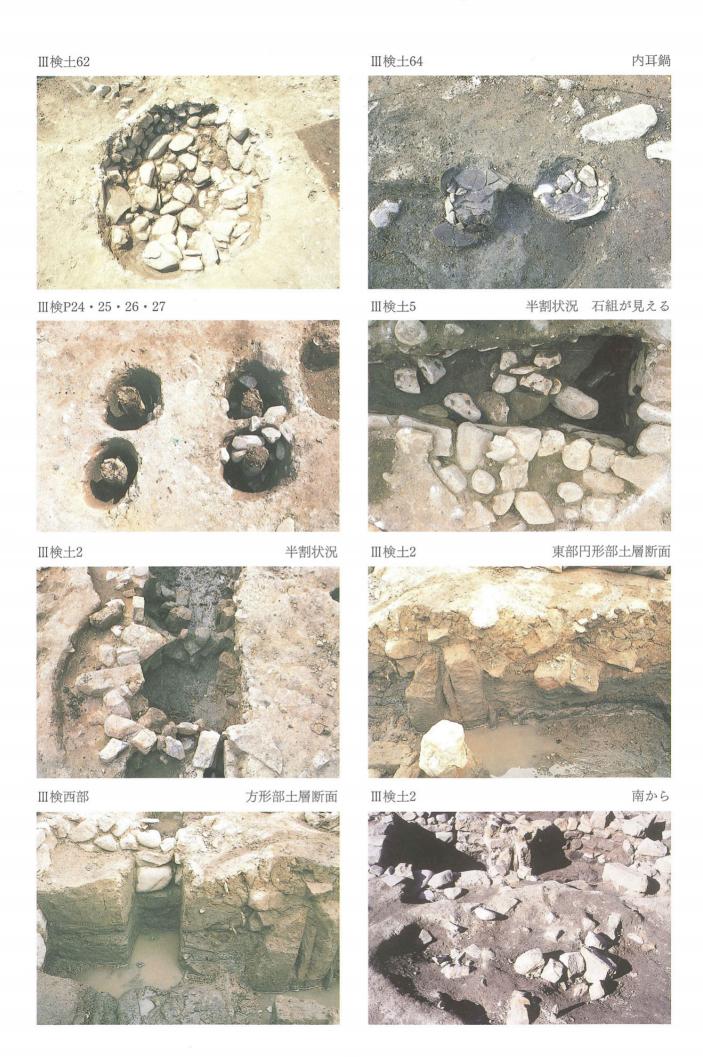
Ⅲ検土2 糀竈と思われる

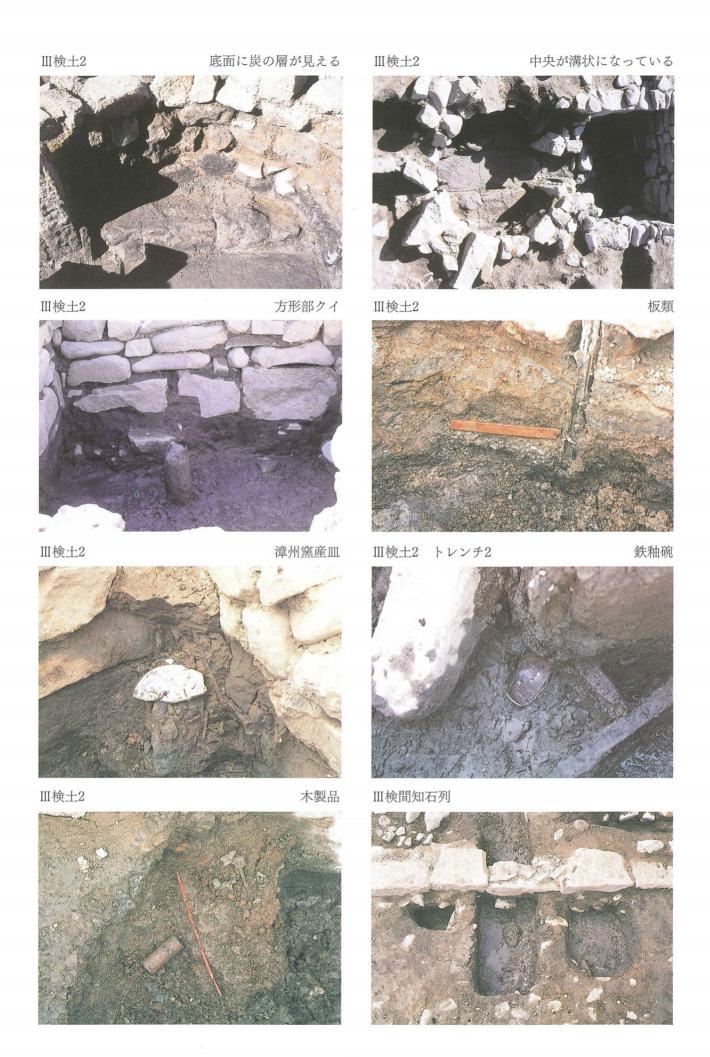


V検全景

II 検土1 II 検土1 乗燭 II検南西部 出土状況 II 検土18 蓋 内側にベンガラが付着している 木材出土状況 II 検P32 柱材が残っている II検P25 II 検集石2 II 検石列3







V検土5







V検溝1











作業風景



現説風景























木42上面

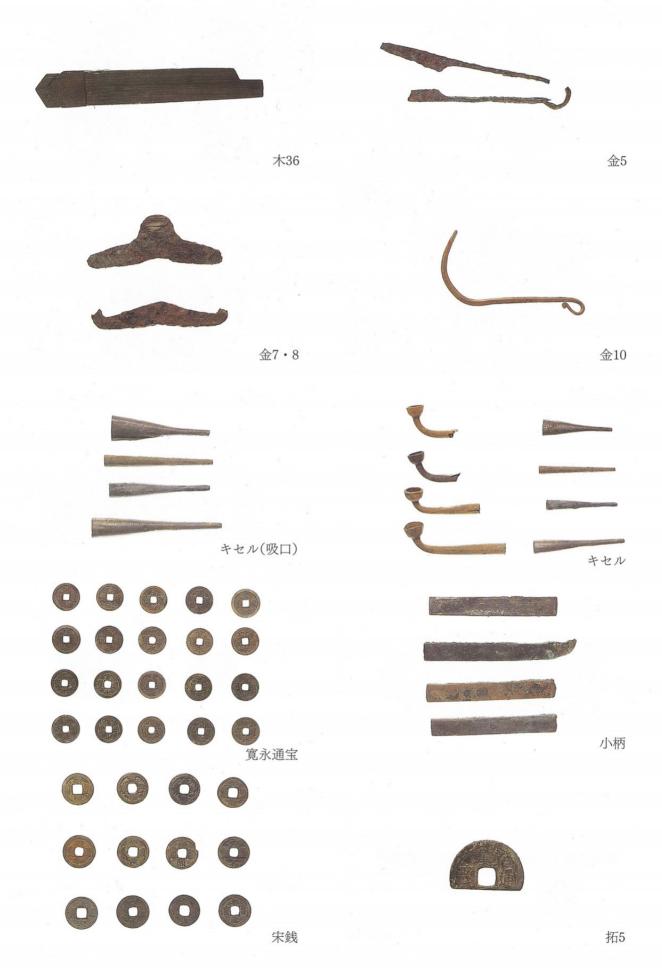






木42左側面

木8



長野県松本市 松本城下町跡東町 第3次 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもと	:し まつもとじ	じょうかまちあと	ひがしまれ	っだい3l	じ はっくつちょ	うさほうこくし	Ļ				
書名	長野県松本市 松本城下町跡東町 第3次 発掘調査報告書											
副 書 名												
巻 次												
	松本市文化財調査報告											
シリーズ番号												
A Property of the Control of the Con	竹内 靖長、櫻井		貴広									
編集機関	松本市教育委員											
所在地	,		5大手3-8-13			-34-3000(代)						
月14至,月15	(記録・資料保管:			90-0823	松本市大	字中山3738-1	TEL0263-	-86-4710)				
発行年月日	2006(平成18)年3		成17年度)				No. 44 10 - 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10					
ふり が な	ふりがな		- *	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因				
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		NO.	M-d-EF-XATIL-1						
まつもとじょうかまちあと 松本城下町跡 ひがしまち 東町	ながのけんまつもとし 長野県松本市 じょうとう ちょうめ ばん 城東2丁目3番	20202	157	36° 14′ 24″	137° 58′ 31″	2004.05.17	I 〜V検 計570㎡	東部地区コミュ ニティ防災広場 整備事業				
所収遺跡名	種 別	主な時代		な遺構		主な遺		特記事項				
松本城下町跡東町	屋敷跡(町屋)	戦国江戸	土坑 ピット 溝 溝状遺構 集石 石列 間知石列		118 141 2 3 3 5 4	土器·陶磁器 木製品、石製 骨角器、金属 遺物	П.	松本城下町跡 東町の3度目の 調査である。第 Ⅲ検出面では 釜と思われる石 組みが出土した。				

松本市文化財調査報告 No.185 長野県松本市

松本城下町跡東町

-第3次 発掘調査報告書-発行日 平成18年3月24日 発行者 松本市教育委員会 〒390-0873 長野県松本市大手3-8-13 (5F) 印刷 株式会社 精美堂印刷

